読書科学

第 4 巻 第 2 号（通巻 第 12 号）昭和 34 年 11 月 15 日発行（年 4 回 発行）
昭 和 31 年 12 月 27 日 国鉄特別扱雑誌 第 3373 号

非読書人的読書人……土岐 善麿
読書中の情緒の測定……宇留野藤雄・阪本 敬彦
読書資料の連関性ということについて……飛田 文雄
読み易さの研究……波多野完治・小笠原生子
小中学生の中断読書について…岡本 奎六
小学生の漫画の興味……阪本 一郎

日本読書学会編集

12

牧 書 店 発 行

目　次

・非読書人的読書人〔読書時言〕　土　岐　善　麿　1

原　著

・読書中の情緒の測定　宇留野藤雄・阪本敬彦　4
・読書資料の連関性ということについて　飛田文雄　11
・読み易さの研究―クローズ法の応用―　波多野完治・小笠原生子　16
・小・中学生の中断読書について　岡本圭六　24
・小学生の漫画の興味　阪本一郎　32
・読書力診断テストにあらわれた中学生の国語力　山崎一朗　41
会員随想　46

資　料

・マスコミの中の読書とその調査について　48
・高校生は流行書をどう読んでいるか(2)　53
・子どもの本における物語と絵について（抄訳）　59
・読書時潮　62
会報　64

日本読書学会役員

会長（理事長）石山脩平
副会長　阪本一郎
常任理事　大内茂男　滑川道夫　波多野完治　平沢薫　深川恒喜　松村康平　村石昭三　望月久貴
監事　裏田武夫　長島貞夫
理事　井口忠司　伊藤英一　伊藤正勝　岡本圭六　尾鍋輝夫　加賀栄治　蒲池正夫　小針孝哉　駒田錦一　佐藤宏之助　佐藤泰正　佐藤貢　島崎敏樹　清水正男　荘司雅子　竹内実次　花田哲幸　松本茂　嶺光雄　三宅千代二　村上俊亮　森田宗一　弥吉光長　渡辺茂男　渡辺正亥　渡辺やすえ
「読書科学」編集委員　裏田武夫　大内茂男　岡本圭六　阪本一郎　滑川道夫　平沢薫　深川恒喜　松村康平　村石昭三　望月久貴　渡辺茂男

非読書人的読書人*

土岐善麿**

こういうマスコミ時代の騒音雑音の中で，読書生活といわれるものがどういうふうに一般に営まれているのであろうか。あとからあとから，いわゆるベストセラーズに追われ，月刊誌週刊誌に送り迎えられながら，新聞は朝刊にも夕刊にもいちおう眼を通さなければ，一種の不安を感じるということになるわけであるが，さらに，そういうものを読む作業，あるいは次ぎ次ぎと読みすてる過程が，果して読書生活といえるかどうか。そう思うと，それにもまたかえって一種の不安が感じられてくる。

いったい読書というものは，現代においてどういうものと考えられているのか，また読書人というのはどういうものなのがなど，そのことを知る機会として，最近たまたま刊行された阪本一郎教授の新読書論をひらいてみたが，その中に，読書人の性格と題する一章があって，いろいろと分類されてあった。すると，その最後のところに，「老衰型」の非読書人というタイプが挙げてあり，ハハア，ぼくじしんは，これに当てはまるのかなと気がつくとともに，それは老衰によって「自閉型の非読書人」になるものと解されるということなので，そのタイプのところへ立ちかえってみると，それは「自分で考えたことに固執して，客観的な他の情報に耳を傾けようとしないタイプ」であり，それだけに我が強く，その考えは主観的で，偏見におちいりやすく，独断的で，独善的で，しかも内容が貧弱である。だが当人は，そうとは気がついていないということである。

著者は，この自閉的ということについて，更に分析を試みているが，すると，当人がそうとは気がついていない，という点において，ぼくは，いくらかまだ完全にはこうしたタイプになりきってしまっていないのかなとも考え，あるいはまたそう考えることがすでにいわゆる自閉的なのかもしれず，すでに老境に入ってはいるものの何とか「自己充実の要求」だけはつづけて，寿命が尽きたら，そこでストップということにしたいと思った。

たしかに一部の政治家や官僚や社会運動家などといわれるものの中に，「自閉的」なものがあることは否み難かろう。それが「自閉的な非読書人」になってしまっていることも，おそらくは，現実のようである。そういう連中が，ベルグソンがいったように，「思考者として行為し，行為者として思考せよ」というところへ進むことは，なかなか困難な事情があるかもしれないが，それでもできるだけいわゆる「外向的読書人」のほうへ近づける必要があり，それが実行されなければ，社会の新しい民主化は遂げられないことになりそうである。

---

* A Reader Who is a Non-reader

**Zenmaro Toki

みずからを導かしめることが，いくらかでも「おたがいの」幸福であり，「危機」を避けることにもなるのではあるまいか。

そこで阪本教授も，さまざまな数字や研究を資料として，読書指導に心を尽くされているが，結局のところで，「何か一つ，重読書の材料」，すなわち「座右の書」をもつことをすすめていられる。「そういう本を発見したい」ことは，はじめから読書人的なものならいうまでもないし，非読書人にとってもそれがあれば，そう量において気のひけることもなく，質でいくと泰然たるところをみせ得るわけである。ただその選び方をあやまると，かえって世間からケイベツされることにならないともかぎるまい。これが江戸時代ならば，常に論語を机上に載せて，「最上至極 宇宙第一」といっていれば，それだけで尊敬されるかもしれないが，ぼくなどが，そのひそみにならったら，なにを，ほんとうには読めもしないくせに，と笑殺されるであろう。しかし，この東洋の古典は，ふるくから「論語読みの論語知らず」ともいわれているものであるし，狩野君山翁のような一流の老学者さえ亡くなられる二十日ほど前に，「この年になってもまだ論語が満足に読めない」と嘆息されたということが伝えられているほどであるから，なかなかたいへんなものらしいが，しかし，あるいはいつか読めるようになるかもしれないと思って「座右」においておくことは，ぼくなどにとってもさしつかえはなかろう。実は，わかる程度にはわかる部分もあり，いつぞや道徳教育のことについて聞かれたとき，そのテキストには論語と「世界人権宣言」とを対置したようなものを作ってみたらどうかと答えて，きまじめ過ぎる心配性のオヤクニンを退却させたこともある。あの宣言の訳文よりも，論語の文章のほうが，わかりいいところもあるように思われる。そしてその論語の中から採るべきものと採れないものとを選び別けることは，現在のわれわれの社会生活にとっても，意義のあることではあるまいかと，これはぼくの老人性を実証することとして，かなりまじめに考えているのである。

学ンデ時ニコレヲ習ウ，マタヨロコバシカラズヤ。朋アリ遠方ヨリ来タル，マタ楽シカラズヤ。人知ラズシテ慍(イカ)ラズ，マタ君子ナラズヤ。

巧言令色，鮮(スク)ナシ仁。

こうしたはじめのところだけでも，あわただしい立身出世主義のマスコミ時代におちついて暮らす態度は得られるようであるし，まったくソツのない巧言令色などに接したら，つきあう気にもならないはずであるし，人間としての信用もおけないし，政治をまかすわけにもいかなくなる。

第一条，すべての人間は，生れながらにして自由であり，かつ尊厳と権利とについて平等である。人間は，理性と良心とを授けられており，互いに同胞の精神をもつて行動しなければならない。

第二条……

第三条……

「座右の書」というものが，阪本教授のいわれるとおり，「読み返すたびに，つねに新しいインスピレーションをわき立たせてくれるもの」である以上，それは「ふるくして」（あるいは，「ふるくても」）常に新しいものであるにちがいない。読みようによっては，すべて新しくなるものといったほうがいいかもしれない。

ところで，その読みかたであるが，これも「ふるい」ところを尋ねてみると，ぼくの「座右の書」の一つである佐藤一齋の『言志四録』の中に

学ヲ為ス，故ニ書ヲ読ム　　という一句があり，すぐつづいて，

ワレ既ニ善ヲ資ルノ心アレバ，父兄師友ノ言，タダ聞クコト ノ多カラザルヲ恐ル。読書ニ至ツテモ

マタ多カラザルヲ得ンヤ。聖賢云ウトコロノ「多聞多見」トハ，意正ニカクノゴトシ。

とあり，そうした読書や多聞多見に対しては，更にじぶん自身の直接の体験，現実の「人情事変」を対比して理念することにつとめ，また「事を処する時に臨みては」，先覚者の説くところを照合して参考にすれば，「事理融会して学問は日用を離れざる意思を見得するにちかからん」と述べている。これはさきに引いたフランスの哲学者の「思考者として行為し，行為者として思考せよ」とまったく相通ずる態度と方法であり，まさしく人間形成の道程に立つことになるわけではあるまいか。

明窓浄机，あるいは孤灯のもとに，独座して，静かに書を読むことの楽しみも陶々たるものであるが，志を同じくするもの数名が集って，何かまとまったものを会読輪講することも，なかなか有益であり，とかくひとりではつづかないような読書の作業がおもわずはかどることもある。斜面草堂における「杜甫を読む会」も，その要求と便宜からはじめられたもので，昭和二十九年二月十四日，雪のふりつもる午後の第一回から毎月一回，これは四人のメンバーを限って，根気よくつづけて来た。杜甫の詩を一つ残さず順々に読んでゆこうというわけで，仇氏の詳註本をテキストに，代表的な諸家の評解や論考などをも併せて読みながら，いちおうわれわれのかってな見解をも述べあうことになるから，そうドンドンとは進まないが，それでも五年あまりのあいだに長短およそ三百首を越えたから，まず五分の一以上は，どうやらいっしょに講読したことになる。このぶんでゆくと，全部を終えるまでにはなお二十年近くもかかることになるが，そうとすれば，これもぼくじしんにとって，延命長寿のたよりとなるかもしれない。途中でおそらくぼくがいなくなれば，あとの若い三人が，追憶をまじえながらつづけるかどうか。そこまでは保証のかぎりでないが，ぼくとしては一回一回を楽しんでいればいいのである。新しい中国でも，杜甫研究は盛んなようで聞一多をはじめ，馮至，伝庚生，蕭滌非，蘇仲翔，浦江清，呉天王，その他の諸家のものがそれぞれ刊行され，四川省から出版された杜甫年譜の類も，まことにたんねんな労作といっていい。こういうものは，新しい出版だけに，われわれも廉価に入手し得られるが，古書となった名著は，たまたま有っても，それを架蔵とする幸運を逸することがしばしばで，これは特殊な文庫や図書館へゆくよりほかはない。それに比べれば，日本のベストセラーズなど，買うとしても安いものと思う。しかし読んでみようかな，と思っているうちに，つい忘却してしまうことのあるのは，やはり「老衰型の非読書人」，あるいは「自閉的読書人」の徴候ということになろうか。

杜甫は今から一千二百年前に死んだが，世界的な詩人としての名は，ますます高い。なぜそういうことになるか。そこのところをじっくりと考えてみることも，現代に生きるわれわれにとっての一つの大きな課題ということになる。ぼくが非読書人的読書人となっているゆえんも，こういうところにあるようである。

読書時言

読書中の情緒の測定*

日本読書学会読書心理研究部会

宇留野藤雄**
阪本敬彦

本稿は1958年に行われた日本読書学会読書心理研究部会の研究のうち読書中の情緒反応に関する研究を詳細に報告するとともに，そこに生ずる問題点を考察しようとするものである。

〔I〕 読書中の情緒の測定法について

読書中に体験する種々の感情，快・不快，とくに怒り・恐れ・悲しみ・嫌悪のような強い感情（情緒）は，読書の効果を決定する要因として，また読み物の適否を決定する要因として古くから重視されてきている。近年，不良図書・雑誌・マンガ等が世に充満するにおよびそれらの〝刺激の強さ〟を問題にすることが多くなってきた。また読み物以外のマスメディアの発達が，人の読書行動を制限することに気づかれ，読み物と他のマス・メディアのもつ情緒誘発性の相違も大きな問題として浮かび上ってきている。このように読書中の情緒体験が問題として強く意識されてはいるが，実際に研究課題としてとり上げられることが少なかったのは研究方法の困難性が主な原因であった。

さて読書中の情緒の測定にあたっては，読み手が何らかの形で外に現わした情緒（情緒表出）をとらえなければならない。ところでこの情緒表出には次の三つの段階のものがあると想定してよいであろう。

(1) 意識的再生的表出
(2) 意識的即時的表出
(3) 意識下的表出

(1)は読み手が，読み終ってから読書中の情緒体験を再生して表出するものであるのに対し(2)は読みの最中に体験する情緒を，即時的に表出するものである。またこれらがいずれも読み手の意識的情緒表出であるのに対し，(3)は読み手の意識下の情緒が生理的表出として現われるものである。

上述の観点から読書中の情緒の測定法として次の三つの方法が考えられよう。

1　読書後の内省記録

読み終ったあとで，感動した場面，おもしろかった場面などを面接・質問紙・感想文などの形式で報告させる。これは従来多く用いられてきた方法で，情緒内容を具体的に知ることができるが，読み手の意識上にあるものだけしか知り得ないし，さらに多くの場合，読み手のもつ読書態度などによって情緒内容がワクづけされ，したがって類型化されることがある。

2　読書中の内省記録

この方法は与えられる文脈の途中で体験する情緒を即時的に報告させるもので，読書後の内省のように類型化されることはより少いが，読み手が読書中にコトバで内省報告をすることは比較的むずかしいので，多くの報告が得がたい欠点がある。この点プログラムアナライザーを用いれば便利であろう。

アナライザーの場合は，読書前にボックスのボタンの押し方について，例えばAの感情がおこった時は①のボタン，Bの感情の時は②のボタン……のように読み手と一定の約束をし，読み手は読書中にそれらの感情をもったときに決められたボタンを押す。機械は何人の読み手がどのボタンを押したかを連続的に記録する。読書中の

* Measurement of Emotional Process in Reading
** Fujio Uruno ; Takahiko Sakamoto (The Reading Psychology Group, JSSR)

内省をとる方法としては，コトバで報告する必要がないため報告が容易にできること，結果が機械的に記録されること，集団で測定できることなどの点で優れた方法である。しかし，ボタンの押し方の約束を実行させることがむずかしいこと，ボタンを押す時の音が他の読み手に影響しやすいことなどには注意を要する。

3　意識下的反応の測定

上述の測定法は，いずれも読み手の意識的な表出をとらえるものであった。しかし，これだけではとらえられない情緒反応，読み手の意識下にある情緒の動き，あるいは読み手が故意に報告しなかったような反応を無視するわけにはいかない。このような反応は，心臓の鼓動・脈博・血圧・呼吸数・皮膚の電気抵抗の変化などの生理的現象におきかえて測定することができる。

中でも皮膚の電気反応の変化，Psycho-galvanic response (P.G.R) の測定は，近年その応用領域が拡大され，映画・ラジオ・テレビなどの効果の測定に重要な役割を果している。

被験者の皮膚の二か所に電極をつけ，皮膚に感じない程度の弱い電流を通じておいて，被験者に視覚的，聴覚的などの刺激を与えると，電流に変化があらわれる（この変化のことをP.G.Rという)。さらにその変化には一定の傾向があり，情緒的興奮の場合には皮膚の電気抵抗が減って電流が多く流れることが知られている。この変化の記録は機械的に，抵抗値の変化を示す曲線の形で行われる。

従来この方法は，単一の刺激によって得られる反応量を測定するために個人実験の形で行われてきた。かかる生理学的定量的実験の結果は数多く報告されているが，それらの報告は次のようなＰＧＲ測定上の問題点を提起している。

第１にＰＧＲは被験者の状態や実験条件などに非常に敏感である。従って個人差が著しく，また同一被験者でも，姿勢，皮膚の温度，疲労度，精神的緊張，室温，湿度など多くの要因によって左右されやすい。そこでよほど慎重に実験場面を整備しないと，測定しようと思う反応がとり出せないことになる。

第２に漸減現象 (diminution, or adaptation) すなわち類似刺激を反復して与えると，次第に電流の変化（ＰＧＲ）が現われなくなる現象がおこる。従って定量的実験の際は，刺激を与える順序を慎重に考慮しなければならない。

第３に得られた曲線の数量化の際の単位が，いろいろ提唱されてはいるが，まだすべてに利用し得る単位が得られない。

上述のような問題点を考慮に入れた上で，ＰＧＲの集団測定法が筆者らによって行われ，すでに映画の観客反応などの研究が報告されている。これらの研究において，さきの問題点をどう考えるかをさらに考察するならば，われわれの研究は単一の刺激に対する反応量を厳密に測定しようとするのでなく，文脈をもった連続的な刺激に対する情緒反応の全体的傾向を知ろうとするものであるから，上述のように実験条件を充分に整えた上で，基本抵抗値の変化をとらえれば充分目的が達せられるであろう。つぎに漸減現象については，一定の文脈の中で次々に提示される刺激は，単なる個々の刺激の反復と同様にＰＧＲの漸減をひきおこすかどうか，我々が過去に得た結果では，少くとも漸減ということは見られなかった。これは同一の場面がかりに二度出現しても，それらは全く異った文脈の中に置かれているためであることが考えられる。数量化については個々の場面の伝導変化率などを計算することにはあまり意味がないとしても，場面または一定時間（例えば15秒）ごとのＰＧＲの出現頻数や抵抗値の変化を全体の流れの中にとらえれば充分である。

このような理由で，集団測定法は，まだ必ずしも充分な基礎的研究がふみこえているとはいい得ないにしても，すでに実用の段階に入っており，この方法は読書中の情緒反応の測定に充分役立ち得るものといえよう。

〔Ⅱ〕 読書とスライドにおける情緒反応の比較

読書心理部会は〝読み物と他のマス・メディアとの感動体験の比較〟を課題としてとり上げた。そして他のマ

ス・メディアとしてスライドを選び，同一作品をスライドで与えた場合と読書させた場合とでは情緒反応がどのように異なるかをしらべた。この結果の概要は日本読書学会第2回研究大会 (1958) に発表し，集録〝読書とマス・コミュニケーション〟(1959, 牧書店) に掲載されたので，ここではなるべく重複を避けながら補足説明を加えて報告を完成するつもりである。

実験材料　〝ひとふさのぶどう〟〝山椒大夫〟の本とスライド，計4種

被験者　学芸大附中2年女子10名ずつ4グループ，同附小5年女子10名ずつ4グループ。

測定方法　前章の観点から，集団PGR，アナライザーを併用し，あわせて実験後に質問紙と作文により内省をとる。アナライザーのボタンの押し方についての教示は，次のように決めた。

①	おもしろい，興味がある，感動した
②	つまらない
③	こわい，いやだ，嫌悪

手つづき　各学年の4グループは次のように配属された。

グループ	作品	先あと
A	ひとふさのぶどう	読書 スライド
B	ひとふさのぶどう	スライド 読書
C	山椒大夫	読書 スライド
D	山椒大夫	スライド 読書

たとえばAグループの10名は先に〝ひとふさのぶどう〟を読み，次にそのスライドを見た。また，たとえば中学生のAグループは，「中学ひとふさのR→S群 (readingが先，slideが後の意」)

整理上の4つの柱

1) スライドと文章では，どちらに反応が多いか (刺激方法による差)
2) 山椒大夫とひとふさのぶどうでは，どちらに反応が多いか (刺激種による差)
3) 読書のあとでスライドを見ると，どちらに反応が多いか。その逆のときはどうか (刺激順序による差)
4) 中学生と小学生では反応にどのような差があるか (年令による差)

結　果　PGR曲線は前章に述べた如く，一定時間 (この場合15秒) ごとのPGR出現頻数および抵抗値の変化の二つの観点から考察された。この研究のように比較を目的とする場合には出現頻数の計測がより有効であり，抵抗値の変化の観察はむしろ場面 (またはページ) ごとの反応状態を分析するのに有効であった。

PGR出現頻数による考察は前出の大会集録にくわしいので，ここでは主要な結果だけにふれる。

15秒間にあらわれたPGR出現頻数の平均 (1)

学生 / 刺激方法	中2	小5
スライド	3.10	3.46
文章	3.38	2.91

15秒間にあらわれたPGR出現頻数の平均 (2)

刺激方法 / 作品	スライド	文章
山椒大夫	3.08	2.83
ひとふさのぶどう	3.73	3.42

※※……1%レベル有意　※……5%レベル有意

(A)スライドでは中学生より小学生，文章では小学生より中学生に反応が多い※※ (年令による差)

(B)中学生ではスライドより文章に※小学生では文章よりスライドに※※反応が多い。(刺激方法による差)

A，Bの結果から次のように言える。読みの力が乏しい場合は一般に文章よりスライドに強く情緒反応がみられる。読みの力が増し，読書が身につくにつれて文章にも反応を示すようになる。読書から得られる情緒反応は読書能力と密接な関係がある。

(C)　〝ひとふさのぶどう〟でも〝山椒大夫〟でも，文章よりスライドの方が反応が多い※(刺激方法による差) これは，マス・メディアとしてスライドが文章よりも情緒誘発性に関する限り優位にあることを示すものと思われる。

(D)　スライドでも文章でも〝ひとふさのぶどう〟の方が〝山椒大夫〟よりも反応が多い※※ (刺激種による差) これは，内容が身近で表現の容易な作品の方が情緒的反応を誘発しやすいことを示すものと思われる。

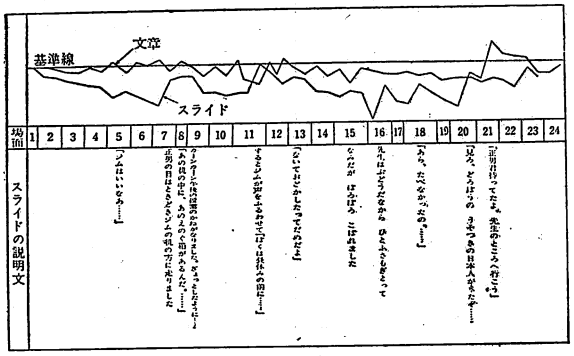
(E) 刺激順序による差は，それほど判然としないが，文章表現・内容などがやさしい場合には，先に経験したものに強く反応する傾向があった。

以上のような結果から，もしここで測定したPGRが読書（またはスライドを見る）時に受ける感動と密接な関係があるとすれば，印刷媒体（printed media）よりも視聴覚的媒体の方がより有効に読み手（または聴視者）に働きかけるということになる。しかしPGRはどちらかといえば反射的な情緒反応であり，読書の感動のように理解・思考を通して体験される高次の感動を反映しているとは考えられない。ここでは〝PGRにあらわれる範囲に於ては〟という条件をつけて上の結果を解釈しなければならない。

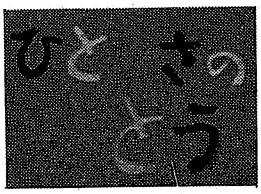
以上はPGR出現頻数の平均値による比較であった。読書中の情緒反応は，このような平均的な値よりも，全体の文脈に応じて現われる情緒の変化の中により多くの意味を持っている。

ここでPGR（抵抗値）の変化を画いてみると図のようになる。これは〝ひとふさのぶどう〟の読みとスライドの曲線で，被験者は小学生，いずれも先に経験した場合（読みはR→S群，スライドはS→R群）の曲線である。横軸は場面（ページ）と時間を示し，縦軸は抵抗値を対数目盛にプロットしてある。ただし図を見やすくするため，縦軸は原図とは逆に曲線が上昇するほど抵抗値が減少即ち情緒反応が大になるように画いてある。

また参考までに，ここに使用したスライドの画面と説明文を示す。実験の際，説明文は女声で録音して聞かせたものである。



抵抗値の変化（ひとふさのぶどう　小5）

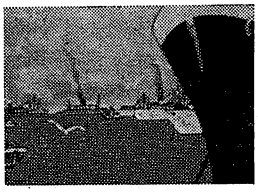


学研カラーグラフ
ひとふさのぶどう
有島武郎 原作
遠藤てるよ 画

(1)ひとふさのぶどう

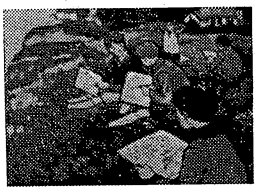
(2)横浜の，山の手の高台に立つと，港が，ひと目で見渡せます。とくに，よく晴れた秋の日などは，ほんとうに，美しい景色を，見せてくれます。
正男は，ここに立つたびに，絵が好きだつた，小学校のころの思い出が，なつかしく，よみがえつてくるのです。

(3)学校は，やはり，この高台にありました。
先生も生徒も，外国人の多い学校です。
そして正男は，学校のいきかえりには，いつも石だたみの坂道をくだつて，いちよう並木のある，海べりの通りを，とおるのでした。

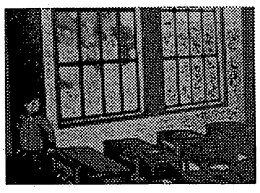


(4)黒い大きな貨物船，色とりどりの客船。正男は，この景色が大好きでした。そして，なんども絵にかいてみました。でも，そのすきとおるような，海の色と，船底の，もえるような赤い色だけは，どうしても，うまくかけないのです。
ぼくのえのぐでは，どうしてもだめだ。正男は，いつか，そう考えるようになりました。

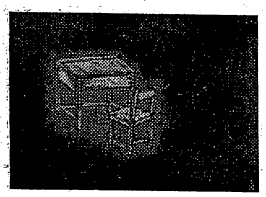
(5)「さようなら——。」
ジムが，二，三人のともだちと，正男のそばを，かけぬけました。手には，新しいえのぐ箱を，かかえていました。
——ジムは，いいなあ——。ぼくも，あんなえのぐ買つてもらいたいなあ。——
でも，正男は，気の弱いこどもでした。



(6)ある，秋晴の日の，写生の時間でした。
ジムは，となりの子と，なにかおもしろそうに，わらつていました。
そばには，あの，新しいえのぐが……。
正男の目は，やきつくように，それを見ていました。胸が，どきどきしてきました。ほしくてほしくて，たまらなくなつてきました。



(7)明るい外とは，反対に，正男の心は，しずんでいました。
昼休みの教室に，残つている のは，正男だけでした。正男の目は，ときどき，ジムのつくえの方に，走りました。



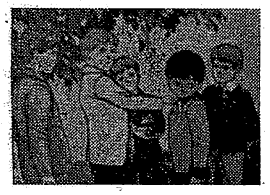
(8)ナイフで，いろいろないたずら書きが，ほりつけてあつて，手あかで，まつくろになつている。あのつくえ。——あのつくえの中に。あのえのぐ箱があるんだ。あの，青と赤のえのぐが。——

(9)「カーン，カーン。」
午後の授業のかねが，なりました。
ぎよつとしたように，立ちあがつて，まるで，ゆめでも見ているように，ふらふらと，ジムのつくえに，近よりました。
あたりを見まわした正男は，手早く，えのぐ箱の中から，青と赤のえのぐを，とり出していました。

(10)——だれか見ていただろうか。ジムは，気がついただろうか。
正男にとつて，午後の一時間が，なんと，長く感じたことでしようか。
授業が終つて，いそいで，教室を出ようとしたとき，
「君，ちよつと，こつちへおいでよ」
正男は，どきん，としました。クラス委員の子でした。

(11)正男は，運動場のすみに，つれてゆかれました。
「君は，ジムのえのぐを持つているだろう。出したまえ。」
「そんなもの，ぼく，持つてやしない。」
正男は，つい，でたらめをいいました。
すると，ジムが，声をふるわせて，
「ぼくは，昼休みの前に，ちやんと調べておいたんだよ。そのときは，みんなあつたんだ。それなのに，昼休みがすんだら，二つもなくなつているんだ。休み時間に，教室にいたのは，君だけじやないか。」

(12)正男は，まつかになりました。
ジムが，いきなり，正男のポケットに，手を入れようとしました。
「いやだよ，いやだよ。」
でも，おおぜいです。ポケットの中からは，ビー玉や，メンコといつしよに，青と赤のえのぐが，出てきました。
——どうして，こんなことをしてしまつたのだろう。ああ，もうだめだ
なみだが，ぼろぼろ，出てきました。

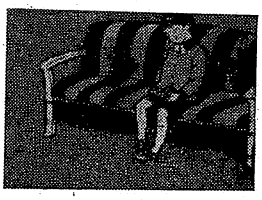


(13)「ないて，おどかしたつて，だめだよ。」
「先生に，いいつけてやろうよ。」
——先生に，ああ，ぼくの大好きな生先に，いいつけられる。——
動くまいとする正男を，みんなはかかえるようにして，ひつぱりました。

(14)「どうしたの。」
先生は，やさしい顔をむけました。
「正男君は，ジム君のえのぐを，とつたんです。」
先生は，少し顔をくもらして，
「それ，ほんとう。」
正男は，こたえるかわりに，わつと，なき出しました。
正男は，自分が，そんないやなやつだと，好きな先生に知られるのが，つらかつたのです。

(15)「もう，えのぐは，かえしたの。」
先生は，みんなを帰してから，静かにききました。
正男は，深く，うなずきました。
「あなたは，自分のしたことを，いやなことだつたと，思つていますか。」
なみだが，ぼろぼろ，こぼれました。正男は，先生に，だかれたまま死んでしまいたいような気持に，なつてしまいました

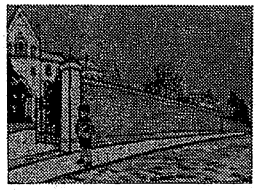
(16)「わかつたわね。もう，なくんじやないの，ね。先生，ちよつと，教室に行つてきますから，ここで，静かにして，いらつしやい。いいわね。
先生は，ぶどうだなから，ひとふさもぎとつて，正男の，ひざの上におきました。



(17)正男は，いつまでも，ないていました。
そして，いつのまにか，そのままねむつてしまいました。
みんな，もう帰つたとみえて，学校の中は，しーんとしていました。

(18)ふと，肩を軽くゆすぶられて，目をさましました。先生のほほえんだ顔が，すぐ目の前にありました。
「あら，たべなかつたの。では，おうちへ持つて，いつて，おたべなさいね。なみだをふいて，さ，先生といつしよに，帰りましよう。」

(19)夕ぐれの海が，目にしみるようでした。
「あしたも，ちやんと，学校へくるのよ。そして，先生に，元気な顔を見せてね。きつとよ。約束しましようね。」
「ええ。」
正男は，いつまでも，先生を見送つていました。

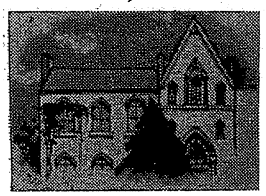


(20)先生と約束はしたものの，つぎの日，学校へ行くのは，気が重いことでした。
——見ろ，どろぼうの，うそつきの日本人が来たぞ，とみんなにいわれるだろう。でも，休んだら，先生はきつと，悲しい顔をなさるだろう。もう一度，先生のやさしい顔を見たい。——

(21)と，どうでしよう。むこうから，ジムがとんでくるではありませんか。
「正男君，まつてたよ，先生のところへ行こう。」
きのうのことなんか，忘れたように，にこにこしながら，いうのです。

㉓「ジム，あなたはいい子。よく，わたしのいったことが，わかってくれましたね。」
先生が，おっしゃいました。
「ジムは，もう，あなたから，あやまってもらわなくてもいい，といっています。ふたりは，今から，いいお友だちになれば，それでいいんです。ふたりとも，じょうずに，あくしゆなさい。」
正男は，少しはずかしそうに，あくしゆしました。

㉔「きのうのぶどうは，おいしかった？」
「ええ……。」
「それなら，また，あげましょうね。」
先生は，まどからのり出して，大きなひとふさをもぎとって，ふたりにわけて，くれました。
白いこなのついた，むらさき色の大つぶのぶどうでした。



㉕ぶどうだなは，秋になると，いつでも，むらさき色にいろづいて，美しく，白いこながつきます。
それをとってくださった先生の，大理石のような，白い美しい手。
正男は，そのときから，前よりも少し，いい子になり，少し，はにかみ屋でも，なくなったのでした。
おわり

まず全体の流れを大まかに考察すると次のようになる。

導入部では，スライドの曲線がほぼ直線的に低下する（これは筆者らの映画の研究の結果と酷似している）。しかし文章の曲線は低下がみられず，むしろ僅かながら上昇を示している。このことは導入部に於ては文章の方がより強く読み手をひきつける，言いかえれば読み手が文章の中に自己をより早く投入させたのではないかと推察される。

中間部ではスライドが二つの大きな山を画いている。第11場面では一時的に文章の曲線の上に出るが，またすぐ低下し第16場面が深い谷となる。それに対し文章は細かい起伏をくり返しながら，ごく僅かな低下傾向を示す。

終結部においてスライドは大巾に上昇するが，文章では終末効果が少ない。このようにスライドと文章と間の情緒反応には大きな相違がみられるのである。

この結果をもって直ちに媒体としての文章的手段とスライド的手段とを云々することはさけなければならない。しかし，少なくとも，ここに得られた結果を読み手の側からみると，原作者が意図した効果を，スライドの曲線は十二分に，ある意味では強すぎる程に再現しているが，文章の曲線はおだやかに再現しているようである。スライド製作者が原作をダイジェスト化し，原作者の意図した効果を短い時間に最大に表現しようとして用いる技巧が，このような結果を生むのであって，ここに文章とスライド化されたものとの本質的なちがいをみることができるのでなかろうか。

これらの結果をさらにこまかに分析考察しよう。

この図から次に言えることは，スライドの曲線は上下の動きが大幅で，急増急減がみられることである。これは視聴覚的刺激が具体的イメージを提供するところに原因が求められよう。

具体的な視覚的イメージの提供によって反応を強めた場面の代表的な例は第7および8場面である。たとえば第7場面では文章の曲線の変化は大きくないが，スライドのそれは著しく上昇している。この場面の読みの文章は次の通りである。スライドの画面・説明文と対照されたい。

「ぼくはかわいい顔はしていたかもしれないが．からだも心も弱い子でした。その上おくびょう者で，言いたいことも言わずにすますようなたちでした。だからあんまり人からかわいがれなかつたし，友だちもないほうでした。昼ご飯がすむと，他のこどもたちは活潑に運動場に出て走りまわつて遊び始めましたが，ぼくだけはなおさらその日は変に心がしずんで，ひとりだけ教場にはいつていました。外が明るいだけに教場の中は暗くなつて，ぼくの心の中のようでした。自分の席にすわつていながら，ぼくの目は時々ジムのつくえのほうに走りました。」

スライドの場合，画面の子供，机などの効果が強く働きかけていることは明らかである。また聴覚的イメージを与える会話調の説明文は，ほとんど全ての抵抗値減少に関連している。その他，擬音語の影響もいちじるしく，第9場面の〝カーンカーン〟では一時的に抵抗値が減少した。

このような具体的イメージが直接提供されない読みの場合には，上下の振れがゆるやかである。読みの場合は文章の受容・理解・思考を通して，その中に読み手が各自のイメージを作り，その段階にいたってはじめて情緒的反応を起すので，スライドの場合とは異質の反応があらわれるのではなかろうか。またそのような高次の過程を経なければならないということから，読書行動の主体性，積極性などの特質が現われてくると思われる。

さらに読みの曲線は大幅な動きこそないけれども，各

ページごとに小さなピークを画きながら動いていることが特徴である。これはどのような意味をもつか，この実験からは明らかではないが，読書中の情緒反応は，ほぼページごとに増加減少をくり返し，このリズムのくり返しの中に読書の深まり，より深い全体的感動が得られていくものと思われる。

次にアナライザーと作文の結果の一部をＰＧＲと対照させながらまとめると次のようになる。

スライドの場面			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
アナライザー	読書	＋				8	6										6	6	6	7	6	5	7	9	9	8
		－							5		8		6	5		5										
	スライド	＋			5	10	7	6	8	7	8	9	6	9	7	8	8	8	7	8	8	7	10	11	6	11
		－							5		5	6	5													
作文中の再現数	S→R		7	7	7	9	0	6	6	9	6		7	8	9	3	7	9	4	5	8	9	9	9	8	6
	R→S		4	9	8	10	0	5	1	10	8		4	7	8	2	3	10	0	4	8	8	8	8	8	5

表はいずれも先の〝ひとふさのぶどう〟のPGR（抵抗値）記録をした時と同じ被験者の反応である。アナライザーの欄は，場面ごとに＋反応（感動）と－反応（嫌悪）を示した人数が記入されている。表から明らかなように，一般にスライドの方が反応が多い。ＰＧＲ（抵抗値）との関連をみると，10人中8人以上が＋または－の反応をした場面では，ほとんど全てが抵抗値の減少を示している。このことは，ＰＧＲの結果の解釈に当ってアナライザーが有効であることを示している。また中にたとえばスライドの第10場面は，アナライザーに多くの反応がみられたのにＰＧＲ曲線が上昇（抵抗値減少）しない場面がある。ここに前章で述べた情緒表出のレベルによる差が現われているとすれば興味深いことである。

次に表の作文中の再現数は，実験後に〝他人に伝えるつもりで〟という教示のもとにあらすじを書かせた場合に，その場面を何人が再現したかが記入されている。たとえばＳ→Ｒ群10名中７名が第２場面を再現している。ここで両群がともによく再現した場面を拾うと第3,5,9,13,16,19,20,21,22,23場面となる。これらはスライドのＰＧＲ（抵抗値）曲線の変化が大きい場面と著しく一致する傾向にある。即ち強い情緒反応がみられたスライドの場面は多く人に想起されやすいということになる。このことは，マス・メディアの効果の優劣からみた場合，スライドの優位を示すものであろう。

〔Ⅲ〕 今後の課題

前章の結果から，われわれはスライドとの関連の中に読書中の情緒的変化の特質を僅かながらもうかがい知ることができた。しかしそこには次のような未解決の問題がまだ多く残されている。

まず第一にＰＧＲで測定しうる情緒反応が読書過程に於て如何なる心理的意味をもつかということである。そこで，より精密な個人実験の実施が要求され，また情緒的変化と読書材料・読書の深まり・より深い感動体験・パースナリティなどとの関係を研究しなければならない。

第２に方法上の問題がある。前に述べたＰＧＲ，アナライザー使用上の問題は勿論のこと，被験者の選定，読書材料の適否，読みの実験的コントロールの方法などについて，より一層の考慮がはらわれなければならないであろう。

なお，ここに報告した研究はつぎの読書心理部会のメンバーによって主として行われたものであり筆者らはその報告者である。

阪本一郎　望月久貴　松村康平　佐藤泰正　村石昭三　岡田明　上野英夫　宇留野藤雄　阪本敬彦

しかし本稿は単なる報告のみにとどまっていない。結果の意味づけは必ずしも部会メンバーの総意ばかりではなく，筆者らの討議によるものも含まれている。その意味で筆者らは文責を負うものである。

読書資料の連関性ということについて*

暁星中学校

飛田文雄**

1 指導の一つの手がかり

このごろ少年少女向きに編集された文学作品集で，作品のうしろに「読書指導」をつけることがはやっている。これは戦後出された国語教科書の「手引き」にならって，かつそれを拡充したものであろうが，とにかく読書指導の一進歩であった。読書指導には，いわゆる「良書」選定をもっぱらの仕事にしていた時代があった。読書指導といえば，良い本を選んでやることだといっておかしくないくらい，良書選定が重要な仕事であったのである。これはしかし，出版事情からしてやむをえないことでもあった。「売れればよい」と考える利益本位の業者のはんらんする時代にあって，年少者を守るためには，まず読んでよい本とつまらない本とのしわけからかかることが必要だったのである。今だって，こうした出版情勢はあまり変わってはいないが，それでも，「良書」選定が読書指導の全体的な仕事だと考えるようなことはなくなった。それ以上もっともっとしなければならない仕事がたくさんあることがわかったのである。その傾向の一つの具体的な現われが，先の「読書指導」である。「これが良い作品だ」と投げだしてやるだけでなく，「それをどう読んだらよいか」というところまで手を入れてやろうというのである。これは意義のある事である。一つの作品を鑑賞して，その鑑賞について他人の意見を知ることは，鑑賞を深める意味において，また自己の取った方向や態度を反省する意味において，おおいに効果のあることである。

しかし，この「読書指導」は，個々の作品内に終始して，その作品から他の作品への連関ということは，ほとんどあつかおうとしていない。ここに問題がある。

ひとりの読み手がある作品を読んだあとかならずそこに何かの問題を残す。能力が低くて読みおおせなかったときは，読みおおせなかったということにおいて，また一応読みおおせても，なんらの興味も感動もおぼえなかったとすれば，おぼえなかったそのことにおいて問題が残る。ましてその能力をもって作品を一通り鑑賞できた場合は，いわゆる問題的に本格的な問題をさまざまに残す。いずれにしても，ひとりの読み手がひとつの作品を採り上げたときには，かならずそのあとに何かの問題が残るものと考えなければならない。

読書指導の一つの仕事は，そうした問題に対する解決の方途を助言してやることである。それは指導者との話し合いによってもよいだろうし，同じ作品を読んだ友人どうしの話し合によらせてもよいだろう。いろいろと方法はあるとおもわれるが，その中で有力な一つは，問題の性質に応じてそれに関連した次の資料をすいせんしてやることである。つまり一種の適書指導を行なうことである。これはあえて文学作品に限ったことではないが，少年少女の読書は，その八，九〇%が文学作品ないしそれに準じるもので占められている事実に徴し，ここでは文学作品のばあいを例として考えてみる。

一つの作品の次に他の作品をすいせんしてやるにも，いくとおりかの方法が考えられる。いちばん多く使われるのは，作者を基準とするやりかたである。これは国語科などでよく使われる方法であるが，たとえば教科書に

On Reading Guidance by Related Materials,
Fumio Hida (Gyosei middle school)

藤村の「嵐」があったとすれば，その学習的発展として同じ藤村の他の作品，「伸び支度」とか「分配」とか，あるいは「破戒」とかいった作品のあることを知らせるのである。同一作家の作品をつぎつぎと読むことは文学の鑑賞ないし研究の方法として，一つのゆきかたをなすものであるが，問題は読み手の能力である。これが高校上級生あるいは大学生というのであれば，問題はないとおもうが，小学上学年ないし中学生のばあいは，たいして意味がない。というより，むしろ無理といったほうがあたっている。この年代の理解能力一般として，ひとりの作家に即して，その人間的なものを問題としてゆくことは，高程度に過ぎるのである。

それでは，作品間の連関は何によるのがよいか。問題意識を活用するのが適当であるとおもわれる。甲の作品を読んでいだいた問題に即して乙の作品を提示してやるのである。しかし「問題」と一口に言っても，口に言うほど単純なものではない。

同一の作品に対しても，読み手の能力の程度により，その読み方はさまざまである。したがってそこから掘り起こす問題もいろいろである。

2 「坊っちゃん」を読んだら

漱石の「坊っちゃん」は，中学生の愛読書である。毎年ひきつづいてこんなに人気のある書物は，あまり例がない。毎日新聞の「読書世論調査」の「学校読書調査」編によってみても，いろいろの角度からの調査において，二年生三年生になると，だいたいトップのことが多く，下っても三位どまりである。「坊っちゃん」は，読み手のがわからもこんなに人気があるのだが，読ませ手——指導のがわからも，たいていすいせんの範囲に入れている。つまり，「坊っちゃん」は読み手のがわと指導のがわとの双方から支持される作品ということになるがこれは読書指導の立ち場からたいへん好ましい，それだけにあまりの類のない例の一つのように見える。読書指導の理想の一つは，読み手が好んで読む本が指導者のすいせん本であり，指導者のすいせんする本を読み手がよろこんで読むという状態である。「坊っちゃん」は，その条件にあてはまっているように見うけられる。

しかし，それは形式的な見方の結果で，双方の事情に立ち入って分析してみると，かならずしも，見た目どおりの状態ではない。

だいたい中学生が「坊っちゃん」を歓迎するのは，次のような理由によると考えられる。

1 いたずらが得意げに語られている。
2 あだ名が随所につかわれている。
3 教師間の争いがえがかれている。
4 暴力がふるわれている。
5 坊っちゃんの江戸っ子かたぎが気持よい。
6 全編にユーモアがただよっている。

以上は中学生の読み手の意識の表にあらわれる「坊っちゃん」歓迎の理由であるが，意識にのぼらない理由がある。

7 坊っちゃんの家族や世間に対する反抗性が愉快である。
8 文章のつっぱなしたような調子が好きである。

の二つ。

だいたい中学生の「坊っちゃん」歓迎の理由はこんなところにあろうかとおもわれる。

これに対し，指導のがわの「坊っちゃん」をすいせんする理由は，一口に言って文豪夏目漱石の作品で，あくどいエログロがないからだというにあるとしてよい。作品の性格を十分につきつめて考えているわけではない。日本の現代文学を読ませるとしたら，漱石を欠くわけにはいかない。ところが漱石の作品は大方が程度が高く，中学にわかるというものはあまりない。そのあまりない中でまとまったものということになると，さしずめ「坊っちゃん」がよかろうということになる。だが，その「坊っちゃん」は，いわゆる良書意識から中味を検討してみると，あまり良い事ばかりでないのは，さきに読み手の「坊っちゃん」歓迎理由のところで調べてみたとおりである。あれは読み手のがわからの理由として調べてみたものであるが，そのまま指導のがわからの検討条項とすることができる。だとすると，「坊っちゃん」は，

いわゆる「良書」として選定して投げだしてしまったのでは，ほんとうの良書たりえないと見なければならない。問題点に対して相当の指導があって，はじめて良書となる性質のものである。読み手が読んで，そのまま読みっぱなしでは，けっしてためになることはない。むしろ，中学期の少年少女が表わしはじめている注意すべき性向，反抗意識・暴力礼賛・無思慮性などを，無批判に助長する恐れなしとしない。ぜひとも何らかの指導を加えることを必要とする。

指導の方法としては，問題点に関して話し合いをするのもよいが，それに強い関連のある他の作品を指示してやるのが有効な方法である。「坊っちゃん」の鑑賞において残された問題を，別の作品の鑑賞において，比較や批判や解決を得るようにしむけるのである。話し合いによるばあいほどきちんとゆかないかもしれないが，他方それだけ自分で考えてみる態度や力がやしなわれることになる。

「坊っちゃん」において予想される問題点は，すでにあげた「坊っちゃん」歓迎の理由の条々が，すなわちそれにあたると見てよい。読み手にとってもっとも興味のあるところが，もっとも問題を残すところであるし，また指導的にも発展的に掘り返す可能性を十分に含むところである。よろこぶ，おもしろがる，そのゆえに，そのことが問題となるのである。おもしろがるのは，そのまま手放しで捨てておいてよいおもしろがりかたか，よろこぶから，そこをつかまえて思考活動をおこす，ましてそこに解決を要求する疑問が生じたとすれば，それはかっこうな発展のきっかけを提示するものである，等々，歓迎の理由はそのまま読後の問題的となるのである。

よって，次にそうした予想問題点をよりどころとして，連関的にすいせんすべき作品について考えてみる。その前に，もう一度問題点の条項を整理しておくと，

一．いたずら　　五．江戸っ子かたぎ
二．あだ名　　六．ユーモア
三．教師間の争い　　七．反抗性
四．暴力　　八．文体

となる。これらはしかし，同じ程度で問題的であるのではない。たとえば，いたずらやあだ名は，どんな読み手にも興味のあることであり，ただちに問題的にあつかうことができるが，反抗性とか文体とかということになると，かなり高度のことになり，どんな読み手のばあいでも，すぐ問題的にあつかうというわけにはいかない。それは読み手個々の能力に応じ，その時々のあつかいをしなければならないことを，心得ておくべきである。

3　「山のかなたに」をすいせんする

さて，それでは「坊っちゃん」に連関してどんな作品をすいせんするかということになるのだが，ここでは，石坂洋次郎氏の「山のかなたに」をあげてみることにする。「山のかなたに」は，昭和二十四年六月から十二月まで読売新聞に連載されたもので，いわば大衆文学である。大衆文学というと，それだけで教育の場では問題にならないとする向きがあるかもしれない。特に文学教育を心がける人々が，ともするとそういうことを言いたがる。つまり，ものごとをたいへん純粋に考えすぎて，かりにも文学教育という以上，第一級の作品を取り上げないと，その趣旨にそわないというのである。これはしかし，文学教育の「文学」にだけとらわれ，「教育」を忘れたというほかない。いかにも文学だけを考えたら，第一級の作品，少くも純文学作品を取り上げるのが至当であろうが，それが教育という場における操作であることを考えるとき，かならずしも第一級の，あるいは純文学の作品とはかぎる要はないのである。二流三流の，もしくは大衆文学でけっこうである。要は読み手が，まだ十分鑑賞能力をそなえておらず，文学の何たるかを理解していない人々であることをわきまえ，そうした人々を，まず文学に近づけ親しませるのが，当面のめあてであることを知らなければならない。いわゆる文学教育も，まずこのあたりに思いをいたし，もっと読み手の実際に即した行き方をこころがけなければならないのではなかろうか。もし，文学教育では，そんな「不純な」行き方ができないというのであれば，読書指導では，すすんでその「不純な」どろにまみれることが必要である。

「山のかなたに」も，第一級の作品でも，純文学作品でもないが，敍上の意味で，読書指導では，よろこんで取り上げてよい作品である。

第一に，全体的に見て「山のかなたに」は素材的に「坊っちゃん」と共通するものが多い。もちろん，「坊っちゃん」はだいたい教師間のことがらに終始しているのに対し，「山のかなたに」は教師のことばかりでなく，生徒のことも，一般人のこともあつかわれており，ことに領域的にいって，「坊っちゃん」は社会とか時勢とかをほとんど問題にしていないのに対し，「山のかなたに」は，むしろ社会ないし時勢の中にゆさぶられる学校というものをえがき，時代というものを強く押し出しているなど，その規模や複雑さにおいておおいに両者は異なるのであるが，中心的な舞台が学校であるという点において，素材的に大きな共通性を持つのである。

一般的にいって，文学の鑑賞においては，作品の主題ないし，それから関連的に引き出された問題が，もっと重要なポイントであるべきだが，読み手が少年少女であるばあいは，これと事情が少し異なり，主題ないし問題が尊重されると同じくらいに，素材面にも注意がはらわれなければならない。したがって，作品間の連関においても，主題ないし問題におけるそれが重視されるにひとしく，素材面におけるそれが大事にされることが必要である。その意味で，「坊っちゃん」に対する「山のかなたに」の素材的な共通性が注目される。

次に要素的に見て，「坊っちゃん」の読み手がいだくであろう問題点（「坊っちゃん」の歓迎理由と同一でよいことはすに述べたとおりである）に対応するものが，あるばあいは同質的に，あるばあいは発展的に，あるばあいは解決的に「山のかなたに」の中に抱容されていることが発見される。

まず，「いたずら」である。「坊っちゃん」では，最初の章に生い立ちの紹介の材料の形で，小さい時のいたずらの数々があげられている。いわく飛び降り事件，いわくナイフ事件，いわくぐりどろ事件，いわく井戸埋め事件等。これらは坊っちゃんがやったいたずらであるが，「坊っちゃん」がされたいたずらに，落書き事件，ばった事件などがある。「坊っちゃん」のいたずら問題で注意すべきことは，坊っちゃんの小さい時のいたずら，つまり坊っちゃんがしたいたずらについては，むしろいたずらをしたことを得々と述べさせている，自慢させているといった感じが強いが，あとのほうのされたいたずらでは，いたずらということの限界といったものを坊っちゃんに言わせて，一つの反省めいたものを示させている。ばった事件のときの述懐に「おれだって中学にいた時分は少しはいたずらもしたもんだ。しかし，だれがしたと聞かれた時に，しりごみするような卑怯なことはただの一度もなかった。」とあるのは，いたずらはしてもよいが，あとをあっさりしろということになり，いたずらに対する一つの態度を表わすものである。この点，いたずらに関しては「坊っちゃん」は「坊っちゃん」自体の中で，いちおうまとまりをつけているともいえるが，しかし読み手によっては，こうしたしめくくりとは別に，単純にいたずらそのもののおもしろさを追う者がないとはかぎらない。そうした読み手に対し，「山のかなたに」は何を答えてるだろうか。

「山のかなたに」はいたずらそのものはふんだんにある。たとえば奥羽中学校の生徒たちが開いた交換会である。交換品に出してあるスルメの足を見張りの委員たちが食べてしまって「陳列している間に蒸発してしまったんですよ。」ととぼけてみたり，「カンニングの祕訣大全。付録，本校教師のアダ名の由来。」などが出品されている。かとおもうと，生きたミケネコがつながれていりたする。しかし，こられはいたずららしいいたずらで，「坊っちゃん」のそれと大してかわりがない。ところが，教師のひとり山崎先生が二年生の井上大助の姉美佐子のところへ送ったラブレターを，五年生の悪童連，というより予科練くずれのチンピラたちが，大助たちを学校帰りに待ち伏せしたとき，ぐうぜん大助のカバンから見つけだし，うばいとり，それを翌日朝礼の際，全校生徒の面前で読み上げるという事件などとなると，だいぶ性質が違ってくる。さいわいに上島健太郎という本編

の主人公で，生徒に人気のある若手の教師が，自分が書いたことにして，手紙を取り上げてしまったから，事件はそれ以上大きくならないですんだものの，捨てておけば，ふたりの一人まえの男女が，それぞれの立場において，それぞれの傷つきかたをするところであった。これなどは，もう単なるいたずらではなく，はっきりした悪意の行動と見てよい。

そこで，「坊っちゃん」を読んで，いたずらということに興味を持った読み手は，「坊っちゃん」においてまず，いたずらの限界ということを考えさせられ，ついで提示された「山のかなたに」においては，いたずらと悪意の行動との区別を知らされなければならない。そしてこれが，いたずら問題における指導のポイントでもある。いたずらをいたずらとしておもしろがると同時に，少くもこれだけのことを考えるようにしむけるのが，指導のがわの責任である。特に「山のかなたに」では，いたずらと悪意の行動のそれぞれの材料が豊富であるから，両者の区別を考えさせるには適当である。

つぎに，あだ名の問題である。あだ名は少年少女にとって，もっとも興味のあることがらの一つである。まず教師に対して，それから友だちどうしの間で，あだ名は毎日の生活の大きな関心事である。そのあだ名が「坊っちゃん」では，主要登場人物のほとんど全員に冠せられている。たぬき・赤シャツ・やまあらし・のだいこ・うらなり等々。しかもそれがすべて先生のあだ名であるから，読み手，ことに教師にあだ名をつけることにうつつをぬかしている中学生などには，うれしくてたまらない。だいたいあだ名は，つける人のつけられる人に対する好意の表われであるばあいと，反ぱつの表われであるばあいと，さらに両者の混合した微妙な色合いのばあいとがある。「坊っちゃん」においては，たぬきは腹黒いという意味において，赤シャツは男のくせにきざなという意味において，のだいこはおたいこをたたくがいなかくさいというのを野大根の見かけだけで根がみすぼらしいというのにかけた意味において，それぞれ反ぱつ的である。これに対しやまあらしは戦闘的で男らしいという意味で，うらなりはその人をあわれむ意味において，いずれも好意の表われである。あだ名というと何でもないことのように見すごしがちであるが，やはり反省してみると，こんな意義がある。これは「山のかなたに」においても適用してみることができる。たとえば「山のかなたに」では，主人公の上島健太郎は寒ぶなであるし，山崎先生はエラ先生であるし，その他きつね・なまず・南京豆等，中学生らしいあだ名がさかんに出てくる。これらも，好意か反抗か，ないしはその混合かのいずれかになり，指導のための手がかりになるのであるが，おもしろいのは，女主人公井上美佐子の母親うみ子に「名前なんて，何に似るか分らない，ブヨブヨの赤ン坊の時につけてしまうんだけど，アダ名はその人に特徴が出てからつけるんだから，これあ確かなんだよ。」と言わせていることばである。これは名まえの本質を突くと同時に，あだ名の意義をせん明にしている。つまり，あだ名はその持ちぬしからしたばあい，本名とはくらべものにならないほど，象徴本来の意味にかなっているというのである。したがってこの点をつかまえて，あだ名ばかりでなく，名まえないし名称一般について考えるようもってゆくことは，このばあいの指導の有力なめやすになる。

要するに，あだ名に関して「坊っちゃん」から「山のかなたに」に発展したばあい，一つは，あだ名はつける人の単なる思いつきや機知にすぎないものではなく，つける人のつけられる人に対する一種の批判の表われであるということ，二つは，あだ名は本名に対し，より本質的であるというところから，名称一般への思索のきっかけになるという，二つの点に，指導のねらいが置かれることを考えておくことが必要である。

4　おわりに

このあと，教師間の争い暴力・江戸っ子かたぎ・ユーモア・反抗性・文体等の予想問題点があるのだが，許された紙数をすでに越したので，別の機会にゆずることにする。要するに，読書指導における資料間の連関というとを，文学的作品に例を取って考えてみようとしたのである。

読み易さの研究*

——クローズ法の応用——

お茶の水女子大学　波多野完治**
東京大学　小笠原生子

読み易さに関する研究は，外国では，R・フレッシュ(3)(4)，E．デール(1)(2)(8)などのものが有名であり，日本では堀川直義(9)，森岡健二(10)(11)のものが知られている。日本におけるこれまでの読み易さの研究では，その要因となるべきものを，1．文の長さ，2．漢字の多少，3．構文の複雑さ等を主にとりあげてきている。

本論文では，これらの要素主義的な方向とは全然異った測定法であるW. L. テイラーの発案なるクローズ法(5)(6)による実験的研究を報告する。クローズ法の日本語への適用はすでに芝祐順によって発表されているが(7)，本論文ではその研究を基にして，さらに日本語の短い文章への応用と，教育的見地からの児童文への応用，さらに広告文のようなものにどのように適用出来るかの研究を試みた。

これまでのいろいろなクローズ法に関する研究からわかるように，文がある一定の長さ以上長くないと，クローズ法のテストを行うことが出来ない。

それは抜取率とブランク数の値でおのずから決って来るのである。日本語において，語単位のクローズ法を用う場合，語の抜取率は，10～20%が文脈を破かいしない限度であることが，先の発表において知られている。

又一文章についてのブランク数は，大体，30～50個が必要とされていることも知られている。これらにより，クローズ法の実験可能な文章の長さは，おのずから決定されてくるわけである。

ここで40個のブランク数を必要と考え，ざっと計算してみると，一文章の長さは，少なくとも200語から400語が必要となってくる。

上の条件の限界以下の長さしか持たぬ文章について，クローズ法を用いることは出来ないであろうか。つまり，かなり短い文章についてのクローズ法の適用ということが問題となる。そしてこの場合でもやはり，抜取率とブランク数はそのままにおかなくてはならない。何故なら，これらをかえることは，クローズ法そのものの測定法がなりたたなくなるからである。

そこで，一つの短い文章について，何種類かの抜取の箇所をかえたテスト用紙をつくり，それをふつうに行うクローズ法よりも，大勢の被験者を用いて，テストを行う方法が考えられる。

例えば，ある文章について，始めから第4番目の語を起点として各8番目毎の語をぬいていく方法を第1種類とし，次は始めから第5番目の語を起点として各8番目毎の語を抜いていく方法を第2種類とし，以下起点となる抜取の語をずらして同様の抜取率で語を抜いていく。各々の種類について約30以上の被験者を必要とするので，被験者総数は，

30×抜取方法の種類数

以上となる。

これによってふつうに用いられるクローズ法では，測ることの出来なかった短い文章についても，クローズ法を用いることが出来るであろう。以下実験を行ってみる。

---

* A Study on Readability——An Adaptation of Cloze Procedure

** Kanji Hatano (Ochanomizu College of Women)
Ikuko Ogasawara (Tokyo Univ.)

実験の目的

以上述べたような考えにもとずき，短い文章を，抜取箇所をかえた種類をいくつかつくることによってクローズ法の適用を試みる。もしそれが出来るとしたら，一般

に短い文章である児童向きの文章や広告文への応用がどれくらい役立つものであるのか検討してゆきたい。

一般的手続き

実験ⅠⅡに共通な一般的手続きを列挙する。

1. 削除の単位

語を単位とする。

2. 抜取の仕方

第1種類　始めから第4番目の語を起点として各8番目毎を抜きとる，

第2種類　始めから第5番目の語を起点として各8番目毎を抜きとる。

第3種類　始めから第6番目の語を起点として各8番目毎を抜きとる。

以下起点となる語を第7番目，第8番目とずらしてゆき第4種類，第5種類までつくる。

各種類はいずれも12.5%の抜取率，各種類につき文章のブランク数は7個とする。したがって一文章について，全部の種類からのブランク数は総計35個となる*。

3. 採点方法

原文との一致を基準とする。同義語を認めない。

実験Ⅰ　短い文章への適用の実験

目　的

すでにクローズ法のテストによって文章の難易の順序づけが行われている8文章を材料に用い，各文章から適当な箇所を60語あまりになるようにえらび出す。それらの短い文章を抜取り方法をかえて5種類つくり，クローズ法によってテストを行う。その結果をもとの8文章の順位の結果とくらべて検討してみる。又えらんだ短い文章の難易の順を評定者によって評定を受ける。

手続き

1. 被験者　大学生200名（1種類につき40名）

2. テストを行った文章の原文につき，評定者群**に直接読み易さの評定を受ける。

材　料

材料は「心理学研究」(7)におけるクローズ法に関する発表にとりあげられているものをもととして，その中各文章から適当な箇所60語あまりをえらび出す。

1. 池田潔　〝裏口入学〟とかいうもの
随筆集　歩道のない道　慶友社　P123

2. 新聞社説　炭労争議の解決を急げ
朝日新聞　昭和31年3月20日

3. ギルボー（岡山隆訳）
サイバネチックス　文庫クセジュ
白水社　P127

4. 末川博　序――解決と批判を行うに当って　別冊法律時報（破防法）
日本評論新社　P1

5. 椎名麟三　永遠なる序章
昭和文学全集　角川書店

6. 浜田広介　五匹のやもり
世界少年少女文学全集　創元社　P322

7. 新聞記事　お客様も〝ストなれ〟
朝日新聞　昭和31年3月11日

8. 山根銀二　ベートーベンの世界
音楽美入門　岩波新書　P.139

結　果

テストは次のように整理する。8文章各文章につき，抜取方法5種類あるが，一文章ずつクローズスコアを総計していく。これらによって8文章の難易の順序が出たものを，先に心理学研究で発表された結果と比較する。*

評定者群による評定を先に発表された多数標本の結果と比較してみる。

本実験のテストと評定との結果を比較してみる。

テストの結果は第一表にまとめてある。総平均適中率** (通過率) の高いものから順にならべてある。表中クローズスコアとあるのは，各文毎の総得点である。Pと

---

*　クローズ法のふつうのやり方では一文章のブランク数が30～40個必要なのであらかじめ計算してこのように設定する。

**評定者群は東大教育心理大学院生及び国語研究所員合計10名

*　心理学研究で芝の行った実験に用いた文章をこれから多数標本とよび本実験の分を少数標本とよぶこととする。

**総平均適中率＝ 〔適中した単位数の全被験者合計〕 / 〔抜きとられた単位数〕×〔被験者数〕

あるのは，総平均適中率である。最右端には，順位の相隣れる文の間の平均値差の有意性検定を行った結果が示されている。

結果からわかること

テストによってつけられた文章間の序列に於ける平均値差の検定は大体において有意性差が認められる。

第一表 テストによってつけられた文章の序列に於ける平均値差の検定

材　料	クローズ・スコア総計	P ＊ 総平均適中率	平均	分散	t	p
1 (Ikeda)	764	.5457	19.10	4.81	3.24	p<0.02
4 (Suekawa)	703	.5022	17.58	3.89	1.51	p>0.05
6 (Hamada)	678	.4842	16.95	3.84	1.35	p>0.05
2 (Asahi)	653	.4666	16.33	4.48	1.28	p>0.05
5 (Shiina)	629	.4494	15.73	4.72	4.77	p<0.01
7 (Asahi)	530	.3785	13.25	6.24	4.40	p<0.01
3 (Okayama)	442	.3157	11.05	3.70	0.150	p>0.05
8 (Yamada)	439	.3137	10.98	3.81		

	t	P
4 (Suekawa) × 2 (asahi)	2.72	p>0.05
6 (Hamada) × 5 (Shiina)	2.65	p<0.05
2 (Asahi) × 7 (Asahi)	5.69	p<0.01

＊〔抜取数〕×〔被験者数〕=1400

10名の評定者による評定の結果はW=.793 (Kendallの一致係数) を示し，この値は，P<0.001水準で有意である

第二表 10名の評定者による読み易さの順位づけ

材　料	評定者 A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	合　計
1 (Ikeda)	3	2	2	2	3	4	1	2	1	1	21
2 (Asahi)	5	5	5	5	6	5	6	6	4	5	52
3 (Okayama)	6	7	7	8	7	8	7	8	8	8	74
4 (Suekawa)	7	6	4	6	5	1	4	5	5	6	49
5 (Shiina)	1	4	3	3	4	3	2	3	6	2	31
6 (Hamada)	2	1	1	1	1	2	3	1	3	3	18
7 (Asahi)	4	3	6	4	2	6	5	4	2	4	40
8 (Yamada)	8	8	8	7	8	7	8	7	7	7	75

評定の一致度は Kendall の一致係数によればW係数

S=3332

W=0.793　　d. f=7

この値は　p< 0.001　水準で有意である，

テストの結果を多数標本のテストの結果とくらべてスピアマンの順位相関をとると

γ_s=.694を示し，これは有意性を示さない。

第三表 テストの結果について多数標本の結果と比較

材　料	少数標本の順位	多数標本の順位
1 (Ikeda)	1	4
2 (Asahi)	4	5
3 (Okayama)	7	8
4 (Suekawa)	2	3
5 (Shiina)	5	2
6 (Hamada)	3	1
7 (Asahi)	6	6
8 (Yamadv)	8	7

この二つの結果のスピアマンの順位相関係数は

γ_s=0.694

評定の結果を多数標本の評定の結果とくらべてみると，スピアマンの順位相関で，γ_s=.976 を示し，1%水準で有意である。

第四表 評定結果について　多数標本との比較

材　料	少数標本	多数標本
1 (Ikeda)	2	2
2 (Asahi)	6	6
3 (Okayama)	7	8
4 (Suekawa)	5	5
5 (Shiina)	3	3
6 (Hamada)	1	1
7 (Asahi)	4	4
8 (Yamane)	8	7

この二つの結果のスピアマンの順位相関係数は γ_s= 0.976　1%水準で有意である

実験1においてテストの結果の順位と評定の結果の順位相関をとるとスピアマンの順位相関で.694を示しこれは有意でない。テストの結果と評定の結果のピアソンの相関係数を求めると γ=.834を示しこれは，1%水準で有意である。

第五表　実験1におけるテストと評定の読み易さの順位

材　　料	テスト順位	評定順位
1 (Ikeda)	1	2
2 (Asahi)	4	6
3 (Okayama)	7	7
4 (Suekawa)	2	5
5 (Shiina)	5	3
6 (Hamada)	3	1
7 (Asahi)	6	4
8 (Yamane)	8	8

スピアマンの順位相関係数 $\gamma_s=0.694$　ピアソンの相関係数　$\gamma=0.834$　1％水準で有意

考　察

まず本実験の目的であるクローズ法の短い文章への適用の可能性について考えてみたい。

テストにおける文章間の難易の序列は第一表に示すように，大体において有意差が出てきている。又ピアソンの相関係数によれば，評定とテストとの結果は，.834を示し，この方法によってクローズ法が短い文章に適用出来ることがわかる。

テストと評定の結果の文章の難易の序列をスピアマンの順位相関で求めると，$\gamma_s=.694$で有意性が出て来ないが，ピアソンの相関係数では $\gamma=.834$ を示し1％水準で有意である。これを統計的に考えると，二つの序列をくらべてみるとき，難易の両端において大体一致しているが，序列の中間ではくいちがっている。中間の比較的序列の間のひらきの（スコアの点数が中間では接近している）少いところでは一致せず，両端において比較的一致しているというのは，信頼の高い部分で一致している事を示すもので，重要なことである。

多数標本と少数標本の評定結果を比較してみると，よく一致しているが，テスト結果は一致しているとはいえない。これは，標本数が少ないともとの文章からずれが出て来て，クローズスコアにそのずれがあらわれて来ることを示している。であるから，ここに本実験のテスト方法の限界があろう。本実験で行ったテスト方法は，長い文章のある一部分をぬき出したものに用いるよりも，もとの母集団となるべき文章が短い文章であるような場合に応用するのが妥当である。

実験Ⅱ　児童文への適用の実験

目　的

前実験において，クローズ法の短い文章への適用が可能であることがわかったので，本実験では一般に短い文章である児童文についての適用を試みる。

児童向きの文章を材料として，被験者を児童とする場合，どのような結果が得られるであろうか。

調べる主な事柄は次の二点である。

1. 文章間の難易の順序がどのように出てくるか。学年別と文章別との関係を調べる。
2. クローズ法によって読解力の発達を調べることが出来るか。教育的な面への応用。

手続き

1. 被験者

小学校3年から6年まで各1組ずつ，中学1.2年各1組ずつ，高校1年を1組。

2. 評定

国語の小学校，中学校教師及び教育心理専門家によって評定をうける。10名

材　料

東京大学学力標準テスト*〔国語〕の二年から六年用までの中に書かれてある文章につき，適当と思われるところの文章各60語あまりずつとり出す。各学年に問題となるべき文章を一つずつこしらえる。

		文章の仮題
二年用**	問題1	たか
三年用***	問題2	つばめ
四年用****	問題3	ミレー
五年用*****	問題4	絵
六年用*******	問題5	権利

抜取方法，抜取率，ブランク数などについては，実験Ⅰと全く同じである。

結　果

結果はテストについては，各文章毎，各学年毎，総合についてまとめてみる。

---

*　沢田慶輔監修　東大式標準学力検査　東京大学教育心理学研究会
**　P. 5
***　P. 3
****　P. 5
*****　P. 3
******　P. 3

評定者群の評定結果につきまとめる。

第六表 抜き取り方法別による被験者の数

学年	抜き取りの種類 (1)	(2)	(3)	(4)	(5)	合計
小 3	9	5	10	10	9	43
小 4	10	10	10	10	10	50
小 5	9	10	10	10	10	49
小 6	10	10	10	10	10	50
中 1	9	8	11	10	9	47
中 2	10	10	10	10	10	50
高 1	9	9	9	7	10	44

第七表 各問題につき各学年の総平均適中率

学年	問1	問2	問3	問4	問5
小 3	.509	.279	.242	.113	.0598
小 4	.511	.354	.292	.117	.157
小 5	.540	.379	.338	.332	.294
小 6	.525	.443	.397	.452	.428
中 1	.545	.420	.396	.428	.500
中 2	.555	.443	.460	.472	.505
高 1	.595	.500	.480	.506	.550

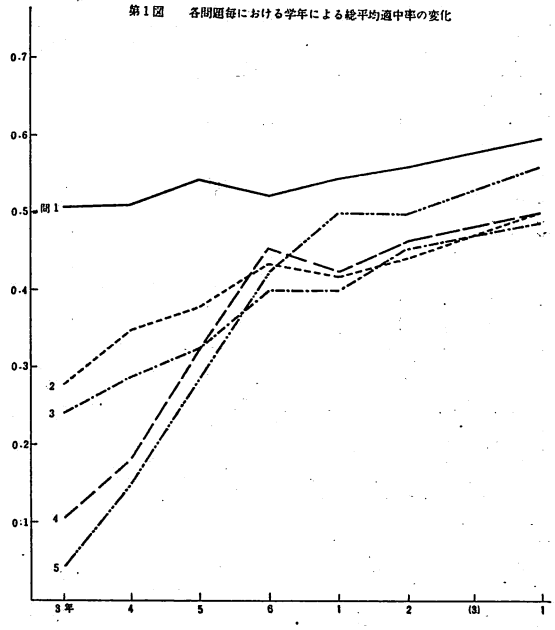
第八表 10名の評定者による読み易さの順位づけ

材料（問題）	評定者 A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	合計	順位
1 たか	1	4	2	1	1	1	2	1	1	1	15	1
2 つばめ	2	1	1	2	2	4	1	4	2	2	21	2
3 ミレー	3	2	4	4	3	5	4	3	4	4	36	3
4 絵	4	5	5	5	4	2	5	2	3	5	40	5
5 権利	5	3	3	3	5	3	3	5	5	3	38	4

第九表 各学年における問題の難易の順位づけ

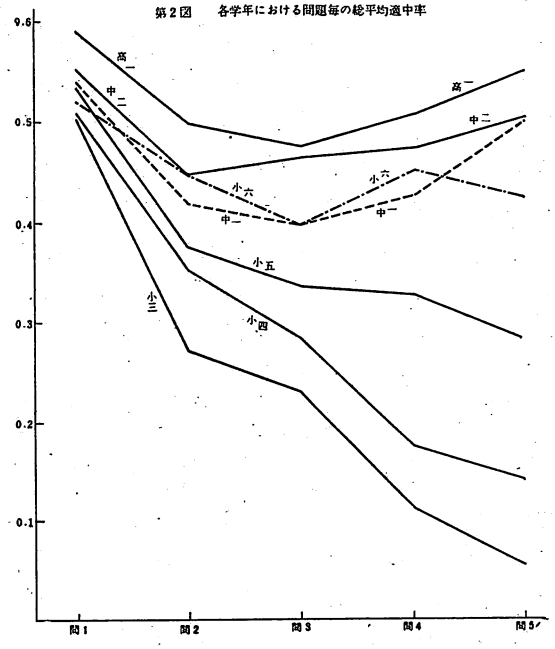
問題	小3	小4	小5	小6	中1	中2	高1
1 たか	1	1	1	1	1	1	1
2 つばめ	2	2	2	3	4	5	4
3 ミレー	3	3	3	5	5	4	5
4 絵	4	4	4	2	3	3	3
5 権利	5	5	5	4	2	2	2

第1図 各問題毎における学年による総平均適中率の変化



註 1 学年があがるにつれてスコアがあがっていき，皆右上りの線を示す
2 問題により勾配の角度がちがっている。（大体やさしい文章からむずかしい文章になるにしたがって勾配が急になる）

第2図 各学年における問題毎の総平均適中率



註 1 学年により問題の難易の順序が異って来ている
2 やさしい問題では学年毎のスコアのひらきが少いが難しい問題では大きくひらいている。（問題1から問題5へのうつりかわりに注意）

結果からわかること及び考察

まずこの実験の主なる目的である事がらについて検討してみる。

1. 文章間の難易が出てくるかという問題については，第1図，第2図に示すように，各学年とも各文章についてかなりはっきりした差をもって文章の難易の順序づけがなされている。

そしてその順は，小学校3年から5年までは，学力標準テストによる難易の順にクローズ・スコアが一致するが，小学校6年，中学1年2年，高校1年では，その順が違って来ている。すなわち，小学6年では問題1〝たか〟の文章がいちばんクローズ・スコアのたかいことは低学年とかわりないが，2ばん目にクローズ・スコアのたかいのは問題4〝絵〟の文章となり，いちばんスコアの低いのが問題3〝ミレー〟の文章となっている。

また中学1年から高校1年までは，低学年ではいちばんクローズ・スコアの低い問題5〝権利〟（論文調）がスコアの高い方から2ばん目になっている。次にスコアのたかいのが問題4〝絵〟となって低学年と逆になっている。

これは高学年になるほど推理のはたらく論文的なもの（問題5など）が容易になり，クローズ・スコアの適中率も大きくなるからであろう。

2. クローズ法によって読解力の発達を調べることが出来るかということについては，各問題の文章について，大体において，学年順をおってスコアが高くなってゆき読解力を調べるめやすとしてクローズ法が使用出来ることがわかる。（第1図参照）

第1図について考えてみると次のようなことに気がつく。

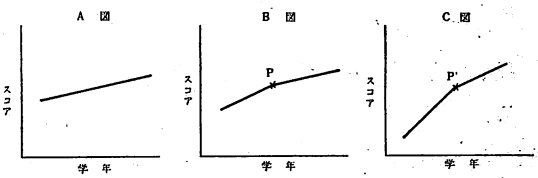
1. 勾配が右上りであること

これは学年の順にスコアがたかくなっていることを示している。読解能力の発達に応じて，スコアがたかくなるようなテストは，子どもの能力と文章の難しさの両方から考えた場合大いに有用であろう。

2. 勾配の角度が学年により差があること，

又この図について勾配の角度をとりあげるならば，問題1の文章はほとんどめだたないほどのゆるやかな勾配を持ち，問題 2.3.4.5. となるにつれて，急な勾配をなしている。

やさしい文章からむずかしい文章へどのように勾配がかわっていくか，モデルの図を書いてみると次のようになる。



A図は問題1の例，B図は問題 2. 3 の例，C図は問題 4. 5 の例である。

これらの図でわかるように，ある程度以下のやさしい文章では，クローズ・スコアの勾配にはっきりした差が出て来ない。しかし文章が適当に難かしく，子どもの能力の段階をつけられるものであれば，B図の点P′の左側の勾配，C図の点Pの左側の勾配のように，非常にセンシテイブな結果が得られるのである。とくに点P′の左側の勾配直線などは，読解能力の尺度化を試みる時貴重なものになるであろう。

又このグラフと子どものカリキュラムとの関連を考えてみる。子どもの読解力に応じて教材を選ぶ文章はP′の少し手前左側のところあたりの難易度をもつ文章がよい。（この実験で用いた文章は学力標準テストからとり出したものであるが，各学年のふりあてが大体結果的に上にのべたようになっていることがわかる。）つまり子どもにとってやさしく読みこなせるものより少し難しいものを選ぶのがよく，その方面からもこのグラフはこれから先の利用が期待される。

補そく実験広告文への応用

以上の二つの実験で短い文章の読み易さが測れることがわかった。さらに広告文のような短い文の時になると，クローズ法はどのように利用出来るであろうか。それについての簡単な実験を試みる。

手続き

削除の単位は文字とする。

抜取の仕方は次のようにする。

第1種類　始めから第4番目の文字を起点として第8番目ごとに抜きとる。

第2種類　始めから第5番目の文字を起点として第8番目ごとに抜きとる。

第3種類　始めから第6番目の文字を起点として第8番目ごとに抜きとる。

以下同様にして8種類の抜き取り方法別のものをつくる。

被験者　160名，各種類毎に20名が行う。

材料　次の広告文* を用う。

1　朝はサン夜はスター

2　窓口は夜も昼も日曜も

3　クシャミが出たらアプロガン寒気がしたらアプロガン今年の風邪はアプロガン

4　大丸は楽しいくらしのパイロット

5　正しい時計はオリエント

6　季節のお買物は優良百貨の伊勢丹へ

結　果

結果は各広告文毎につき総平均適中率を求める。

第十表　広告文について各文毎の総平均適中率

1 (朝は)	2 (窓口)	3 (クシャミ)	4 (大丸)	5 (正しい)	6 (季節の)
.950	.580	.934	.836	.809	.884

補そく実験の結果からわかること及び考察

広告文のごとく短い文についてクローズ法を応用したところ，各文にそれぞれ違う総平均適中率が得られた。(第十表参照)

ある広告文をつくり，このようなテストを行い，広告をしてから皆にゆきわたった後，又テストを行えば，その広告文がどれくらい知られたかを測ることが出来よう。さまざまの広告文について，同時的にこのように，ある一定時間の前後にテストを行えば，各広告文の知られ方が比較出来ることになろう。

* 大西雅雄，大伏肇著　放送ことば 1 の中より適当なものを選び出した。

結　論

1.　従来のクローズ法では，少なくとも200語から400* 語なければ文章をテストすることが出来なかったが，抜きとりの仕方を操作的にかえ，被験者数を増すことによって60語前後の短い文章でもクローズ法のテストを用いられることがわかった。

2.　上の結果の応用として，一般に短い文章である児童文につきクローズ法の応用を試みた。小，中，高の生徒につき五つの文章を用いてテストしたところ次のような結果が得られた。

a）各学年とも各文章につき，かなりはっきりした差をもって文章の難易の順序づけがされている。

b）各文章につき，大体において学年順をおってスコアが高くなってゆき，読解力の発達段階を調べることが出来る。

c）上の二つのことから，子どもの発達段階に応じた適当な難易度をもつ文章を教材として選ぶことの出来る可能性をもつ。

3.　広告文のごとく，さらに短い文につきクローズ法を応用したところ，各広告文につき差のあるスコアを得た。

これは，それらの広告文が相対的に被験者にどのていどファミリアーに知られているかを知る手がかりとなる。ある広告文につき広告をする前としたあとにテストを行えば，その広告文の被験者への読み易さや知られ方などを測ることが出来よう**。

4.　これらの実用的応用として考えられることは次のようなものである。

a）文章の長さにほとんど制約なく，クローズ法が用いられること。

b）児童のカリキュラムを考えた場合，その発達段階に応じた適当な文章を選択することが出来ること。試案として，モデルの図をこころみた。

* 従来のクローズ法では抜取率10%～20%ブンクラ数大体40個を必要とするので逆算すると出て来る。

** この場合もいくつかの広告文について比較して相対的に出てくるわけである。

c）成人用，児童用の文章もともに代表的文例について読み易さの尺度をつくっておけば，その尺度に，ある任意の文の読み易さを位置ずけることが出来る。

追　記

本論文は小笠原の昭和33年度お茶の水女子大学における卒業論文の一部にもとづくものである。多くの資料と援助を下さった芝祐順氏，その他多くの方々にお世話になったことを心から感謝いたします。

文　　献

(1) Dale, E. and Chall, J.
"A Formula for Readability"
Educational Research Bulletin 1948—1
(2) 〃
"A Frmula for predicting Readability; instruction" 1948
(3) Fresch, R.
"The Art of Plain Talk" 1948
(4) 〃
"How to Test Readability" 1951
(5) W. L. Taylor
"Cloze Procedure A New Tool for Measuring Readability"
Journalism Quarterly Fall 1953 p. 415～433
(6) 〃 ,Kyung Won Lee
"Written Korean and Cloze Procedure"
July 1956 (unpublished)
(7) 芝　祐順
読み易さの測り方　心理学研究 Vol. 28 No.2 p.67
(8) 波多野完治　小笠原生子
やさしい文章とむずかしい文章
読書科学 4　昭和32年 9 月　p.58
(9) 堀川直義
文章のわかりやすさの研究
朝日新聞調査研究室報告　1957
(10) 森岡健二
教科書文章の難易調査
言語生活　昭29年 3 月　p.35
(11) 〃
読み易い文章とは——測定法の試案
新聞研究　No.32　P.28

小・中学生の中断読書について*

——その実態と要因をさぐる——

岡 本 奎 六**

I はじめに

ふつうの読書調査は，読み切れた本について行われる。この読書調査は，読み切れない本を中心とした，中断された読書の調査である。

誰でも，読み切れないのに，途中で読書を中断したくはないであろう。多くの場合，読書を中断してしまえば，読書の目的が達せられないだけでなく，読書による満足感を味わうこともできないからである。それにも拘らず，読書の中断が応々にして行われるのは，読書の途中で種々の障碍が現れてくるからである。その為に，止むを得ず読書を中断するのである。

この読書調査では，たとえばつぎのような点を明らかにしようとしている。

「読書の中断は，児童の読書においてはどのくらい現われているか」

「読書の中断は，どんな内的および外的障害によってひきおこされるか」

「中断された読書は，再び適当な機会に継続する気持があるのか」

このような点について，先ず大雑把な分析を試みるのが，この調査の目的である。その為に，主として客観的ステトの選択法を用いた質問紙を作製した。そしてこれを6月上旬に，各学級単位に実施した。問題の解答は主に学級で授業中に一斉に行なわれたが，読んだ図書の発行所やページ数などで正確に覚えていない部分は，家庭に持ち帰って記入させた。

被調査者は，表1にみられるように，小学校6年生群中学生群，女子高校生群に三大別される。これらの学校の選択に当っては，積極的に御協力いただける学校ということを目安にした。したがって，この調査は日本全国の児童生徒を代表する見本について行われたものではない。たまたまある学校について行われた資料であるということを，結果の解釈に当っては考慮する必要があろう。

II 読書量の調査結果

この調査の第一問は，5月中に読んだ教科書以外の単行本の調査である。読み切れた本も途中で中断した本も，共にその①著者，②書名，③発行所名，④ページ数を書かせた。途中で中断した本については，⑤中断したページも書かせた。この第一問の調査資料について，先ず読書量を調べてみよう。

(1) 学校差の大きい読書量

表1は，一人一カ月当り読む冊数の平均を算出し，これにより群別の読書量を示したものである。表によると一人一カ月当りの読書量は，小学6年生群も女子高校生群も2冊強である。筆者が他の研究の資料を整理しかえしたところによると，一人一カ月当り2冊内外の単行本を読むという結果がでているので(註1)，この調査結果は先ず穏当な線といえよう。ただ中学のTM中学1・2年生群の読書量は，表1によるとはるかに大きく，T中学とY中学の3年生群の読書量は逆に小さすぎる。これ

---

* A Study on Reading in Children Stopped on Half Way
——chiefly about their Reading Lives and the Reading Barriers——

** by Keiroku Okamoto
(Rissyo-gakuen College for Women)

は，前者においては読書力を向上させる為の組織的な指導を3年連続行ってきている。（註2）そういう特別指導の一つの効果が，読書量の増大となって現れたものであろう。後者の読書量の小さい理由としては，これは中学3年生のためであろう。中学3年は進学や就織という特殊な問題が横たわっている学年であるから，一般的には読書の陥没する時期ではないだろうか。なお同じ中学3年でも農村のT中学の読書は陥没が甚だしいが，これは田植の盛んに行われている5月の読書調査であったから，その為にとくに陥没が著しいのであろう。

(2) 3冊に1冊は中断されている小学6年生の読書。つぎに，表1の読み切れずに中断した図書の読書量を眺みてみよう。これによると，中断した図書は一人一カ月に一冊未満である。いま，読んだ本全体を100％とし，その中の中断された図書の割合を算出してみると，それは表2のようになる。この表でみると，小学6年生では，

（表1） 一人一カ月当りの読書量

学校・学年		学校所在地	被調査者数	読書量	
				読んだ本全体	中断された本
小学校	T小学	宮崎県郡部	48人	2.0冊	0.7冊
	R小学	東京都品川区	42人	2.4冊	0.9冊
中学校	TM中学1年	神奈川県市部	41人	3.5冊	0.9冊
	TM中学2年	〃	48人	3.8冊	1.0冊
	T中学3年	宮崎県郡部	42人	1.1冊	0.3冊
	Y中学3年	東京都杉並区	76人	1.6冊	0.4冊
女子高校	R女子高1年	東京都品川区	99人	2.2冊	0.5冊
	R女子高2年	〃	81人	2.1冊	0.5冊

（表2） 読んだ本全体に対する中断された本の割合(%)

小学6年群	中学校群	女子高校群
32 %	27 %	23 %

中断された本の割合が最も多く，3冊に1冊にものぼっている。いかに読書の中断という，問題の読書が多いかが明らかである。

もっとも，この傾向は中学・高校に進むにつれて，漸次減少する傾向はみられる。これは，上級学年に進むにつれて，

①適書選択の技能が向上すること。

②読書力が向上すること。

③望ましい読書習慣がつくこと。

こういった種々の理由にもとずくものであろう。

Ⅲ 読書内容

つぎに，読まれた本を種類別に集計すると，表3のA欄のようになる。この表について，つぎに考慮してみよう。

(1)小学校6年生群は伝記・少年少女小説を多く読む，表3によると，小学校6年生群は，伝記と少年・少女小説を圧倒的に多く読んでいることがわかる。このうち伝記については，加藤輝男著「福沢諭吉」掘尾春史著「勝

（表3） 読んだ本の種類別

	(A)読んだ本全体		(B)読んだ本全体/中断された本	
	小学6年	中学	小学6年	中学
童話	12%	5%	2.6	5.0
少年・少女小説	20〃	22〃	5.0	4.4
冒険・探偵物	15〃	9〃	2.2	2.3
歴史・科学	28〃	11〃	2.0	2.7
自然科学	6〃	4〃	3.0	2.6
文学	9〃	37〃	2.5	3.5
その他	10〃	12〃		

海舟」，塚原亮一著「コロンブス」，中沢公平著「マルコポーロ」などは比較的多く読まれている。少年少女小説の方は北条誠著の「幸は山の彼方に」「孤独の花」式の少女小説が多く読まれている。この他に小学6年生群で多く読まれている冒険探偵物は，江戸川乱歩著の「少年探偵団」「怪人二十面相」に集中しており，当然なことであるがこれは男子に多い。童話は主に著名な外国作品で，たとえばグリム，アンデルセン，バーネットなどがあげられる。小学6年生群で意外なのは文学作品が約1割もあげられていることである。これは原著そのままでなく，子ども向きにやさしく書きかえたものを読んでいるのである。この種のものとしては漱石著「坊っちゃん」「わが輩はねこである」，福田清人著「古事記物語」「平家物語」などが比較的多くのものに読まれていた。

(2)中学頃から文学的興味の比重が増大する。表3の中学生の読書内容の分析によると，小学6年生群とはかなり異った傾向がみられることである。ことに，①小学校では下位の文学が，圧倒的優勢で第一位にのし上っている。この傾向は女子高校生ではさらに強まる。表にはないが，女子高校生群の場合，その読書内容は9割近くが文学作品である。

中学生群の読書内容で，つぎに多いのは，②少年少女小説である。つまり，少年少女小説の人気は，中学生にもかなりあることがわかる。これに対して③歴史伝記物は中学ではぐっとへる。他の多くの調査では，歴史・伝記物は中学は盛んに読まれ中学はそういう時代のはずであるが，この調査ではむしろ小学6年生の方に山が移っている。④冒険探偵物⑤童話の類はさすがに中学生となると大部減少している。⑥自然科学に関する書物は少数のものではあるが，小中学とも着実に読んでいる形跡がある。ここで，中学生によく読まれている作家をあげるとつぎのとおりである。（括弧内は作品例）

(A)夏目漱石（坊っちゃん）
川端康成（歌劇学校）
芥川竜之助（蜘蛛の糸）
山本有三（心に太陽を持て）
石坂洋次郎（丘は花ざかり）
(B)大林清一（夢いつの日に）
北条 誠（緑はるかに）
円地文子（春待つ花）
(C)竹山敏郎（ベートーベン）
池田宣政（リンカーン）
瀬沼茂樹（島崎藤村）
(D)柴田錬三郎（白馬の騎士）
呉 承恩（西遊記）
クリスチー（ＡＢＣ事件）
(E)バーネット（小公子）
ウェブスター（足長おじさん）
リビボルフ（わが友キキー）
サッパー（母の一家）
ジイド（田園交響曲）

以上挙げた作家の作品が比較的多く読まれている。なお邦人作家と外国人作家との作品の比はほぼ7対1となっている。したがって，中学生では翻訳物の占める比重はまだそれほど大きくはないといえよう。

(3)女子高校生は武者小路作品と翻訳物が多く読まれる。

最後に，女子高校生の読書内容をながめてみよう。先ず，邦人作家の作品と外人作家の作品との読まれる比率であるが，その比はほぼ2対1となっている。これを中学生の7対1という比率に較べるならば，女子高校生はいかに翻訳物を愛好しているかが明らかである。では，具体的にどんな作家の作品が読まれているか，それはつぎのとおりである。なお，このうち武者小路が断然トップであった。（括弧内は作品例である）

武者小路実篤（友情・幸福論）
夏目漱石（草枕）
山本有三（真実一路）
石坂洋次郎（丘は花ざかり）
芥川竜之助（羅生門）
川端康成（千羽鶴）
ジイド（狭き門）

ヘッセ（湖畔のアトリエ）
デユマ（椿姫）
スタインベック（赤い小鳥）

(4) 読書の中断は冒険物・伝記に多い。

以上，読んだ本全体の読書内容について考慮してきた。ここで中断された本について，どんな読書内容のものに多いかを述べよう。表3のB欄は，本の種類別に読んだ本全体を，中断された本で割った値である。したがって，この欄の値2.6は，2.6冊読むうちに1冊は終りまで読み切れないということである。

表3のB欄の値をみると，小学6年群も中学群も，少年・少女小説欄の値は大きい。4,5冊に1冊ぐらいしか，読書の中断が行われないのである。少年・少女小説は興味本位で，軽い気持で読めるから，この結果は当然なことである。

表3のB欄をみると，冒険探偵物と歴史伝記は共にその値が低い。つまりこれらの本は読み切れないで，中断され易いのである。これは小学6年生群についても，中学生群についてもいえることである。冒険探偵物は興味性は強いが，まとまったいくつかの事件にわかれている。したがって事件のまとまりまで読めば，終りまで読まなくても結構満足できる。それに，冒険探偵物は自分で本を買って読むよりも，ちよっと借りて読むということが多いであろう。こんなところに，読書の中断の多い原因があろう。これに対して，歴史・伝記物はやはり興味性がうすく，しかもかなりページ数があるという点に，中断の原因があるのであろう。

童話については，小学6年群にかなり読書の中断が多い。表3のB欄によれば2.6冊に1冊の割分で読み切れないのである。これは，前にのべたように，かなりページ数の多い翻訳童話が読まれているせいであろうか。中学では5冊に1冊しか読書の中断がみられないが，これは事例数が少ないので統計学的には信用できない。同様な意味で信用できないのは自然科学に関する本である。これは小・中学とも読んだものが僅かしかいないからである。

最後に文学作品であるが，これは小学6年群では2.5冊に1冊の割合で，比較的読書の中断が多い。子ども向きにやさしく書きかえても，やはり内容的についてゆけない文学書が多いためであろう。中学生になると，中断は3.5冊に1冊であるから，かなり文学書についてゆくようになる。文学といっても，大衆小説もこれに含めているので，この点も加味して解釈せねばならない。

Ⅲ 中断された読書の分析

中断された本の種類別については，これまでにのべてきた。ここで中断された本について，その読書目的，読書動機，読書の障害などの分析を行ってみよう。被調査者は前と同じであるが，調査期間中に（本年5月1日～31日）読書の中断のなかった若干名の被験者もいる。これらのものは当然除外してある。

(1) 読書の目的意識は娯楽的な線が強い。

先ず中断された本について，「何のために読もうとしたか」を調査した。方法は選択法を用いて自分の該当する欄に印をつけさせた。結果は表4のとおりで，小学6年群も他の群も，「楽しみ」のためという答が最も多い。とくに，女子高校の場合は著しい。これに「暇つぶしのため」という読書目的を加えると，7割近い数値になる。余暇生活における自由読書である以上，娯楽的要素

（表3） 中断した図書の読書目的

読書目的 / 群	①暇つぶし	②楽しみ	③(工作などの)作り方を知る	④教養	⑤学校の勉強	⑥(昔や遠くのことを)知る	⑦その他
小学6年	5%	34%	5%	5%	19%	21%	11%
TM中学1.2年	10〃	34〃	2〃	14〃	18〃	12〃	10〃
中学3年	8〃	30〃	2〃	10〃	14〃	41〃	14〃
女子高校	17〃	52〃	0〃	10〃	4〃	3〃	14〃

が重視されるのは当然なことではある。が，それにしても教養や学習や知識の拡大ということを意識して読書することが，もっと多くあって然るべきであろう。つぎに，学年別で比較的明瞭な傾向のあるのは，⑤の「学校の勉強のために」と⑥の「(遠くのことや昔のことを) 知るために」という目的である。これは，娯楽的読書の傾向とは逆に，上級学年ほど減少している。つまり，上級学年になるなど，自由読書に対する娯楽意識が強く，教養意識が減少しているのである。実際問題としては，読書には娯楽的要素と教養的要素とが不可分に働いており，両者を峻別することはできない。しかし，読み手がそこに教養的要素を強く意識しているかいないかは，それにより読書態度や読みの深さにおのずから相違が生れてくるであろう。こうした観点からいうならば，上級学年において，自由読書に意識的には「暇つぶし」や「楽しみ」を求める傾向が増大するということは，一考を要するであろう。

(2) 読書の動機は主に自主的な選択である。

中断した本の読書動機は表5に示してある。表5によると，(1)から(5)までは他の人の奨めにより読む場合であるが，これはせいぜい3割までで比較的少ない。これに対して，(6)の「自分でその本を見つけ，読みたくなったので」という動機は圧倒的に多く，5,6 割にものぼっている。つまり，どの群も約半数が図書の自主的選択を行っているのである。それにもかかわらず，途中で障害につき当って，読書を中断してしまうのである。

(表5) 中断された本の読書動機

読書目的 / 群	(1)家の人のすすめ	(2)先生のすすめ	(3)友人のすすめ	(4)新聞雑誌のすすめ	(5)図書館のすすめ	(6)自分で本をみつけて	(7)何となく読んだ	(8)映画テレビをみて
小 学 6 年	5%	15%	0%	0%	0%	54%	25%	4%
TM中学1·2年	2〃	23〃	4〃	2〃	2〃	48〃	16〃	2〃
中 学 3 年	1〃	2〃	7〃	0〃	0〃	56〃	20〃	5〃
女 子 高 校	2〃	4〃	17〃	3〃	0〃	52〃	18〃	4〃

つぎに個々の項目について，問題点を考慮しよう。

○他人からすすめられて読んだという読書動機の中で，先生のすすめは下級の小学6年群にやや多いが，これは当然であろう。この群より多いのはTM中学で，全体の23%が先生のすすめである。これは読書の指導を行っている特殊な学校にみられる特色である。

○家の人のすすめ，新聞雑誌のすすめ，図書館のすすめはしおなべて少ない。全部多少なりともあるのはわずかにTM中学だけである。これは中断された本についての結果であるが，一般の読書動機においても同様でろあうか。若しそうなら学校図書館のはたらきかけを，もっと積極的に行うことや，新聞雑誌の書評欄・図書のすすめなどをもっと利用する指導は，その余地がかなり残されている。

○友人のすすめは，女子高校生では，17%とかなり伸びている。読書環境としての友人の重要性を示すものである。

○映画・テレビの影響は少ないが，どの群にもみられる。視聴覚的用具が，読書の誘発刺戟として，教育的に利用し得る可能性を示すものといえよう。

○改たまった動機はないが，何となく読んでしまったという項目 (7) は，どの群も1,2割で，かなりある。暇な時に無意図的に読むという読書習慣が，これに当ろう。こういう読書をする時には，もっと中断があっても不思議ではなかろう。

(3) 読書中断の原因 (読書障害)

読書中断の原因はどこにあるか。小学6年TM中学12年・中学3年，女子高校の4群について，この点を調べた結果が表6である。表により，比較的多くのものが挙げている原因から考慮をすすめることにしよう。

○先ず「文章が長すぎて飽きてしまった」という理由が最も多く，特に小学校6年TM中学1，2年の両群では全体の2割にものぼっている。そこで，試みに読んだ図書一冊当りのページ数を算出してみるとつぎのとおりであった。小学6年（232ページ）中学（235ページ）女子高校（250ページ）

このようにページ数に関する限り小学6年も高校も大差なく，いずれも200ページを上廻っている状態である。活字は比較的大きく，ページ当り600文字前後であり，また挿絵がかなり豊富に入っているとはいえ，200ページを超える図書が主である。これでは，やや劣った児童には長すぎるであろう。時々，書店の店頭で，あるいは小中学校の学校図書館で見ても，劣った子どもを対象とするすぐれた短篇ないし中篇が少ない。そして多くは長篇の世界名作全集的なものが出廻りすぎているように思われる。

○「文章が長すぎて飽きた」という理由は，厳密には図書と読者との関係要因ということができる。これと同様に，(4)の「文字や語句が難しすぎたので」，(5)「中味が難しすぎた」のでの二つも関係要因といってよかろう。この両者とも読書中断の原因としてかなり多くの数値を占めている。ここから考えられることは，文字や語句や内容が読書抵抗となるような図書がかなりあるということである。これらの抵抗をどう克服させるかということが読書指導ないし図書館教育において，もっと研究されねばならない。たとえば，難解な語句や文章の理解を援助したり，引き易い辞書を備えてその使い方を指導するようなはたらきかけである。

（表6）読書中断の原因

原因 / グループ	(1)予想とは中味がちがう	(2)中味がつまらない	(3)長すぎて飽きる	(4)文字言葉が難しい	(5)中味が難しい	(6)家の手伝い	(7)勉強が忙しい	(8)体のぐあいが悪かった	(9)借りた本で返した	(10)もっとおもしろいことができた	(11)その他
小学校6年	4%	4%	21%	10%	8%	6%	24%	5%	12%	2%	4%
TM中学1	5〃	18〃	21〃	12〃	6〃	5〃	7〃	2〃	13〃	1〃	10〃
2年											
中学3年	9〃	8〃	16〃	13〃	14〃	0〃	9〃	0〃	19〃	0〃	12〃
女子高校	8〃	20〃	11〃	6〃	14〃	5〃	19〃	0〃	3〃	0〃	14〃
平均 I	6〃	12〃	17〃	10〃	11〃	4〃	15〃	2〃	12〃	1〃	10〃
平均 II	18%		38%			34%					10%

○つぎに，関係的要因ではあるがどちらかといえば読み手の主体的条件に重みがかかるものとして，(1)の「予想とは中味が喰い違っていた」(2)の「中味がおもしろくなかった」の二者があげられよう。この原因は図書選択の技能が向上すればもっと減少するであろう。しかし，後者の「中味がつまらなかったから」という答は，比較的読書指導の盛んなTM中学と年令的に上の女子高校において，却って高い数値を示している。これらのグループは，図書選択技能は高いと考えられるが，同時に批判的に読む態度もすぐれていると考えられる。その為に，内容批判を行いながら読み，無価値なおもしろくない図書は中断してしまうということもあろう。これがTM中や女子高校に理由(2)による読書中断の事例が比較的多い原因であろう。

○読書中断の条件の中で表の(6)～(10)はいわば外的な障害である。つまり，読み手と図書との関係的な要因ではなくて，しかも読書中断の方向に作用する要因である。このうち，特に(7)の「勉強が忙しかったから」と(9)の「借りた本で返さねばならなかったから」は比較的多くのものが答えている。前者は，余習復習，あるいは宿題などが自由読書を妨げ，続けて読む意欲を損ねることを示すものである。後者は，読みたい本が好きなだけ自由に手に入る読書環境に欠けており，貸本屋やおともだちから借り読みをする場合が案外多いことを示すものといえよう

(4) 中断した読書は，できたら続け度いと考えられている。

最後に，中断した読書は再び続ける意図があるかどうかの調査結果を示そう。表7がこれである。表によると，ぜひ読み度いという答は平均25%である。これに，「できたらまた読み度い」を加えると，68%にもなる。いいかえれば，中断した図書3冊中2冊の割合で，再読の意図があるということになる。つまり，読書を中断したが，それは何らかの障害によるのであって，その図書自体を好まないというわけではない。

(表7) 中断した読書の再読に対する意図

意図 / グループ	(1)ぜひ読み度い	(2)できたら読みたい	(3)どちらでもいい	(4)もう読み度くない
小学校6年	33%	36%	3%	28%
TM中学1.2年	20〃	47〃	7〃	26〃
中学3年	24〃	39〃	13〃	24〃
女子高校	23〃	50〃	7〃	20〃
平均	25%	43〃	7.5〃	24.5%

V 結 び

この読書調査は，終りまで読み切れずに，中断された読書を中心にした読書調査である。調査結果の主な点をまとめると，つぎのとおりである。

(1) 一人一カ月の読書量は平均2冊前後である。しかし学校差は大きく，平均1.1冊から3.8冊にわたっている。3.8冊という群は学校で読書に関する特別の指導を行っている学校で1.1冊はある中学3年である。一般に中学3年は読書量の陥没傾向がある。

(2) 全体の読書量に対する中断された本の読書量の割合は，小学校6年生群で約3割もある。上級学年になるとこの割合は次第に減少するが，これは読書力の向上や適書の選択力の増大を反映するものであろう。

(3) 小学校6年生群の読書内容は，伝記・少女小説が第一位で，冒険探偵物や童話がこれにつぐ。中学になると，少年少女小説の人気は依然おとろえないが，伝記は小学6年群にお株をうばわれたかたち。その代り，中学では大衆小説を含めた文学熱が，他の読物を圧して第一位に進出し，女子高校群になると，もっぱら文学というところ。文学（女子高校群）では武者小路，少女小説では北条誠，探偵物では江戸川乱歩，伝記では福田清人といったところが，多く読まれる作品の著者である。

(4) 小中学両群を通して，中断される読書の比率の多いのは伝記と冒険探偵物。前者は文章の長い割合に興味性がやや乏しいためか。後者はいくつかのまとまった事件の集まりであり，個々の事件のまとまりごとに読書欲がみたされてしまう為か。中断される読書の比率が少ないのは少年少女小説。軽く流し読みができ，興味性の大きいのがその原因か。

(5) 中断された読書に関しては，読書目的の意識は主として娯楽性にある。この傾向は上級学年になるほど顕著である。これは，上級学年では娯楽的な気易く読む本だけしか中断しないということか。それとも上級学年になるほど自由読書一般が教養や学習を意識せずに読むようになるということか。

(6) 中断された本の読書動機は，先ず自主的な選択によるもので，これが約半数。他人のすすめでは下級学年群の先生，女子高校のお友だちが目立つ。図書館のいざない，新聞雑誌の読書欄その他のすすめ，家の人のすすめ，それにラジオ映画の影響等は，読書動機としては比重が軽い。

(7) 読書中断の要因には，先ず文章の長さ難かしさなど。これらは本の属性というよりも，むしろ本と読み手との関係要因といえよう。これらより，やや読み手の側によった主体的要因である，内容が，「つまらない」，「予想と異った」などが第二の要因。外的な要因の中では，「勉強がいそがしい」「借りた本なので返した」の二つが比較的多い。これら読書の障害となり，これを中断させる要因の除去は，読書指導や図書館教育の改善にまつところが大きい。

(8) 中断した読書については，再読の意図をもつものが約7割。つまり，それぞれの読書障害さえとりのぞかれるならば，再読される図書が多いということである。

以上がこの調査の主な結果である。この調査は予備的なものであって，さらにつぎの諸点について，一歩進んだ調査がのぞまれる。

第一に被験者群の選択である。この調査は年令発達や

地域差や男女差をみるに足るだけの見本選択がなされて，これに基づいて資料を算出したものではない。

第二に読書目的にせよ，読書動機にせよ中断された本についてだけでなく，読み終えた本についても調査する必要がある。これとの比対対照することによって，中断された読書のそれらを，より正しく位置づけることができる。

第三に被験者の中から10分の１とか15分と１とかいう抽出比をもつ一定数の被験者をさらに選び，事例的に詳細に調査することが大切である。それは単に個々の解答の正確度を確かめたり，解答の意味するところを詳細に知るためだけではない。読書力の高い児童とそうでないもの，特定のパーソナリティ傾性のあるものとそうでないもの――こうした個人差により，中断された読書にいかなる相違がみられるかを知るためである。

（附記）この研究には，立正学園女子短大児童心理班の，つぎのものが参加した。

（註１）岡本奎六「児童雑誌図書の心理学的考察」（中山書店「教育心理学大系」13巻Ｐ53）

（註２）茅ケ崎市立鶴嶺中学校「読書力向上についての研究」（昭和34年全校発行）

小学生の漫画の興味*

講談社児童文化研究会

阪本一郎**

講談社の児童文化研究会では，子どもの漫画の改善について研究するために漫画分科会を設け，滑川道夫，奥下市郎，阪本の三名を加えた社内の山本康雄，鍵山松彦，鋤柄肇，茂木守国，吉田宏明の各委員たちで研究集会を続けてきている。ここに報告するのは，その分科会で行なった調査の一部分である。

質問紙法によって，昭和33年11月中に調査した。被験者はつぎの各校の1年から6年まで1組ずつで，男子3,662名，女子3,441名，総計7,103名である。

A　大都市（4校）

東京・成蹊小学校	東京・板本小学校
京都・竜池小学校	大阪・高津小学校

B　地方都市（3校）

山形・第四小学校	山口・琴芝小学校
秋田・大曲小学校	

C　郡部（6校）

北海道・川上小学校	青森・古川小学校
秋田・花館小学校	千葉・国分小学校
東京・青梅第五小学校	鳥取・八東小学校

1　登場人物について

漫画の登場人物として，どんなものを子どもは愛好しているか。現に読まれている漫画に登場している度数の高いものを選んで，人間の子ども，人間のおとな，動物，怪物，ロボットの五つを選択肢としてあげ，その中の一つか二つにまるを付けさせた。その結果は第1表のようであった。

(a)　まず全児童についてみると，ロボットが最高の人気を占めている。次が人間の子ども，怪物，動物の順で，人間の成人を選ぶものはもっとも少ない。

(b)　ところが，男女別にみると，多少好みが違うのである。ロボットに人気があるのは実は男子のほうであって，女子はそれよりも子どものほうを好んでいる。すなわち一般的にいって，男子の大部分は，ロボットと怪物の出てくる漫画を好み，女子の大部分は，子どもか動物の登場するもののほうを好む傾向がみられる。

(c)　年齢によっても，多少の変動がある。男子にあっては，どの学年でも，ロボットと怪物とで過半数を占めているが，しかしこの二つの愛好率がいちばん高いのは，小学2～3年のころである。そして男子の低学年では動物が比較的多くよろこばれているが，年齢が上になるにつれてその率は低くなり，その代わりに子どもが多く好まれるようになっている。漫画におとなばかりが出るものは，どの年齢でも人気がないようである。

女子にあっては，興味の中心が，年齢によってかなり大きく変動するようである。子どもの人気はどの年齢でも最高であるが，その人気は，低学年から高学年に進むにつれて，ますます高調していく傾向がみられる。これに対して，1～2年では動物が次位にある。動物を好むことは，男子の場合と同じように，年齢が上になるにつれて低率になっていくが，女子はその次に男子と同じくロボットを好んでいる。これは4年生のころに第2位を占める。しかし女子は怪物がきらいのようである。その代わりおとなに対する好みが，年齢とともにふえてくる。

---

* Comic Interest in Pupils

** Ichiro Sakamoto (Kodansha Childrens Culture Research Institute)

"母の秘密物" などの類に興味が出てくることを示すのであろう。

(d) 地域別には大きな違いがみられない。

(e) これを要するに，男子の好む漫画の登場人物は，ロボットと怪物であり，女子の好む登場人物は，子どもと動物ということになる。男子の選ぶものは，二つとも架空の人物であって，その怪奇な，超人間的な性格と行動とが興味をそそるのであるようである。かれらはそうした超現実的な存在の神秘的な魔力に驚異し，あるいはこれに挑戦することの痛快さを漫画の中に求めているのであろうか。

第1表　漫画の登場人物が好まれる率(横に合計100)

登場人物		子ども	おとな	動物	怪物	ロボット
男子	1年	11	4	19	**27**	**39**
	2年	9	5	12	**33**	**41**
	3年	9	4	13	**32**	**42**
	4年	16	7	11	**27**	**39**
	5年	16	6	9	**30**	**39**
	6年	18	6	9	**28**	**39**
	全	13	5	12	**30**	**40**
女子	1年	**27**	10	**28**	12	23
	2年	**35**	10	**22**	11	22
	3年	**35**	10	22	11	**22**
	4年	**42**	12	14	12	**20**
	5年	**51**	13	12	9	**15**
	6年	**53**	**16**	12	9	10
	全	**42**	12	**18**	10	18
男女計	大都市	**23**	9	16	**23**	**29**
	地方都市	**30**	7	14	18	**31**
	郡部	**27**	8	14	20	**31**
	全国	**26**	8	15	21	**30**

これに反して女子は，身辺的な子どもと動物を選んでいる。女子には，怪奇なものを征服するさつばつな闘争のスリルのごときは，あまり好かれないらしく，むしろ，愛らしいものへの愛情の刺激を求めているように思われる。高学年でおとなへの関心が高くなっていることも，女子における human interest の強いことを反映しているのではあるまいか。(女子のロボットに対する興味も，怪奇性よりは，そのかわいらしさ——人形性に引かれているのではないかと考えられる。)

男女に共通なのは，低学年で動物への興味が高いことである。これは animism の心性として理解されよう。

2. 時代背景について

次に漫画の内容が，どのような時代を背景に描いてあるものが好まれるかをたずねてみた。すなわち①むかしの話，②いまの話③これからの話の三つの選択肢の中から，好きなものにまるを一つ付けさせたのである。結果は第2表のようであった。

(a) 漫画の時代背景としては，過去がもつとも愛好されるようで，ほぼ半数の者がこれを選んでいる。次位が未来である。現在を選ぶものは，もっとも少ない。

(b) 男女別に見ると，第1位が過去であることは同じであり，その比率も等しい。ただし第2位に差があらわれている。すなわち男子は未来のほうを，より多く選ぶのに対して，女子は現在のほうを，より多く選んでいるのである。

(c) 年齢によっても，好みの変動がみられる。すなわち首位を占める過去（厳密ではないが時代漫画と言いかえる）は，低学年において高率であって，年齢が上になるにつれて低下していくのである。この下降曲線は，男女とも等しい。

これに反して未来漫画は，やや低い姿勢ではあるが，年齢が上になるにつれて高率になっていっている。この傾向は男子のほうにいちじるしく，5～6年では，時代漫画の首位を奪っているのが目立つ。

現在漫画は男女とも1年でわりあいに高率だが，2年で下り，男子ではそのままふえないけれども，女子では成長に伴なっていくらかふえている。

(d) 地域差がある。時代漫画は郡部の子どもにもっとも多く好まれ，地方都市，大都市と都会へ行くほど好まれなくなるのに対して，未来漫画は逆に，大都市の子どもにもっとも多く好まれ，いなかへ行くほど好まれなくなっている。

(e) 子ども漫画の舞台として，過去がもっとも喜ばれ

るのは，その romanticism 的性格の宿命によるのであろうか。低学年でとくに高率なのは，その年齢で昔話が好まれることの連鎖反応であるとも解されるが，それよりも一般に子どもは，漫画の中に，現実を逃避した夢や空想を求める傾向が強いことを物語っているのだと解すべきであろう。かかる現実逃避の世界としては，過去がもっともはいりやすい。作家にとっても，もっとも easy going なのだ。

ところが年長になるにつれて，未来漫画への興味が増してくる。これは後向きの romanticism から，前向きの romanticism への移行だと考えられる。現実からの逃避であることには変わりはない。けれども前向きの逃避は，後向きの逃避よりも骨が折れる。後には住み慣れた世界があるが，前には未知の世界が広がっている。この世界に踏みこむには一歩一歩新しい足場を発見しなければならない。それには知性を働かす必要があるのだ。もっとも漫画で使う知性の程度は知れたものだが，それにしても一応は論理にかなった想像的生産をしなければならぬ。かかる想像的生産への知的欲求が，年齢とともに強くなることを反映しているのではあるまいか。

この傾向が高学年の男子にいっそう強く現われることと，かれらがロボットや怪物を好むこととの間には関係があるように思われる。また大都市の子どもがもっとも多く未来漫画を好むこと，これに反していなかの子どもほど時代漫画を好むことも，かれらの romanticism が前向きであるか，後向きであるかを物語っていると解してよいであろう。

女子は，未来の世界への挑戦を，男子ほどには好まない。しかし過去にいつまでも沈潜するのでもない。かれらは，あまり骨の折れない現在の世界に関心を持ちはじめる。これは横すべりの現実逃避である。この傾向は低学年から男子よりも強く，5～6年では，過去と現在との関心は，ほぼ同率になっている。あるいはまた，現在的関心の強いことは，女性の本質的な性格でもあろうか。かれらが子どもと動物を好むのもその故であろう。

第2表　漫画の時代背景及び構想の好まれる率
(横に各合計100)

		時代背景			構想	
		過去	現在	未来	現実的	空想的
男子	1年	**60**	25	15	**67**	33
	2年	**57**	16	27	**58**	42
	3年	**57**	13	30	49	**51**
	4年	**44**	16	40	45	**55**
	5年	40	7	**53**	49	**51**
	6年	36	14	**50**	47	**53**
	全	**49**	15	36	**52**	48
女子	1年	**53**	32	15	**68**	32
	2年	**65**	21	14	**71**	29
	3年	**58**	23	19	**69**	31
	4年	**44**	28	28	**66**	34
	5年	**39**	38	23	**73**	27
	6年	**38**	37	25	**77**	23
	全	**48**	31	21	**71**	29
男女計	大都市	36	24	**40**	**53**	47
	地方都市	**50**	22	28	**63**	37
	郡部	**57**	21	22	**67**	33
	全国	**48**	22	29	**61**	39

3. 構想について

次に子どもは，現実的な構想と，空想的な構想の，どちらを多く好むかを調べてみた。〝ほんとうにあるような話〟と〝ほんとうにはないような話〟の，どちらが好きか，まるを付けさせたのである。その結果は，第2表に掲げてある。

(a) 子どもの大部分は，現実的な構想のほうを選んでいる。

(b) 男女別にみると，どちらも現実的構想のほうを多く選ぶことは変わりがないが，しかし，この傾向は女子のほうに，きわめていちじるしい。男子にあっては空想的構想も，ほんのわずかの差まで高くなっている。

(c) 年齢による差は，男子と女子とは反対の傾向を示している。女子の現実的構想を好む傾向は，ゆるやかな傾斜ではあるが，年齢とともに上昇を示しており，男子では低学年で高いがあとは下降して，空想的構想のほう

が多く選ばれる傾向が出てきている。

(d) 地域差も，すこしある。現実的構想のほうを多く選ぶことは，いずれも同じであるがその傾向は郡部においていちじるしく地方都市ではその差がやや小さくなり，大都市ではさらに小さくなっている。言いかえると，都市性が強くなるほど，空想的構想のほうに傾く傾向があるようである。

(e) 子ども漫画は，〝ほんとうにあるような話〟のほうが一般に多く好まれている。〝ほんとうにはないような〟作り事は，それほど好まれない。これは前項の時代背景の好みと表裏をなすようである。すなわち子どもは過去や現在の住み慣れた現実に類する世界，すでになじみの深い事物や，すでに承知している人間関係の描かれている安定した世界を求めるのである。漫画における現実逃避は，一躍して未知の世界へ飛びあがるのではなくて，わりあいに近い隣で満足しているのである。かれらはまだあまり遠出をしない。せいぜい遊び慣れた裏町の広場へ行く程度なのである。

しかし空想的構想への要求は，未来漫画への要求よりも高いことに注意しなければならない。（約1割上回っている。）背景は現在ないし過去であっても，そこに架空の超現実の夢を持つことには魅力を感じている者が少なくないのである。この傾向は男子においてとくにいちじるしく，1～2年の低学年を除いて，その上の学年ではいずれも空想的構想のほうに多く傾いている。またこの傾向は，農山村よりも都会に近づくほど強くなっているのが見られる。やはり知的な興味を反映するのであるらしい。男子の高学年や，都会の子どもの科学的興味の高いことに関係しているのであろう。ただし比率はかろうじて過半数を占める程度である。漫画においては，知的生産的思考はそれほど高くは満足されないことを子どもは知ついているのだ。

（なお，低学年では現実と空想との識別は困難であると思われるので，数字は上記のように出てはいるけれども，1～2年は現実と空想との未分化期と見て，問題外に置いたほうがよいかもしれない。）

4. 内容について

次に子どもはどんな内容の漫画を好むかを調べてみた。これを捉えるために，漫画の情緒的刺激に対する期待の類型をあげ，その中の一つか二つにまるを付けさせた。質問には次の七つの選択肢を並べた。①冒険の話 ②おかしい話 ③ふしぎな話 ④こわい話 ⑤かわいそうな話 ⑥感心な話 ⑦勉強のためになる話。その結果は第3表のようであった。

(a) 小学生の全体の傾向は，冒険ものと学習ものとを等しく第1位にあげている。第2位はコッケイものと恐怖ものとが同率で並び，悲哀ものがこれに続いている。ついで奇怪もの，そして感動ものが最下位になっている。

第3表 漫画の内容の好まれる率（横に合計100）

内容		冒険	滑稽	奇怪	恐怖	悲哀	感動	学習
男子	1年	**29**	9	12	11	7	6	**26**
	2年	**28**	11	10	17	4	7	**23**
	3年	**27**	13	13	**20**	3	7	17
	4年	**24**	17	15	**17**	5	6	16
	5年	**32**	18	13	**22**	2	3	10
	6年	**32**	**20**	12	19	4	5	8
	全	**29**	15	12	**18**	4	6	16
女子	1年	11	15	11	7	**20**	10	**26**
	2年	8	15	11	9	**19**	12	**27**
	3年	6	15	12	9	**20**	13	**25**
	4年	7	15	9	13	**26**	11	**19**
	5年	7	15	6	**16**	**30**	11	15
	6年	6	14	5	**18**	**33**	12	12
	全	8	15	9	12	**25**	11	**20**
男女計	大都市	**21**	**16**	11	**16**	12	7	**16**
	地方都市	**19**	14	11	15	14	10	**18**
	郡部	**16**	14	11	15	**16**	8	**20**
	全国	**19**	15	11	15	14	8	**19**

(b) 男女の好みの差は，いちじるしい。まず男子は冒険ものを圧倒的に多く選び，これについで恐怖ものを選んでいる。以下，学習もの，コッケイもの，奇怪もの，感動もの，悲哀ものの順になる。これに対して女子は，悲哀ものに集中し，学習ものがこれにつぎ，以下，コッ

ケイもの，恐怖もの，感動もの，奇怪もの，冒険ものの順になる。

これによって大別すれば，冒険もの，恐怖もの，奇怪ものは男子のほうにファンが多く，悲哀もの，感動もの，学習ものは女子のほうにファンが多く，コッケイものは男女ともに等しく好まれているということになる。

(c) 年齢による発達的推移は，次のようである。

男子ではどの年齢でも冒険ものがトップを占めているが，これは5年6年において急にふえている。そして第2位を占めるものは，かなり動く。1～2年では学習ものがわりあいに高率であるが，これは学年が上になるにつれて次第に低くなってしまう。3年からはこれに代わって恐怖ものが第2位にせまっている。そして，6年ではコッケイものが進出してくる。コッケイものは学年に伴って上昇してきたのである。奇怪ものは，どの学年でも第3～4位を占め，率の変動はほとんどない。

女子では，1年から3年までは，学習もののほうが第1位を占めている。悲哀ものは第2位にあるが，学年が上になるにつれて次第に高率になり，4年から首位となって，さらに上昇していく。そこでおもしろいのは，5～6年に恐怖ものが第2位に進出することである。コッケイもの，感動ものは，どの学年でもほぼ同率で変動がない。

(d) 地域差は，あまりいちじるしくはない。ただし大都市では冒険ものが第1位で，コッケイもの，恐怖ものなどがやや多く受けているのに対して，郡部では学習ものが第1位となり，悲哀ものが相対的に高い率になっているのに気付く。

(e) 以上のデータについて考察する。子ども漫画の内容からみて，小学生に愛好されるものの両横綱は，冒険ものと学習ものという結果が出ている。しかし冒険ものは女子には好まれていない。それから学習ものは，男女を通じて低学年で迎えられているだけで，学年が上になると次第にかえりみられなくなっている。だから小学生全体に愛好される漫画の横綱はないわけで，男子は冒険もの，女子は悲哀もの，そして低学年では学習ものと，分けて考えるべきである。

さて男子が冒険ものを好むというのは，男性的な行動意欲の補償を漫画に求めているのであろう。(これは読み物，映画などにおいても同様なのだ。) かれらは現実に解消しえない行動意欲の高揚を漫画を通じて発散し，現実に克服しえない行動の障壁を突破する夢の中に補償的な成功感を味わって，満足しているのである。高学年でこの興味が急昇するのは，かかる行動意欲がこの時期にいっそう高揚することから来ているのであろう。

男子の生活態度が意欲的であるのに対して，女子は愛情的である。かかる女性的な生活態度が，悲哀ものの愛好にみちびいているのであるように思われる。〝かわいそう〟というのは，自分よりも逆境にあるものに対する愛情である。女子は，そのような窮地にある者を愛することに満足する。それによって自分の生活の安定感が得られるからである。登場人物がかわいそうであればあるほど，自分の立場との落差が大きく感じられ，かえって自分がなぐさめられるのである。したがって，かかる感傷的満足は，自分の社会的地位の自覚が高まるにつれて必要になってくる。4年ごろから急に悲哀ものに集中するのは，この故であろう。

奇怪ものは，ふしぎを感ずる知性を必要とする。未知な物に対する好奇心が，なかなか解消されずに，引きずられていく。そのサスペンスに自虐的な快感があるのだ。言いかえると，これは知的に不可解なものの肯定の世界への逃避なのだ。女子はかかる興味を次第に失っていく。

恐怖ものは，危険な場面を設定して，そこから脱出することが不可能な事態に読者を追い込む。かかる事態にわざわざとび込むことを好むのは，その実害が読者自体には来ないからである。その危機にさらされるのは話中の人物であって，読者はこれを傍観し，あるいは共感する立場にある。それだけに読者自身は安全なのである。また登場人物もなんらかの方法で，その危機から脱出するであろうと期待する。この意味で冒険ものの愛好とつながるわけである。しかし男子の2～3年生ごろから，

これがふえるのは，ちょうどかれらが親の保護から独立することによって，現実にも不安を経験することが多くなるのと関係があるように思われる。かかる現実の不安から逃避して，〝より安全な不安の世界〟に遊ぶのであろう。女子もまたこれを愛好するのも，同じ心理によると考えられる。ただし男子よりは1～2年遅くなってからである。

コッケイものは，直接に読者の幸福感を刺激する。そのために漫画はナンセンスな世界を描く。ナンセンスとは，不合理なものの合理化である。理屈に合わないことが，漫画の中ではツジツマが合う。おろかな行為が成功する。勝つはずの強者が負ける。その不合理の論理がおかしいのである。そして笑っている自分は，その世界の外にいて優越感を味わう。現実逃避としては，いちばん手っとりばやい世界であるが，愛好の率はそう高くはない。この種の子ども漫画には佳作がとぼしいからではあるまいか。多くは，わざとふざけた，あくどいもので，くすぐりが強すぎるように思う。男子の高学年で，これが高率になるのは，一方では知的な判断の矛盾がゲーム的興味をそそるからであり，他方では他人の行為のナンセンスを笑う非人情的な態度が出てくるからであろうか。人間的なユーモアや社会風刺はまだ理解できないはずである。

感動ものは，読者の良識に共感を与えるもの。これはもはや現実逃避ではなくて，人間形成における自己充実の要求を満足させるものである。この種の要求で漫画を読む子どもは少ない。真に満足できるような作品も少ないのが現状である。

学習ものは，低学年で愛好されている。あるいは指導者の声の反響であるかもしれない。でなければ低学年向きの読み物に，他に適当なものが少ないからかもしれない。都会よりも農山村のほうがこれを求める率が高いことは，その関係であるようにも考えられる。

また感動もの，学習ものが，どちらかというと女子のほうに愛好されることは，女子は漫画において現実逃避を企てるだけでなくて，むしろすなおに教養を求める傾向が，男子よりも強いことを物語っているのであろう。

5. ベスト・テンについて

最後に，子どもが現在もっとも愛好している漫画のベスト・テンを数えてみた。〝あなたが知っている漫画の中で，いちばん好きな漫画の題を一つ〟とたずねて書かせたのである。その結果をまとめたのが第4表である。数字は順位を示し，男子，女子，男女計の各総合の欄は30位まで，他は10位までを記入し，それ以下は空欄にしてある。

(a) 予期のとおり，〝月光仮面〟が第1位にある。〝さざえさん〟の人気はまだ続いて第2位を占め，〝赤胴鈴之助〟は第3位になっている。以下，表で見るとおりであって，ベスト・テンのうち，男子向きのものが7点，女子向きのものが3点である。

これらが上述のどの類型に属する漫画であるかを分析して考察する予定であったが，そこまで手が回らなかったので，ここには，資料として掲げるにとどめる。

なお，多くは雑誌に掲載されたものであるので，雑誌の配給状況によって，票数が違ってあらわれることを考慮に入れる必要がある。すなわち男子向き雑誌と女子向き雑誌，学年雑誌，都会向き雑誌と農村向き雑誌（例えば〝家の光〟）などの別で，愛好者の分布が規定されてきているはずである。

(b) 男子のあげる漫画の種類は，女子よりも非常に多かった。言いかえると，女子の人気漫画はわりあいに少数のものに集中している傾向があった。

男女の各のベストテンを見ると，共通のものは〝月光仮面〟と〝赤胴鈴之助〟だけである。かかる共通性はおそらく放送の影響であろう。

この二つは男子向きの漫画であるから，女子は，男子向きの漫画をも見るが，男子は女子向きの漫画にはほとんど反応しないことがわかる。このことは，学年別に対照するといっそうはっきりする。

また低学年では男女に共通のものがわりあいに多く，1～2年では5点を数えるが，中学年では3～4点になり，高学年では1～2点というふうに減っている。男女

の興味が年齢とともに分化するからであろう。

(c) 学年別に見ると，全学年を通じて好評のものが，かなりある。いずれも上位のものは，たいてい年齢の別なく愛好されている。しかもそれが男子のほうに6点，女子のほうに2点あることから，年齢にかかわらず多数に愛好されるものは男子向きの漫画のほうに多いということができる。すなわち男子向きの漫画は，縦におおぜいのファンを持つことができるが，女子向き漫画ではそれがむずかしいのである。これは女子にあっては興味の中心の発達が男子におけるよりもいちじるしいということを示しているのではあるまいか。

とくに低学年で愛好されるが，高学年では人気が下るのは，男子では〝月光仮面〟〝赤胴鈴之助〟〝猿飛佐助〟などである。これに反して，高学年で初めて人気が出るのは〝鉄人28号〟〝鉄腕アトム〟〝与太郎君〟〝じゃじゃ馬君〟などである。ここに何かの原理があるように思われるが，作品を検討していないのでなんとも言えない。なお第1位が，〝月光〟から〝鉄人〟に5年生で移行することも注目に値しよう。

女子の低学年で愛好されるのは〝白雪姫〟〝かの子ちゃん〟〝月光〟〝赤胴〟〝猿飛〟などで，高学年で愛好されるのは〝少女三人〟〝ペスよ尾をふれ〟〝山彦少女〟〝ママのバイオリン〟〝月のひとみ〟〝東京の青い空〟などである。そして〝さざえさん〟の低学年における第1位は，3年で〝ペスよ〟に移り，4年からは〝少女三人〟に移っていることが目につく。

(d) 地域による差も目立つ。都会の子どもに愛好されるものは，〝月光〟を筆頭に〝さざえさん〟〝鉄人〟〝ロボット〟〝鉄腕〟などで，郡部に愛好されるものは〝赤胴〟を筆頭に，〝ビリーパック〟〝少女三人〟〝ペスよ〟〝まぼろし探偵団〟などである。

なお都会の子どものほうが，あげる漫画の種類が多かった。これは男子のほうが多種をあげたことと事情が違っている。男子の投票は多種に分散しているが，女子の投票は少数に集中しているので，票数からいえば女子の人気漫画のほうが得票が高い。つまり女子の漫画のほうが一つで多数のファンを持っているのである。ところが，郡部の子どもは，少数の漫画に少数の投票をしている。郡部では漫画の配給が貧困であることから来ているのであろう。

(e) 次におもな人気漫画についていささか考察することにしょう。

〝月光仮面〟は男子の第1位，女子の第6位で，どちらかと言えば男子のほうに人気がある。しかし学年的には低学年に人気があり，4年生ごろまでが山である。また都市部に人気があって，郡部ではそれほどではない。

〝赤胴鈴之助〟の人気はこれまでの他の調査でもトップを維持してきていたのであるが，この調査では第3位に落ちている。女子よりも男子に愛好される度が高いこと，しかも低学年のほうにファンがあることは，〝月光仮面〟によく似ている。だが地域的にはまったく逆で，都市部よりは農山村のほうにファンが多く，農山村では今や第1位の人気である。

この二つの漫画は，いずれも電波メディアの上でも最高の人気を博したもので，前者は雑誌から電波へ，後者は電波から雑誌へという対照的なコースをたどっている。ところで電波の上では〝赤胴〟が早く，これが退いた後へ〝月光〟が登場した。したがって雑誌ないしは単行本における両者の人気も，時期的に前後しているわけで，〝月光〟は〝赤胴〟の王座の後継者という形である。

ところが〝月光〟は現在，大都市と地方都市とでは首位になっているが，郡部ではまだ第5位にあり，〝赤胴〟は郡部では依然第1位を占め，地方都市では5位，大都市では第7位というふうに，地域的に逆なファンの分布を持っている。このことは一つには生活文化の都会から郡部への伝播という一般の法則に従っているものと解される。漫画の人気もまず都会で開拓され，それが次第に地方に及んでいくのである。

第二には〝赤胴〟が時代ものであるのに対して，〝月光〟が現代ものであるところに，ファンの地盤の相違が考えられる。現に〝猿飛佐助〟〝天馬天兵〟〝高丸菊丸〟

第4表　子ども漫画のベスト・テン（昭和33年11月現在）

漫画名		月光仮面	さざえさん	赤胴鈴之助	少女三人	ピリーパック	鉄人28号	ロボット三等兵団	まぼろし探偵	れよ尾をふ	鉄腕アトム	猿飛佐助	与太郎君	山彦少女	じゃじゃ馬君	かの子ちゃん	月のひとみ	リンゴのバイオ	ママのバイオ	白雪姫	ロボ子さん	高丸菊丸	ロボット君	東京の青い空	ロボットわんちゃん	たら子くまん	発明八ちゃん	くらまてんぐ	ロボットS1号	東京パリー
男子	1年	1	5	2	8	6		7	9		3											10		4					
	2年	1		2	3	4		5	6		7										10	8			9				
	3年	1		2	5	3		4	8	6	7																9	10	
	4年	1	9	2	4	5		3	7	6	8	10																	
	5年	3		4	1	2		9	5	6		7		8													10		
	6年	9	10	6	1	4		8	7	5		2		3															
	全	1	11	3	2	4		5	6	7	9	8		10							15	14		18	27		19	17	23
女子	1年	4	1	3				7			8				6				2					5					
	2年	3	1			10		4			9				8		6		7		2				5				
	3年	4	2	8	3			1			9				6		5	7										10	
	4年	7	2	10	1			3						5	4		8	6						9					
	5年	9	2		1			3						4	6		8	10	5					7					
	6年		2		1	9		3						5			6	4			10			8					7
	全	6	1	10	2	13		3	22		20			4	5		7	8	9		12			11	19				14
男女計	大都市	1	2	7	3	5		10		6	4		8	9															
	地方都市	1	2	5	4	3	6	8	7				9		10														
	郡部	5	7	1	6	3	2	4	8		9				10														
	全国	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18		19	20	22	23	25	26	27	28	29	30

〝矢車剣之助〞〝くらま天狗〞などの時代ものは，みな郡部に地盤を持っていて，大都市のファンはそれよりもずっと少なくなっている。これに反して，〝鉄人28号〞〝鉄腕アトム〞〝少年探偵団〞その他のロボットものは，みな大都市のほうに多くのファンを持っている。かかる事実からすると，〝月光〞が将来郡部にも地盤を広げ得る可能性は，当分望み薄であると考えられる。

第三にはこの両者が男子向きの漫画であることに注意したい。女子は男子向きのものをも見るが，男子は女子向きのものを見ない。多数のファンを獲得するには，男子向き漫画でなければならないのである。ただし男女の両方に訴えるものがあれば，これに挑戦できるわけである。〝さざえさん〞はその好例であろう。これは主人公が女性であるが，登場人物はその弟妹などで，いわゆる home comic として成功したものである。

第四には，〝月光〞も〝赤胴〞もそして〝さざえさん〞も，みな低学年のほうに多くのファンを持っている。多数のファンを獲得するものは，低学年にもわかる内容で，しかも年齢にかかわらず興味を刺激するものであることが条件となっているようである。このことが，人気漫画が低調だと批判される原因をなしているようにも思える。ただし〝さざえさん〞は子どもの世界を主題としているので論外である。

第五には，両者とも子どもの正義感に訴えることをねらっている。〝赤胴〞は，〝親おもいで，心がやさしく，正しいことのためには，なにものもおそれずぶっかっていく勇気のある少年〞とうたい，〝月光仮面〞は，〝月よりの使者月光仮面は，正しいものの味方で，悪人をあいてに明かるく正しい活躍をします〞と宣伝している。そして主人公を破邪顕正の英雄と奉り上げ，子どもの英

雄崇拝の心情をあおっている。それはチャチなプロットではあるが，それだけに低学年にも共感をよぶのであろう。

6. 改善について

以上によって，子どもの漫画の興味がどんな方向に向かっているか，またそれがどんな条件に左右されているかがおよそ明らかになった。性による興味の差がかなりいちじるしいし，また年齢による発達的変化もかなりいちじるしいことから，漫画は性別に，また年齢別に多様なものが生産される必要があると考えられる。さらには地域差もいちじるしいから，配給が別のルートに乗る場合は，地域差に応じた生産も考慮されるべきであろう。さかのぼれば，問題は，漫画の発表機関が，雑誌（及びその付録）新聞，週刊誌などのジャーナルに限られているということにあるようだ。したがって，編集者の意図によって大きく動かされている。手塚治虫氏が〝家を出て読み始めて，途中読みつづけ，学校に着くときに読み終るような漫画を書いてくれ〟と注文されたと語っている。漫画は初めから読み捨てられるべきもの，一瞬の楽しみを与えるもの，したがって強烈に子どもを引き付けるものが生産者で意図されているのである。かかる政策に乗って生産された漫画が，上述のような興味の多様性を培養してきたのだとも言える。しかし子どもは，いやな食べ物には手を出さないのだ。だからこの現状を作ったのは，やはり子ども自身の嗜好でもある。与えるものと与えられるものとの働き合いから，この現実が生まれたのである。

だから漫画の改善は，現実の子どもの興味の実態に応じながら，何を与えるかの再検討から手を着けるべきであろう。

けれども，子ども漫画は，それがジャーナルに掲載されるという現在の発表様式を脱出しない以上，その根本的な改善はきわめて困難であるように思われる。一度，ジャーナリズムの支配から離脱させてみることはできないであろうか。初めから書き下ろしの単行本として，雌雄を決せしめる道を開いてやれないものであろうか。（貸本業界を対象とする漫画本にはこのことが行なわれているが，事情が違うのでいまは別問題である。）子ども漫画が単独でその価値を世に問うということになればその中から真正な作品が生まれることの希望が確実だと私は思うのである。

一度この試みをして，名作漫画の真の姿をつかみたいものである。〝名作漫画〟とは今日では文学名作を漫画化したものを指しているが，そんな借りたフンドシで土俵に上るような根性は捨てなければだめだ。初めからの漫画の中での漫画こそ名作漫画であるべきだ。そのような漫画が，長いその歴史にもかかわらずまだ出ていないことを恥ずべきだと思う。（最高人気漫画がこの意味での名作漫画の名に値しないことは前述のとおり。）

とは言え，ジャーナル的子ども漫画の存在を私は否定するのではない。これはこれとして育てなければならない。しかし今日の野放し状態ではだめだ。一方では強力な漫画評が必要だし，他方では編集者が真の名作漫画を育てることに協力する必要がある。

（以上のうち，調査データに関連する論考は筆者個人のものであることをおことわりしておく。）

読書力診断テストにあらわれた中学生の国語力

兵庫県出石中学校

山崎一朗

1　診断テストの採用

国語科の学習指導の計画をたてるにあたって，私たち教師は生徒の学習成績と知能テストを手がかりにすることが多いのだが，それに読書力診断テストの結果を加えて重視するに至ったのは昭和32年以降である。知能テストと学力の相関々係が「0.32」であるのに対して，診断テストのそれは「0.78」であるといわれるとおり，その結果は私たちが担任する生徒の国語力，なかんずく「読む力」の実態をあらわに示し，さまざまな示唆をあたえてくれた。その後33年6月に第2回，去る六月に第3回を行ったのであるが，過去3回にわたってこのテストに参加した現中学三年生の成績を提示し，その変化を見ることによって国語学力推移の一端をたどってみたい。

2　第一回診断テストに表われた結果——32.6.27実施

診断テストは阪本一郎氏D式C号を採用した。このテストを構成する因子は次のような内容をもつ。

1 速読…2行—4行の平易な短文に対し，選択肢四個を配し，これに答える。

2 読解…文章完成法であり，社会，理科，職業各科の知識を要する問題。

3 読字…音訓両読みに答える。

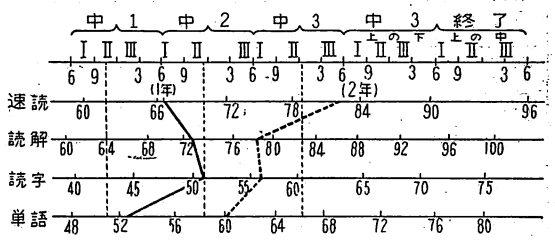
4 単語…言林中より適宜に78語を摘出。言いかえ，意味類似語を含む千個の選択肢から近いものを選ぶ。

実施の結果集計されたものを各因子ごとに平均を取り，これを発達グラフに図示すれば次のとおりである。

図1　内訳

テスト＼クラス	A	B	C	D	E	F	平均	全国平均
速読	62.1	57.6	72.4	65.6	75.8	65.8	66.5	62.0
読解	71.7	68.2	79.6	71.7	71.3	70.1	72.1	64.5
読字	48.9	49.2	52.3	47.8	49.4	51.5	49.8	42.0
単語	52.0	50.0	57.6	54.8	49.4	52.9	52.8	51.2
得点	234.7	225.0	261.9	239.9	246.4	204.3	246.3	219.7
偏差値	52.8	51.2	56.2	52.9	54.0	53.3	53.3	50.0

図2　発達グラフ



これによってみれば各因子の平均は全国平均を上まわり，偏差値45～65が全体の70%を占め，最も伸びの大さい読字力においては14才2月の読書年令を示している。

しかし今，これを細分して受験全員（32年1年生）

The Middle School Student's Language Ability Measured by the Standard Reading Test, by Ichiro Yamazaki

図3　三段階平均得点

	上位 1～50	中位 118～168	下位 237～287
速読 150	97.2	68.7	30.2
読解 156	97.5	79.9	35.1
読字 100	72.1	51.5	24.6
単語 150	74.5	59.9	30.6

287 のうち上，中，下位の総得点50名を選んでその平均値を求めると図3のとおりとなる。上位50名の数値は速読において高校一年の二学期，他の因子においても中学終了時の能力を示し，下位の50名は同じ中学一年生とはいうもののその読書能力は速読と単語力において小学校四年，読解と読字においては小学校五年程度の力しか持っていないことが明らかとなった。この大きな落差を持つ約300名の生徒の国語科を担当し，学習をともにすること一年，昨33年6月，第二回診断テストを実施したのであるが，その結果は次のようであった。

3　第二回診断テストに表われた結果——33.6.28 実施

図4　第2回テストの得点平均

	1学年度平均	2学年度平均	差	全国平均
速読	66.5	82.7	16.2	69.5
読解	72.1	78.9	6.8	73.0
読字	49.8	57.6	7.8	49.0
単語	52.8	60.2	7.4	58.5
総点	246.3	279.7	33.4	249.5
偏差値	53.3	54.1	0.8	50.0

すなわち速読における伸びが最も大きく，読書年令1年9月の上昇を示しているが，これは中学三年二学期の能力に該当するものである。読解力においては13才7月から14才5月に移るにとどまり，さらに読字においては14才2月が14才8月に，単語力は13才2月が14才2月と速読の大きな上昇に比して，明らかにアンバランスを示している。

平均値において全国平均を上まわるとはいうものの，この曲線にあらわれるアンバランスは私たちに大さな警告を与えるものである。（図2発達グラフ……線）

再び，これを前年度上・中・下位に分類した生徒各50名について，その上昇得点の平均を見ると，図5のようになる。すなわち，速読における伸びは中位の生徒において著しく，読解力においては上位の生徒が依然他を引

図5　上昇得点平均

	上位	中位	下位
速読	22.2	24.1	14.0
読解	17.6	10.0	6.3
読字	11.7	12.5	5.5
単語	9.7	8.0	7.8

きはなしての成長を示している。これは読書力を身につけはじめた中位の生徒が読むこと自体に関心を持ちはじめたのに対し，上位の生徒の「読み」が内容的な方向に向いつつあることを意味するものであろう。事実，速読の確度における数値において，

図6　速読の確度

	上位	中位	下位
速読の確度	96.6%	85.3%	50.4%

と表われるごとく，かなり高い正確度を示している。しかし問題は，全生徒に共通する単語力の著しい不足であり，総点566に対して120.5という得点しか取りえない不振児（遅帯児）の指導である。

前者に関して，私たち国語科に携わる者として次のような点について反省させられることが大きかった。

(1)読書の奨励がその量や内容，鑑賞に傾いて，正確な一語一語の認知に対する関心が高められていないこと。

(2)日常の教科学習が，ともすれば内容を主とし，読解中心に流れ，不断のドリルに欠けるところがあるのではないか。

一応読めはするが，その根底ともなる語彙の豊かさにおいて欠けるところが多いというこの生徒の実情は，その

まま現代の若い世代の弱点を示すものであって，私たち教師の現場における国語学習も，週わずか4～5時間という制約のうちに，知らず知らずその弊を犯していることに気づかせられるのである。

この点に鑑み，昨33年度の国語学習の努力事項に継続的なドリルの実施を掲げて一年間，去る6月には第三回読書力診断テストを行ったのである。

4　第三回診断テストに表われた結果

第三回テストも例年同様六月下旬に実施した。テキストも同じく阪本D式C号，同じものを再度用いることについての疑義は多いのであるが，今の場合前回との進度を比較対照するためやむをえなかった。その結果は下図のとおりである。

図7　1.2.3.回対照表

	第1回 1学年	第2回 2学年	第3回 3学年	全国平均
速読	66.5	82.7	84.1	78.1
読解	72.1	78.9	88.0	82.2
読字	49.8	57.6	70.6	60.0
単語	52.8	60.2	70.0	65.0
総点	246.3	279.7	312.7	285.3
偏差値	53.3	54.1		50.0

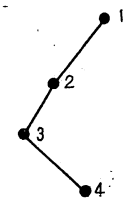
速読がほとんど頭打ちになってわずかな上昇しか示していないのに対して，従来停滞気味であった読字，単語なかんずく読字力が著しい上昇を示していることは，一年間継続し来ったドリルの結果であることを再確認させられるのである。

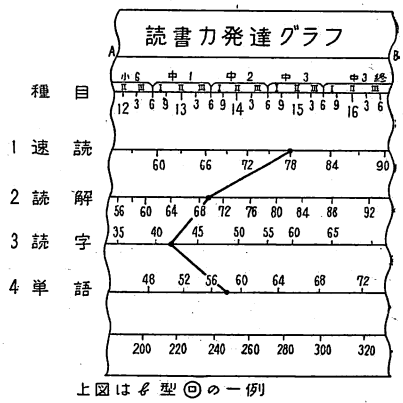
単語，読字の停滞を継続的ドリルによって打開しようと努めた私たちではあるが，上述した不振児，中学三年に在学しながらも速読力において小学四年，読解力においてすらも小学五年程度の力しか示し得ぬ生徒の指導には少なからず頭を悩まされた。能力別の学級編成も，特殊学級の設置も種々の事情によって持たぬ私たちの学校で，それらの生徒が高校三年，又はそれ以上の読む力を備えた生徒に立ちまじって，ひとり国語のみでなく各教科の学習生活をともにしているのである。

その数にして約50名。それらの生徒と他の生徒との間にいかにして橋を架けるか，現実には週5時間，6クラスの国語授業をいかに操作するかが私たちの日々の課題である。

教科学習のスター的生徒とエキストラ的生徒が同居している教室という場，しかもスター的存在をその能力を存分に発揮させつつもスター意識に捉えられぬよう，エキストラ的存在を放置することなくスターの座に近づくべく高めるよう日々の工夫をこらし，教科学習の計画を押し進めねばならぬ私たち教師は，まこと人間形成の真摯なる演出家であらねばならぬことを痛感させられるのである。

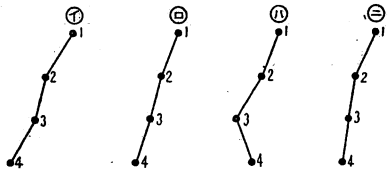
過去三回にわたる読書力診断テストを通して，すぐれた能力を示した生徒はその生徒なりに，劣るものは劣るなりに何かそこに共通した型があるのではないか，それを知り，それを捉えることによって国語学習の上に，別して読む力の診断と対策の手がかりが得られるのではないかと，私たち職を同じうする現場の同僚と相諮り発達グラフの個人別類型をまとめてみた。その結果大きく分けて10類型，細分すると30類型になった。参考までにその類型と診断を掲げてみよう。





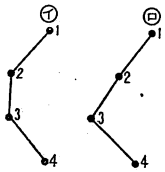
上図はB型㊁の一例

a 型



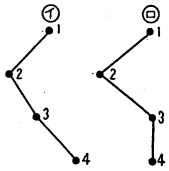
この型の生徒は知能の良い割に読書に親しまず，国語科を好まない。又家庭の読書環境が悪い場合，貧困，身体的欠陥もその原因となり，極端な漫画愛好者もこの型に属する。

b 型



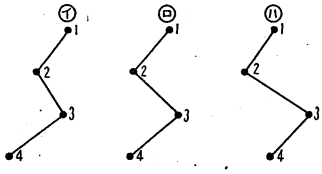
この型の大半はよみ仮名のつけてある本しか読まぬ者が多い。しかも多読するので速読と単語の知識にはすぐれても，安易な本が多いので思考に欠け，漢字を知らない。

c 型



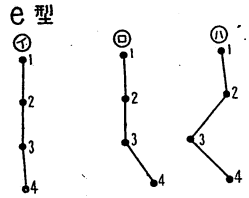
この型も平易な本を多読する生徒に多い。単語もよく知り，速く読むが文意を正確にとらえる面では欠ける点が多い。

d 型



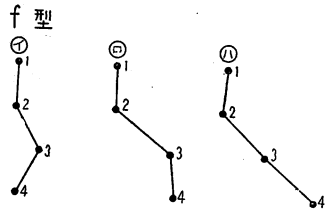
これは能力以上の本を多く読もうとする生徒に見られる型である。にもかかわらず一般に思考力に乏しく，生活経験も浅い。精読して文意を正しくつかむとか新出語を調べるという面では消極的である。

e 型



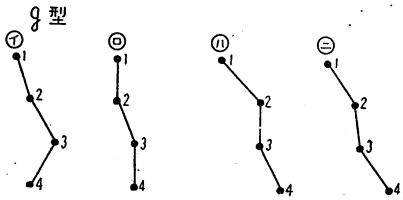
この型は案外少ないが，学習態度も真面目な優秀生に多い。速読の正確度も95を上まわることが多い。

f 型



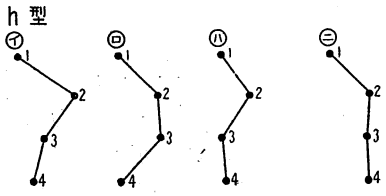
知能発達度の割に真面目な学習と努力を続ける型である。既習の語，漢字の認知に努力する反面に読書量の少ないこともその特徴である。教科書のみの勉強という生徒にこの型が多く見うけられる。

g 型



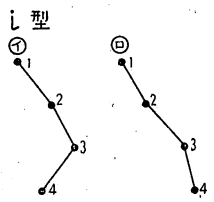
前とほぼ同じ型である。コツコツと地道に努力する遅読型であるが反面確度は高い。

h 型



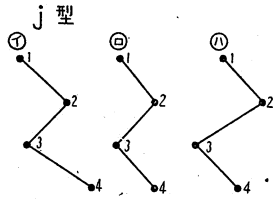
多く読み，知能もすぐれている。経験的要素を駆使する力も高く，社会科など得意とする生徒はおおむねこの型である。反面語彙が豊富でなく，国語辞書などあまり引きたがらない。

i 型



f・g型と共通する努力型である。速く読むことには欠けるが，知能以上の読書力を示す。

j 型



この型の生徒は一般に朗読も下手で内向性が多い。しかし，速読の正確度も高く，語の認知力もすぐれている。適書を与えること，本に親しむ習慣をつけることが先決問題である。

理論から言えば，まだまだ他に多くの型を数えあげることもできるであろうが，私たちが日常接している生徒においては，これ以外の型はあまり見当らない。その数から言えば一年生当時にはi型が最も多く，二年生になるに至ってd型に，三年生に進むとf型へとその類型も変化してきていることに気づく。

唇から眼へ，黙読という操作の未熟な中学一年生がやがて中学校における国語学習になれ，少年期の読書生活が開けると，雑多な濫読の傾向が見うけられるようになってくる。それが中学二年の時期である。いきおいその読み方は上っすべりな正確な語の認知に基かぬものになってくる。この期において精読と文意の厳密な把握の指導を講じなかったならばおそらく卒業するまで（卒業後もまた同じく）その国語力，「読む力」は根なし草にも似た脆弱なものになりはてるであろう。その点からしても心情発達の段階と等しうして国語力の上において中学二年という一時期のもつ重大さをこの診断テストを通して知らされるのである。

（47ページより）

昨年度で言えば，東映のオール・スターキャストの「仁俠東海道」や，「旗本退屈男」，裕次郎の「陽のあたる坂道」「俺は待ってるぜ」などが，御多分にもれず大入であった半面，日活の麻薬・ギャング・セックスものが興行的に駄目であり，「喜びも悲しみも幾歳月」や「集金旅行」が四月後に再上映されても相変らず満員で，「純愛物語」や「無法松の一生」「檜山節考」等が予想以上の興行成績をあげていることは，それを物語っている。

また田舎の特殊事情としては，暖房設備もなく，交通機関も乏しいため，二月，十二月の厳寒期はガラガラであり，六月十一月の農繁期は，ともに映画どころではなくなる。しかし農繁期でも，最近は雨天の時は骨休めにかなり入るようになったと言う。

番組は一週間を水木，金土，日月，火の四つに分けて編成し，土曜に重点を置くため，興行者から言えば犠牲番組が出来，観客側は見たいものをつい見すごすことが多くなるわけである。観客層は，やはり高校生以上未婚の青年男女が圧倒的で，中学生は学校で禁じている所が多いので，集団観賞以外は少ない。

ところが，盆，正月，お祭といったいわゆる祝日には，レクリエーションに乏しい農村では，老若男女がどっと押しかけるが，この時には，東映時代劇が，小学生から老人組までの広い層に受けるので，必ず組み入れるという。よく浪花節的センチメンタリズムなどと悪口を言われるが，浄瑠璃，歌舞伎などで培われた農村大衆の感受性には，理窟抜きの娯楽として迎えられるためであろう。

また農村の生活を鋭く諷刺した「気違い部落周遊紀行」「台風十三号始末記」などの社会ものが最も売りにくいと言われることは，今後この種の力作で期待されるだけに一考を要する問題である。

この貧しい電波の谷間では，まだまだテレビの脅威は程遠いのであろう。

会員随想*

ハダカの本

望月久貴

戦後は，よろずハダカばやりである。筆者のいる学校で，終戦直後の文化祭の演劇に，学生が出したのが「ハダカの王様」であった。学内では，天皇制論議のやかましかったころであったから，演技がわりとうまかったにもかかわらず，とかくの批評が一部に行なわれた。劇の出典は隠れもない名作であるから，近視眼者流は，われわれて然るべきであるが，それに対する当の学生たちの弁明は，「衣料切符では，舞台衣裳を簡素化することが必要でしたから。」というのであったようだ。

ギリシャ・ローマの昔から，美術の世界ではハダカがまかり通っている。だから，裸体の油画や石像の前に立つことにも馴れているのであるが，これも終戦して数年後の秋，上野に新興美術展を見に行ったら，思わずたじろがざるを得なかった作品に出会った。明らかに構成の新をねらったものであろうが，豊満な女体の寝姿が，真上から描かれているのである。天井からのぞき見すればかくもやあらんという態で，それは新よりも奇であると感じた。画家は，筆者と親しいH氏であることを知っては二度のオドロキであった。

本やによっては，代金を受取ると手早くカバーをつけてくれるところがある。文庫本を買った場合にはしばしば出会う。もちろん箱入りの本にはこのようなことをしない。しかし，今度は買った方が帰宅してから箱から抜いてカバーをかけることも少なくない。本は，表紙のままではハダカなのか，表紙はすでに衣裳なのであって装釘ということばもあるとかどうとか，——これらは議論の限りでない。どう考えようと，どんなことをやろうと勝手次第という自由論もあることだから。

筆者は，学生のころはカバーをかけることを励行していたが，やがて古典を学んで「手沢本」のゆかしさを知るにおよんで，この習慣と訣別した。近ごろ電車の中などで，カバーをつけた本を読んでいる人が少なくない。文庫本だけではなくB6，A5，いや雑誌，週刊誌にまでもカバーを用いている。例の自由なのだから，どうしようと差支ないものの，表紙はすでに衣裳であるからカバーは不用であるときめている筆者の眼には，その本の内容がハダカだから，マントまで着せて守っているのだと勘ぐりたくなるのである。いずれにせよ，カバーを用いることは，本を大切にする心の現われの一つにちがいないから悪いことではない。

非行少年を見なおす

渡辺正亥

非行少年の読書能力について調べてみて，まことに常識的なことがら，悪事を働いそ学校を逐われるような子どもは，結局のところ頭が弱いからだということが更めて判ったのである。その例として非行少年群中の中学生についてみると，I. Q. 80—89（普通の人よりもやや下位）が19.2%，70—79（遅鈍）が，28.8%，60—69（魯鈍）が13.5%，59以下（白痴）が17.3%となっていた。

このように常人以下のものが合計78.8%も占めているのが非行少年群の姿である。I. Q. の標準分布を見ると上記と同じ範囲のものが27.5%であり，新潟市の中学生のばあい10.2%であるから驚くべき隔差がある。やはり一般的にみて，非行少年群は知能の低いのが多いということになる。

非行少年は，この知能の低さのために（もちろん他の要因もあるが）自制がきかずに非行に走り，その故に学校から放逐され，世の中を更に狭く生きるのである。だからそんな非行をする前にさっさと施設に収容して暖い処置と教育を与え非行を予防すべきであろう。

知能が低いと多くは教育を簡単にあきらめるが，あきらめてはいけない。彼らはいつまでも低い状態にとどまってはいないのである。

非行少年を施設に収容するときは，学業テストをして更めて適当な学年に編入するのである。私の調べでは，生活年令からみて中学3年に相当するもの19名中，学力が1年後れが2名，2年後れが2名，3年後れが1名，4年後れが2名，5年後れが3名，6年後れが1名あった。3年以上も後れている子どもは何れもI. Q. 69以下（魯鈍か白痴）であった。こんなのは教護院から離して精神病院に収容すべきものであろう。

I. Q. 70以上の子どもについてみると，普通少年よりは1，2年程度の後れでしかない。この程度の後れなら

* Voices from Members (Hisataka Mochizuki, Masai Watanabe, Mitsuo Mine, Iwao Anzako)

ば，中学浪人や高校浪人のことを思い合わせて，そんなに気にかけることはないだろう。

特に興味を感じるのは，阪本式読書能力診断テスト施用で，1年生から2年生に移るときはゆるやかに上るが，2年生から3年生にかけては急カーブで上昇するのである。この急激な上昇カーブは大きな意味を持っていて，見逃せないものである。

また知能程度が同様である非行少年群と普通少年群の読書能力を比べてみると，前者は後者よりも成績が悪い。得点で，8—13%，読書力偏差で5.7—7.4%低い。この原因は，それを素行不良に求めるか，読書習慣の欠除におくか，あるいは他に見つけるかはこれからの問題である。

いずれにしても，非行少年についてはいま少し見直さなければならないと思っている。

読書無用論

嶺　光雄

吾，在宋の時，禅院にして古人の語録を見し時，ある西川の僧，道者（真理を体得した人）にてありしが，我に問うて云く，

「語録を見てなにの用ぞ」

答へて云く

「古人の行李（行状）を知らん」

僧の云く

「何の用ぞ」

云く

「郷里にかへりて人を化せん」

僧の云く

「なにの用ぞ」

云く

「利生のためなり」

僧の云く

「畢竟して何の用ぞ」と

予，後に，此の理を案ずるに，語録，公案等を見て，古人の行履をも知り，あるいは迷者のために説き聴かしめん，皆，これ自行他化のために畢竟して無用なり。只管打坐して大事をあきらめなば，後には一字を知らずとも，他に開示せんに用ひつくすべからず。故に，彼の僧，畢竟してなにの用ぞとは云ひける。

これは道元禅師の正法眼蔵随聞記の中の一節である。只管打坐して身心脱落し悟道の境界に住するには，読書は無用であるというのである。

ことばを媒介とすを精神生活を否定することは，人間として不可能であろう。読書は，ことばの一種としての文字を媒介とすることである。ひたすら打坐する場合にも，その心がまえをつくるために行われる提唱は，ことばを媒介として行われるのである。こうした読書の意味をふまえて，道元禅師の，この一文を理解すべきであろう。

悟道を，人生の真実の智慧というようなことにとりかえてみても，同様の考え方は成り立つであろう。今日，図書が，われわれの周囲に多すぎること，したがって多くの図書を手にとりやすいこと，そのため粗雑な読み方をしてしまうこと，いろいろと趣向を変えた同工異曲ともいうべきものに一応刺戟されることで読書が終ってしまうことである。読書によって，人生についての真実の智慧を得るのではなくて，日常生活のアクセサリーとしての知識ぐらいを得ているのではなかろうか。そして，ある意味では馬鹿になっているのではなかろうか。

いわゆる読書人は，このような反省をしながら，やはり読書をたよりにしているといえるのではなかろうか。読書人は，このようななやみの中から新しい道を求めている。古典的図書についての入門的な講演会が，多く開かれているのも，このあらわれと考えられる。熱意をもって，読書会に人の集ってくるのもまた，その一つだといえよう。

田舎町の映画館で

あんざこ・いわお

ある晴れた冬の日の午後，私は町で唯一の常設館で，顔見知りのマネージャーと話の花を咲かせていた。以下は，映画館の窓口からのぞいた農村人のマス・コミ接近の一面である。

この僻地でフイルムが上映されるまでには，封切後東映東宝で約百日，松竹日活もので百十日，大映では百二十日位というから，都市の封切館からはざっと三月半から四月おくれてようやくお目にかゝれるわけである。このことは，良い意味にも悪い意味にも，大きな意味をもつ。一方で，封切りの新鮮さが失われ，秋風が肌寒いようになってから，怪談ものに胆を冷したりする滑稽さを生むと同時に，他のマスメデイア——新聞，雑誌，放送などの映画評も出つくして，各地での上映の反響，人気も伝えられて，ほぼ確実な評価の決定された後になるためか，結果的に見れば，かなりすぐれた選択眼を観衆がもつことになる。（45ページへつづく）

マスコミの中の読書とその調査について*

これは9月4日，日本読書学会が読売新聞社と共催で行なった読書調査に関する講演会における講演の速記要旨である。参会者はおもに出版社関係の方々であったので，その方々の関心にこたえるように述べられているが，学界の資料として採録し，参考に供する。

平沢薫

読書とマスコミュニケーション

私は主として従来のいろいろな既存の調査，あるいはこれまでわれわれが行なってきた調査に関連した事柄と，もう一つは諸外国ですでに実験ずみの，ある程度証明された事柄を中心に，読書とマスコミュニケーションという問題についてお話ししたいと思う。

ラジオ，テレビ，映画というようなものが発達しない時代には，文字によって表現されたものを通してのいろいろな読書活動があった。ところが最近は映画，ラジオテレビというような他の媒体が発達してきて，読書そのもののあり方がすでにいろいろな影響を受け，従来のように読書そのものを切離して見る考え方では適当ではなくなってきた。そこで，読書をマスコミの全体の中にもう一ぺん位置づけて見直すことが必要になった。

今までは主として読書の心理学的研究と生理学的研究が行なわれていたが，最近読書活動そのものではなくて読書にいたるまでの条件を調べていく，むしろ読書の客観的条件を調べるといった研究が現われてきた。たとえば図書に接触するまでの条件が広告によってどのように変わるか。あるいは読者そのものが集団関係，人間関係などによって変っていく状況。あるいは他のマスコミの媒体であるテレビと読書との関係，映画と読書との関係また子供の社会科的な学習状況を見ると，テレビで見たある事柄を，ラジオ放送でも聞き，さらにまた翌日の新聞でも見るというように，一つの事柄について三つの媒体によってこれを知ることができ，これによって理解の仕方とか，またそれに応じたいろいろの変化が出てきた。このようにラジオ，テレビその他の媒体があまり発達していない時とはずいぶん変ってきているので，読書の社会学的研究が当然現われてきている。読書社会学というような名称は，日本ではわれわれの学会で最初に使ったような形になっている。もちろん外国では，すでに1950年に読書社会学という名称のもとで，幾つかの研究がある。

もう一つは読書そのものを育てていくための条件，これは指導という形で過去においてはかなり研究や成果があった。

このように読書の心理学的・生理学的研究分野と，社会学的研究分野，それから読書指導の研究分野の三つの研究分野が大ざっぱに言って考られる。

いま諸種のコミュニケーションがもたらす社会的共同の順序を表示すると，次のようになる。

社会的共同が大

話しことば・映像・音が中心
- 私的会話
- 討議グループ
- 非公式集会
- 電　話
- 公式集会
- 映　画
- テレビ
- ラジオ

書きことば(文字)が中心
- 電　報
- 私的通信
- 公的文書
- 新　聞
- 掲示板
- 雑　誌
- 図　書

社会的共同が小

このように，順位が下になるほど社会的共同が小になり，図書というのは，完全に孤立した形でめいめいが読まなければならない。だから今のようなマスコミ時代では過去におけるように決して安易なものではなくて，工夫と努力がないと生活から離れやすい条件になっている。

* Reading Activities among Mass Communication and their Survey; by Kaoru Hirasawa and Takeo Urata.

従って読書するためには，何らか特定の方法が考えられなければならない。現に個人読書という形態が，集団読書という形に変っていき，読書サークルとか，読書会というようなものが作られ，結局個人的読書が集団的読書へ変っていく動きがみえる。もはや読書というものだけを切離して，それに対する特定の努力とか工夫をするだけでなしに，ある場合には他のマスコミとの相互作用を考える必要がある。テレビの発達による読書そのものの一番大きな変化は，量的に時間が減少してくるということだとよく言われている。しかし質的にどう変っていくかという問題については，まだ十分研究されていない。これは今後研究しなければならぬ領域ではないかと思う。

それからよく問題になるのは，並行していく活動。例えばテレビを見ながら，読書できる方法とか，またそういう読物の工夫がある。たとえば相撲の放送は，仕切直しのところがずいぶん長い。そうすると子供は，あの退屈な仕切直しのところを見ないで，学校の宿題なり，簡単な漫画とか，軽い読物を読んでいて，ワーツといって立上ると，その取組んでいる数秒間だけテレビを見ていて，すんでしまうとまた本を読んでいる。だからある場合には，3時間の相撲番組の間に実は簡単な一冊の本を読んでしまう。成人の方はどうかというと，ていねいにあの仕切直しのところを見ていて，煙草を何本か吸っていたり，あるいはビヤホールあたりではジョッキを何ばいかあけている。そういうマスコミの発達によって，子供の読書の仕方が変った部面がある。もちろんこれがいいかどうかということは問題がある。読書の質，内容によっては，並行的な行動ができる場合とできない場合がある。たとえば作文を書くという課題があるとすると，おそらく子供はいろいろな構想を立てたり，一行一行書いていかなければならぬから，そういう場合にはテレビを見ながらやるということは非常にむずかしいと考えられる。

こういう形で結局読書そのものの，マスコミの中での位置とか，あるいはまた他の媒体とのいろいろな影響力というようなもの，あるいはそれによって従来の読書のあり方がどういうふうに変っていったか，といった問題は，ただ現象的にある一部分だけはある程度つかむことができるが，これを細かく見ていくとなると，かなり継続した研究をしなければならない。同じことは他の部面でも考えられ，日本の出版の状況を見ても，明治，大正昭和というふうに，大まかに時代の流れを通してみても，たとえば戦争の時といった，歴史的，社会的な変化に応じて，実は読書がある一定の傾向をたどったり，あるいは各個人の読書に対する態度が変わっているということは，常識的にはわかる事柄なのだが，そういうこともおそらく日本において十分な研究はなされていないところである。

さらにまた私たちは，読書というものを，すぐに内容の側，たとえばこれは科学読物だとか，一般教養だとか，児童文学，あるいは経済に関するもの，というように，大体学問的な体系に基いて内容の分類をやる。これは一つの学問的な分類としては意味を持っておるが，読む側の問題を考えると，必ずしもこの分類だけでいかない問題が出てきている。これはアメリカでも調査が行われているが，特定の読者の階層性と称するもので，読者がどのような社会的の一つの階層の位置にあるかということから，自然読書に対するある一定の相互関係が出てくる。一例をあげると，社会の上層部にある階層の場合には，一体どういう読物が主として読まれ，あるいは関心を持たれるか，あるいは中間層に相当する人たちは，どのような読書傾向なり，またある特定の内容に関心が持たれるのか，あるいは社会の下層にある人たち——農家とか，ずっと下町とか，その他生活条件の非常に低い人々の場合には，一体どうなるのだろうか。こうした問題はアメリカの一部の調査などでは，たとえば社会の階層の低いところでは，子供の読物と，母親の読物が似たようなものになる。漫画などは子供だけが貸本屋から借りて読んでいるだろうと調べてみると，東京でも下町その他では，あの貸本屋の漫画を，子供のいない間に実は親がけっこう読んでいる。それから児童文学とか，あるいは冒険物語的なものが，母親その他に読まれている。このような事例が出てくるので，私たちが無造作に，これは児童読物だといって，何かそれは児童だけが読んでいると思って調べてみると，実は成人がかなり読んでいるといったような，読者の階層性の問題という形で，どうしても調べなければならぬ問題があると思う。

それからこれも仮説としていろいろ言われているところなのだが，過去においては，本を読むということは個人が一人で選択し，自分で自主的に処理しているということを，私たちは想定している。知識階級の特に読書人というような人は，おそらく自分で図書の選択から，読む態度，読んだ後の処理などは，自主的なものであるかも知れない。ところがある段階までくると，特定の集団関係の中である特定の読物が読まれたり読まれなかったりする状況が出てくる。よく言われる「人間の条件」のような，ある特定の読物が，実は出版部数だけ見ると，

そのまま読者の数に見えが，これを押えていけば，おそらくどこかの集団関係，たとえば職場などというある特定の集団の間でいろいろな影響があって読まれているのかもしれない。同じように，子供の世界にもおそらくある特定の集団関係があり，その集団の中に，特定のある意見を促進したり，リードしていくようなオピニオン・リーダーという形の人が存在していて，これによってある特定の動きが見られることがある。これは部分的にはすでにわかりきったことなのだが，そういうような問題もやはり一つの研究領域として残ってくる。そうすると出版そのものが，一人一人の大衆をねらっているのか，あるいは特定の集団関係をねらう出版が可能なのか，可能でないのかという新しい問題も起ってきはしないかと思う。

それから，日本のように非常に交通が不便であり，あるいは社会全体の釣合いがとれた形で発達していない社会の場合，都市社会，村落社会，あるいはもっと辺鄙な地域など，その社会の条件そのものがある特定の図書とか，読書環境を作っている。ある地域では自然のままに放っておけば，ある特定の読書の状況——明治，大正頃の特定の読書傾向が，ある村落にはそのまま残っているというような事例もやはり現われてくる。大都市にはあらゆる出版物が，絶えず洪水のように現われてきているし，また村落にはある特定の図書が，非常に限定された形で現われてきている。あるいはその他の条件が，その地域の読書をどういうふうに変えているだろうかという問題も当然一つの研究領域になってくると思う。

もう一つ私たちは人間の一生涯の中から，子供の時期の読物というものを一つ切離して，これについてある一つのとらえ方をするということはもちろんやれるわけである。児童の段階，学校教育の小学生，中学生，高校生という段階，青年期，成人といった一つの体系があるわけである。ところが従来欠けておった問題は，幼児から成人まで一貫して読書そのものがどういう形で発展していっているのか，あるいはある個所では停滞しているのか，ある時期には全然違った傾向に変っているのか，というような，幼児から成人を貫いて，読書のある一定の動きを見るということは，今までのいろいろな研究ではあまりなかった。もちろん一個人がたどってきた自分の読書経歴というものはあっても，それを客観的にとらえていくということはなかなかできていない。このように一貫して読書の過程を調べることも当然起ってくる問題である。

いま一つは，マスコミュニケーションの関係と，特定の人間関係——パーソナリティ・コミュニケーション——との両者の関係はどういう形になっているだろうといった問題も，やはりまだ十分なデータは日本の場合出ていない。だからこうした面なども研究されなければならない。で，前述のようにある特定の出版物が，ある時期に非常に読まれたりする場合に，その出版そのものの内容がアッピールしたのか，あるいはそこにたとえば小集団的な人間関係なり，職場その他のある一定の人間関係が促進させたのかどうかということを見ないと，たとえばベストセラーという形である数としては出ていても，それだけで見ていいのかどうか。その数が高まったのは，内部にどういう条件があるだろうかというようなことは，読書の科学的研究の領域になってくるのではないかと思う。

次に私たちの社会では，広告が本を知る場合に大きな役割をしている。化粧品の広告みたいなものと，図書の広告の場合は一体どういう違いがあるだろうか。化粧品の広告は，実にうまい広告の仕方を持っている。つまり人気のある映画スターとか，スポーツマン，あるいはミス・ユニバースその他，人気または権威を持った人が広告に出てきて，非常に有効な働きをしている。それなら図書の広告の方はどうかというと，たとえば教育関係の場合には教育に関係のある学者とか評論家が，ある本について推薦したり，あるいは解説をする。広告にその人の名前が出たり，写真が出たりする。そのことは，その図書を選定するのに，ある場合にプラスになったり，あるいはマイナスになる事例も日本の場合にはずいぶんあるわけである。特に日本の教育問題は非常にデリケートな状況になっていて，実に整然と二つに分れるような陣営がある。そうするとある人がある本について推薦したり解説したりするということが，有利な場合と不利な場合が出てくる。そうするとこういう点からイデオロギー的な問題が考えられるわけである。図書，雑誌の広告が，新聞，ラジオ，テレビ，といった媒体を通して，個人に対してある特定の態度の変化を来たすという場合には，この媒体に対してある意見の指導者となる人のある一定の屈折を受け，あるいはまたその個人の持っているイデオロギー的な一つの体系なり考え方，立場というものが，最後にある特定の態度の変化をする，その本を選定したり，それについてある特定の理解を進めるということが出てくる。そうするとある本が，大衆にバラバラと直接にいくのではなくて，いろいろな屈折をしながら，特定の本が読まれたり読まれなかったり，またこの間のいろいろの条件が，ある本の読者の率を非常に促進した

り，あるいは逆に促進しない条件にもなってくる。こうしたことはおそらく読書ということからいくと，何か読書の手前の問題が大分あるようだが，そうした読書そのものの活動の他に，読書に至る社会的条件というものがたくさんあるのではないか。これも読書の社会学的研究の一領域であろう。

以上，私は主として今の読書というものの，マスコミ全体の中での位置をもう一ぺん考え直すという問題と，さらにいろいろな条件が読書というものを高めたり，ゆがめたり，ある場合には抑圧していくような問題とか，さらにまた読書そのものを，明治，大正の，映画，ラジオ，テレビなどが発達しなかった時代の読書の一つのあり方を，そのまま現段階まで持越してきていいのか，あるいは読書を，他のマスコミとの間で再編成することが考えられないかどうか，などということを申し上げ，何か皆様にむしろ問題を提起し，それから将来の一つの研究領域のある姿だけを申し上げた。何か御参考になれば幸いと思う次第である。

裏田武夫　読書社会調査からみたマスメディア

読書社会調査とマスメディアのお話をするが，まず読書社会調査という言葉を使って，一体今まで学会はどういうことをしてきたかということを簡単に紹介させていただきたい。読書学会としては，今まで単行書と雑誌の二つの分野にわたって読書社会調査を行なってきたが，大体二つの調査とも，一応われわれはマーケット・サーヴェイの領域に入れて考えている。しかしマーケット・サーヴェイと言っても，その中でいろいろ結果として出てくるデータについては，たとえそれがある特定の購買行為であっても，われわれは十分に社会教育的な角度，あるいはその他の角度から，出版社の方々とは違った角度からこれを利用できるものが非常に多いために，幾度かこれを続けてきた次第である。

で，その大部分のレポートは，直接，間接的にご覧になっておられると思うので，ここでくどくどしく内容は申し上げないが，たとえばこの前行なった雑誌の調査について申し上げると，たとえば雑誌を主として読む時間とか，あるいは主にそれを読む場所とか，どのような新聞内容に接しているか，どのようなラジオ，テレビの内容に接触しているか，あるいはどの程度映画，演劇を観ているだろうか，その他どのような期待をもって雑誌を読んでいるだろうか。あるいは一体雑誌の購読が中止されたり，他のものに転換した原因にはどういうものがひそんでいるだろうか，また，雑誌を店頭あるいは外売で買う際——私どもは主として外売の調査をしたわけだが——どういう刺激によって特定の雑誌を買うようになったかというようなことを調べたり，あるいは買った雑誌についてどのような環境で，たとえば一人で，あるいは多人数で読むとか，その読んだ内容を後で話合うとかいうふうなことなど，いろいろな角度から調べてきたわけである。

イギリスにはフルトン・リーダシップ・サーヴェイというのが毎年行われていて，そのレポートが大きな形で出ている。それからアメリカの場合には，しばらく前はリンク・ホップという人が中心になって，マーケットサーヴェイをやった結果が出ておるが，その後はパブリッシャーウイクリーという雑誌に，時々調査結果が発表されている。日本においては，おそらくこのような大がかりな調査は，われわれの読書学会と，それから東販の出版研究所あたりでもやっているように思う。またその他のマーケットサーヴェイを含めて，広告関係の会社が非常に大規模にやっておられることもご承知だろうと思う。私どもの学界としては，別に特定の出版社，あるいは特定の新聞社，あるいはスポンサーをサポートするような形で調査したことはないし，また出てきた結果についても，決して私心を狭まないで，われわれの解釈した限りにおいて公表してきたわけである。

そこで私はこの前行なった雑誌の調査で判明した，雑誌購読者のマスメディアとの接触という問題と，もう一つは広告媒体としての新聞というもの，この二つの角度から主としてお話してみたい。ここに出てくる調査結果の分析ないしは解釈は，ここでは裏田個人がお話申し上げるけれども，各委員が委員会全体の責任において行なったものを私が代弁しているにすぎないのである。

それでまず最初に雑誌購読者のマスコミュニケーションとの関連であるが，一体人々は，自分の購読している雑誌に何を期待して買っているか。というと，大衆誌は娯楽性，婦人誌は実用性，総合誌は時事性，教養性というふうになっている。これは決定的に言えるかどうかわからないが，婦人雑誌の最大の特徴であるかの如く言われておった付録について，それがいいからといって購入した人は意外に少なかった。もっぱら雑誌全体によって受ける実用性というものを期待して買っているという答えが出てきたのはわれわれの多少意外に思った結果であった。

それからマスコミ活動を，新聞，ラジオ，テレビ，映画演劇の四つの分野に分けて考えてみると，大体雑誌を読んでいる人は平均二種類の新聞を読んでいる。そして

それぞれの購読者がどのような新聞記事に関心を持っているかというと，大体大衆雑誌の購読者は社会面，スポーツ，家庭婦人，娯楽演芸，小説。それから総合雑誌は大体社会，経済，政治，外電，社説，スポーツ。婦人雑誌は社会，家庭婦人，娯楽演芸，小説，番組予告。こういったように，かなり顕著な傾向が見られるようである。ラジオについて言うと，大衆雑誌の購読者はニュース，ドラマの中継，軽音楽，ジャズ，歌謡曲。総合雑誌の購読者はニュース，古典音楽。婦人雑誌の購読者はニュース，婦人，ドラマの中継，というような結果が出ている。またテレビの場合は，大衆雑誌の購読者は劇場中継，ドラマ，映画，という番組に強く，総合雑誌の購読者はスポーツ，婦人雑誌の購読者はニュース，劇場中継，ドラマ映画というところに集中しているようである。映画，演劇については省かせていただく。

それから次に雑誌あるいは単行書を購買する刺激となる，いわば決定契機として，どういうものがあるかというと，書籍，雑誌とも非常に新聞広告が大きなウエートを占めている。これはアメリカの調査でも，大体新聞広告と，それから新聞の書評，あるいは雑誌の書評というように，トップ・スリーは大体日本の事情と似ているところを見ると，大体共通の現象であるように考えられる。で，単行書，雑誌のどちらの調査についても言えることなのだが，電波媒体によって特定の単行書，あるいは雑誌を知って購入したということは非常に少ない。これはよくわからないが，一つは出版社側の電波媒体の使い方に外少問題があるということと，もう一つはプリンテッド・メディアによらなければ，広告の効果が非常に薄いのではないか。これはどちらもはっきりわからないけれども，ただマスコミュニケーションの発達と歩調を合せてクローズアップされてきたような内容の出版物，たとえば具体的な例として当っているかどうかわからないが，スポーツの週刊誌のようなものは，案外電波媒体による影響が非常に大きいのではないか。したがって，マスコミの発達と歩調を合せて，非常にポピュラーになってきた大衆誌の中で幾つかの雑誌は，かなりラジオ，テレビの広告が高率を示している。この解釈はどの程度当っているかわからないけれども，そういう問題があるように思う。

雑誌については，外買について調査したので，大体予約注文して届けてもらうことが建前なのでよくわからないけれども，単行書について言うと，大体本屋へ寄ってきて本を買う人の五割から六割程度ぐらいしか，事前に本についての情報をつかんでいない。あとの四割ないし五割の人たちは，全くの未知の状態で本屋へ尋ねてきている。では一体その五割ないし六割の人たちに，どういう情報が一番本の選択に当って影響を与えたかということを見ると，やはり新聞広告で見たというのが非常に強い。現在日本の新聞における印刷物の出版広告というものは，ある一つの文化欄と同じような役割を果しているのではないか。化粧品や食料品の広告を見るのと，毎日の新聞の出版広告を見る態度とは，本質的に違っているように思われる。それから五割ないし六割以外の人たちでは，実際に店頭で決まってしまう。こういうことを考えてみてもやはり本屋さんの文化性というものが非常に教育的に見て，大きな意味合いを持つのではないかと考えられる。それから特定の図書あるいは雑誌を選ぶということについては，いろいろな情報の源があるわけだが，それぞれの情報の源と，実際に書店で買ったものと相関させてみると，やはり日刊紙の広告がもっとも大きな役割を果たしている。その他日刊新聞の紹介であるとか，週刊誌の紹介というものが，やはりトップスリーとして出てくる。その他ラジオ，テレビの紹介であるとかポスター，図書目録，内容見本，チラシ，ダイクトレメール，後付広告といろいろあるけれども，やはり日刊新聞の広告とか，あるいは日刊紙の紹介，週刊誌の紹介には倒底及ばないのである。

われわれは，普通の民衆がどのような特定の本に接近するかということに非常に関心を持っているのだが，それについてもやはり調査のプロセスで，配給ルートがまだまだ全国的にはっきりつかめない。つまり本が生産されて，特定の読者に到達するまでのプロセスが，北海道から九州まで全国的に，ここではこうだという形ではっきりわからない。本屋さんには，何番地の誰がどういう雑誌をとっているかという完全なリストさえもほとんどないという状態で，まだまだ私ども調査する側と，出版社あるいは本屋さんと歩み寄って，ほんとうに本が読者に到達するまでのプロセスの解明に協力していかなければいけないことは，非常にたくさんあると思う。不十分ながら従来何回か調査を重ねてきて，今後ももっともっと私ども虚心担懐に言うべきことは言い，また教えていただくところはお教えをいただきながら，調査を進めて参りたいと思う。その結果われわれの学的な関心も満たされ，かつは皆様の事業の中で，臨床的に多少幾らかの調査結果が生かされれば，非常にわれわれとしてもこれに過ぎる喜びはないわけである。

高校生は流行書をどう読んでいるか*(2)

第四章　流行書読書の基礎調査

流行書読書の第一次調査は，第三章における一般的読書調査から出発して，流行書と思われるものについてのみ，どんな作品が多く読まれているか，どのくらいの生徒が流行書に接しているか，について概略の傾向を探ることを主目的にし，その読書環境の調査の一部として入手経路をたずね，さらにマスコミとの関連を知るために，読書の動機を調査することにした。調査結果は次の通りである。

資料4　流行書読書調査統計

調　査　対　象

	計		1男		2男		1女		2女	
回答	143	76.1	31	16.5	28	14.9	43	22.9	41	21.8
未回答	45	23.9	19	10.1	10	5.3	7	3.7	9	4.8
計	188		50	26.6	38	20.2	50	26.6	50	26.6

都立八潮高等学校図書館

調査実施昭和33年2月5日，

問Ⅰ　下記の本の中で読んだことのあるものを全部あげよ。

	書名	著者	計		1男		2男		2女		2女	
1	挽歌	原田康子	74	16.3	11	13.3	15	12.8	21	17.8	27	20.0
2	楢山節考	深沢七郎	60	13.2	16	19.3	10	8.5	23	19.5	11	8.1
3	氷壁	井上靖	43	9.5	5	6.0	10	8.5	12	10.2	16	11.8
4	美徳のよろめき	三島由起夫	29	6.4	5	6.0	13	11.1	4	3.4	7	5.1
5	ロンドン東京五万キロ	辻豊	29	6.4	10	12.0	4	3.4	6	5.1	9	6.6
6	金閣寺	三島由起夫	27	5.9	4	4.9	7	6.0	9	7.7	7	5.1
7	硫黄島	菊村到	25	5.5	6	7.2	7	6.0	4	3.4	8	5.9
8	第三の目	ラムパ	22	4.8	4	4.9	3	2.6	9	7.7	6	4.4
9	愛のかたみ	田宮虎彦	19	4.2	2	2.4	5	4.3	3	2.5	9	6.6
10	一日一言	桑原武夫	17	3.7	3	3.6	4	3.4	6	5.1	4	2.9
11	スポーツマン一刀斎	五味康祐	17	3.7	7	8.4	8	6.8	2	1.7	0	0
12	永すぎた春	三島由起夫	17	3.7	0	0	4	3.4	5	4.2	8	5.9
13	鍵	谷崎潤一郎	14	3.1	2	2.4	9	7.7	1	0.8	2	1.5
14	おとうと	幸田文	12	2.6	2	2.4	4	3.4	4	3.4	2	1.5
15	杏っ子	室生犀生	11	2.4	1	1.2	4	3.4	2	1.7	4	2.9
16	射程	井上靖	9	2.0	0	0	1	0.9	0	0	8	5.9
17	暖簾	山崎豊子	7	1.5	0	0	3	2.6	2	1.7	2	1.5
18	駅前旅館	井伏鱒二	6	1.3	1	1.2	2	1.7	1	0.8	2	1.5
19	沖縄島	獅田正次	4	0.9	1	1.2	2	1.7	1	0.8	0	0
20	みみずく説法	今東光	4	0.9	0	0	0	0	3	2.5	1	0.7
21	流浪の人	堤邦子	2	0.5	1	1.2	0	0	0	0	1	0.7
22	世界の酒	坂口謹一郎	2	0.5	1	1.2	1	0.9	0	0	0	0
23	人間の条件	五味川純平	2	0.5	1	1.2	0	0	0	0	1	0.7
24	非情の庭	樋口茂子	1	0.2	0	0	0	0	0	0	1	0.7
25	悔なき愉悦	丹羽文雄	1	0.2	0	0	1	0.9	0	0	0	0

* How Are High School Students Reading Popular Books? (2)

26		円地 文子	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
27	霧の山	安川 茂雄	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
28	鍵穴の中	三宅ますみ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計			454		83	18.2	117	25.8	118	26.0	136	30.0

問II その読んだ本の入手経路を記して下さい。

0. 自分で買った 1. 家庭にあった 2. 先生に借りた
3. 先輩に借りた 4. 友人に借りた 5. 本校図書館で借りた 6. 公共図書館で借りた 7. 貸本屋で借りた
8. 回覧文庫で借りた 9. その他(教室文庫その他)

	書名	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1	挽歌	6	21		1	27	5		8		7
2	楢山節考	4	11	1	1	16	15		3	2	4
3	氷壁	3	5			8			5		
4	美徳のよろめき		6			12			5	1	2
5	ロンドン東京五万キロ	4	7		1	5	3		6		3
6	金閣寺	1	9		2	2		1	2		22
7	硫黄島	2	12		1	1		2	3		4
8	第三の目		1	1							
9	愛のかたみ		6		2	6	1	1	1	1	1
10	一日一言	4	6			3	4				
11	スポーツマン一刀斎	1	6		1	1		1	1		6
12	永すぎた春	1	6		4	9	4		2		
13	鍵	1	6		1	1			1		4
14	おとうと		6			2		2	8		
15	杏っ子	1	4	1		1			1		3
16	射程	1	1	2		3		1	1		
17	暖簾		5						2		
18	駅前旅館	1				2	1		1		1
19	沖縄島	1	1	1				1	1		
20	みみずく説法	1	1								2
21	流浪の人		2								
22	世界の酒	1	1				1				
23	人間の条件	2									
24	非情の庭		4			5			4	1	2
25	悔なき愉悦	1									1
	(その他なし)										
計		36	127	6	14	104	34	9	55	5	52
計の総計 442 に対する%		8.1	28.7	1.4	3.2	23.5	7.7	2.1	12.4	1.1	11.8

問III 上記の本の中で，今まで読んだことのある本を五冊以内をあげ，その各々について，読んだ動機を答えて下さい。

0. 家にあったから
1. 友人・先輩・家族などにすすめられた
2. 先生にすすめられた
3. 本校の図書館にあった
4. 友人たちと話を合せる必要のため
5. いろいろの広告に引かれた
6. ラジオ・テレビの紹介を聞いた
7. 映画を見て原作を読みたくなった
8. 新聞雑誌（週刊誌を含む）の紹介記事から
9. その他

(A)

	動機	計		1 男		2 男		2 女		3 女	
0	家にあった	47	13.7	12	18.7	7	9.7	16	14.2	12	12.7
1	友人，先輩，家族	11	3.2	2	3.1	1	1.4	7	6.2	1	1.1
2	先生	21	6.1	3	4.7	3	4.2	15	13.3	0	0
3	本校図書館	27	7.9	4	6.3	4	5.6	7	6.2	12	12.7
4	友人との話	42	12.2	5	7.7	12	16.7	12	10.6	13	13.8
5	広告	13	3.8	8	12.5	2	2.8	0	0	3	3.2
6	ラジオ・テレビ	2	0.6	0	0	0	0	1	0.9	1	1.1
7	映画	73	21.3	12	18.8	16	22.2	12	16.8	26	27.7
8	新聞雑誌	27	7.9	1	1.6	7	9.7	13	11.5	6	6.4
9	その他	80	23.3	17	26.6	20	27.7	23	20.3	20	21.3
		343		64		72		113		94	

A表の動機を作品別に統計するとB表のようになる。

(B)

	書名	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1	挽歌	8	6		4	18	21	1	3	13	11
2	楢山節考	9	12	3	7	2	5	3	1	14	3
3	氷壁	14	4			1		1		7	10
4	美徳のよろめき	3				5	5			3	3
5	ロンドン東京五万キロ	2	4		1		2	4		9	8
6	金閣寺	6	1	2	2		1			5	2
7	硫黄島	5	2		1					7	3
8	第三の目	1	4	3		1	1			5	5
9	愛のかたみ	6	6	1	1		3	1		6	1
10	一日一言	3	3	1	3				1	1	2
11	スポーツマン一刀斎	5	1							3	3
12	永すぎた春	5				2	1	1		1	
13	鍵	6					1			2	1
14	おとうと	3	3		1		1				2
15	杏っ子			1						4	2
16	射程		3							3	1
17	暖簾	3								1	
18	駅前旅館				1			2			1
19	沖縄島	1		1							2
20	みみずく説法	1									1
21	流浪の人	1			1						
22	世界の酒										1
23	人間の条件	1									
24	非情の庭										
25	悔なき愉悦									1	
26											
27	霧の山										

28	鍵穴の中										
計		84	49	12	22	29	41	13	5	85	62
総計 402 に対する%		20.9	12.2	2.9	5.5	7.2	10.2	3.2	1.2	21.1	15.4

(一) 調査対象

調査実施期日が大学の入学考査に迫った時期になった結果，大部分の第三学年の生徒を対象とすることができず，1，2年生徒も学年考査をひかえた時期だったので，全員を対象とすることをはばかられた結果，1，2年男子，2，3年女子，計約200名にとどめねばならなかった。本校在籍生徒数は約1,200名であるから，調査対象はその六分の一，16%強である。調査人員としては少なきに過ぎる嫌いがあり，この調査の結果をもって全体を推すことは，極めて不十分とも見られたが，傾向の一端は伺うことはできるし，数値を6倍するかわりに適当の倍数にとどめてみれば，全員調査の結果に幾らかでも近づけられるのではないかという，極めて非数学的非論理的立場で，調査を強行した。

調査実人員188名に対して回答を寄せた者，つまり少くとも流行書らしいものを読んだことのあるものは143名，76%強の結果を得た。この結果を全校生徒に布えんして類推すれば少くとも過半数の生徒は，何らかの流行書を読んだことになる。そうして残された未読の生徒も，遅かれ早かれ，さらにその中の何%かの者が流行書を読む可能性があると見なければならない。従って，将来のある一定の時期を区切って再調査を予想するならば，どういう結果が出てくるかは，容易に想像できる状態である。文学的意義はたとえ感じなくとも，いわゆる流行書に接した読書生活の事実がかくされた大きな事実として浮び上ってきたことは事実である。

かつ，男女の差を見ると，男子よりも女子が，より多い数値を記録していることも，見逃がせないし，男子の場合では高学年の方が高い数値を示していることも同様である。女子の場合は3年と2年が逆の数値になっているが，これは恐らく調査員が少なかったための現象で，実際には3年生の方が高い数値を示すことはまずまちがいない。これらの傾向は，男女の将来の進路の相違と，肉体的精神的発達の相違とに起因することは論をまたない。

(二) 流行書の占める地位

では，どういう作品を読んでいたかを問Ⅰによってながめてみよう。問Ⅰに挙げた28の作品は，あらかじめ教師の側で選んだものであるが，これは，いわゆる流行書であると否とにかかわらず，出版社に依頼した調査に基づいて，調査年月現在発行部数の最も多いものから順次羅列し，それに調査研究の立場から若干の取捨選択を加味したものである。いわば，いわゆる流行書とそうでないものとの綜合リストの形式をとり，生徒に任意摘出させて，その中における流行書の占める地位を探ろうと意図したものである。教師の側から流行書をあからさまに指定して調査することは，当初にも述べた通り，教育上の危険性を伴うことであることに配慮を加えたわけである。

この統計でも見られる通り，世上でとかくの批評を浴びつつあった，いわゆる流行作品が姿をあらわすことになった。たとえば「挽歌」は74名の読者を得たから，調査人員中の約40%に相当している。「美徳のよろめき」「永すぎた春」「鍵」なども若干数ながら生徒に読まれていることがわかる。

(三) 入手結路

問Ⅱはその入手経路をたずねたものであるが，統計の示すところによれば，「家庭にあった」と答えた者が統計で大の数値を占め，全体の約30%になっている。次は「友人に借りた」と答えたもので，これが約24%。第三位が「貸本屋で借りた」が約12%。「その他」を除いた他は皆10%以下の小数値となっている。

ところで，「家庭にあった」，「友人に借りた」，「貸本屋で借りた」という最も大きく浮かび上がった入手経路の三つのケースを考えてみると，「友人に借りた」というその貸した側の友人は，「自分で買った」というケースの数値がそれほど高くないところから見ると，恐らくその本を家庭から持ち出して友人に貸してやったという場合が多いのではないかと想像される。従って，「友人から借りた」と答えた数値の中の若干数は「家庭にあった」という答えの中に還元されてよい。もち論，友人同志の貸し借りは，おそらく少数の本が回覧式に持ち廻わされる場合が多いと想像されるので，「家庭にあった」に還元される数値が大きいか小さいかには疑問の余地はあるとしてもとに角，「家庭にあった」と「友人に借りた」との二項目は少なからぬ関連をもって結びつけられることは事実と見なければならない。

「貸本屋で借りた」と答えたものの数値が大きかった

のは，実は教師の側としては予想外の事実であった。小中学校の生徒が貸本屋に出入りして漫画や少年少女小説などを借りてくる風潮はとみに増加しているということは聞き知っていたが，高校生ともなれば貸本屋への出入りは，自覚的に抑制されるものと考えていたことに誤算があった。貸本屋にちん列されている本は，ほとんどその大部分が少年少女相手の本と大衆向けの娯楽読み物であり，いわゆる流行書といわれるぎわ物も，その都度市村の読者の興味をひくように用意されているのが現状のようである。いずれにしても「貸本屋で借りた」と答えたものが，意外の数値を示したことには，あらためて分析を加えねばならないことを知った。

しかしこの28冊のリストは先にも述べたように混合リストであって，今分析した数値と比率は，その混合リストについての回答統計に対するものであるから，いわば黒白混合の形となっている。そこで，我々は，いわゆる流行書と目指されているものだけについて数値と比率を割り出してみなければならない。その結果は次の通りである。ただし入手経路10項目の中，共通して数値の極めて少いものは削除した。

	自分で買った	家庭にあった	先輩に借りた	友人に借りた	本校の図書館にあった	貸本屋に借りた
挽歌	8.0	28.0	1.3	36.0	6.7	10.7
美徳のよろめき		20.1		41.7		17.0
永すぎた春	3.8	23.1	19.2	34.6	19.2	7.7
鍵	7.1	42.9	7.1	7.1		7.1

上の%は各作品のそれぞれの入手経路回答総数に対する%である。まず断っておきたいのは，「挽歌」と「永すぎた春」を「本校の図書館で借りた」とあるのが若干数記録されていることだが，これは本研究実施に当って研究資料として買い入れた流行書を図書館事務室に備えつけて教師の便宜をはかったのだが，生徒の自由な出入りにつけてその手に渡ったものと考える以外に理由がなく，図書館事務担当者の不行届を弁角せざるをえない。

さて，上の統計によってみると，さきに分析した結果が，ほとんどあやまたず実証されていることがわかった。この統計では，「家庭にあった」と「友人に借りた」との二つが特に顕著で，「貸本屋」の影は，それに比してずっと薄れているが，それでもやはり，「挽歌」や「美徳のよろめき」についてはかなりの数値を示していることを見落せない。

とに角，相互連関に立つとみられる「家庭にあった」と「友人に借りた」との二項目が，これほど顕著な姿で出てきているという事実は，もっと深く真相を追究してみてよいことだと考えた。すなわち，家庭においては，果して家庭の中のだれがこの種の本を手に入れておくのか，家庭における読書環境の実態はどうであるのかなどといった点や，生徒間における読書に関しての相互の心理作用の実態，読書興味の実態，その他の諸点である。

統計の一応の分析は以上のごとくであるが，この入手経路に関する調査は，次の「動機」調査とも深い関係があるので，次に移ることにしよう。

(四) 読書の動機

問Ⅲの質問は，マスコミの影響の強さがどれほど大きいか，生徒相互間の心理作用やその他の日常のかげに読書興味を誘発するものがどれほど大きく現われてくるか，といった点を教師の側であらかじめ想定し，それを統計の上で実証してみようという意図があった。A表は読書動機の概略を知るために用意し，B表は同時に28冊についての個々の読書動機をたずねたものであるが，A表とB表との数値は必ずしも一致しないところもあった。

まずA表によって一般的概況をさぐってみると，映画によって読書動機を誘発される場合が一位を占め，家庭の読書環境によるものと新聞雑誌の影響が同数値であらわれている。しかし広告，ラジオ，テレビ，映画，新聞雑誌などは一括してマスコミの中に含めれば，いわゆるマスコミの影響は約34%の比率となって第一位に上ることになる。すなわち，いわゆる流行書を含めた新刊の問題作品は，マスコミによる影響を最大とし，さらにその影響を受けたと思われる家庭の読書環境を次とし，第三には，生徒同志の間における興味の伝播作用によって読まれていくという順序が明確になっただけである。かつ，生徒間における興味の伝播作用は，同年代における好奇心の雷同性ということも大きな役割を占めているがその好奇心をあやつるものの根源はやはりマスコミの力であると考えてさしつかえない。これはマスコミが生徒の心をさらっていくというよりも，大人も子供も総ざらいにさらっていって，その果てが子供の好奇心という末端に及んだと見る方が適当であるかもしれない。

B表は，A表にあらわれた動機を，28冊の各作品についてさらに細かくたずねた結果の統計から見ると，新聞雑誌の紹介によるのが第1位で，それとほぼ同数で，家庭の読書環境があげられ，ややさがって友人，先輩，家族のすすめによるものと，広告によるものとが位置し，友人と話を合せる必要性が次に出てきている。A表にあ

らわれた映画の影響がB表では影をひそめていたり，その他統計上AB二表にくい違いの出たことは，調査方法および生徒の記入方法などの不手際から生じたものと思われるが，いずれにしても，広告，ラジオ，テレビ，映画，新聞雑誌などマスコミの影響力は，B表でも圧倒的となっており，次いで家庭における読書環境が出てくる点は，A表の分析結果と同一である。「友人，先輩，家族などにすすめられた」という答えは，「家にあったから」，「友人たちと話を合せる必要のため」の二項目に深くつながっていることはいうまでもないが，ここでも，生徒同志間における好奇心の伝播性は，A表におけると同じように強調されなければなるまい。

要するに我々は，この動機調査の結果，いわゆる流行書なるものが広く読まれるに至る原因を，マスコミの影響と生徒間における好奇心の伝播との二つに要約することができた。後者は特に心理学上の連鎖反応と解釈してよい。しかもこの生徒相互の心理的連鎖反応は，さらに外部的にはマスコミの作用につながるものであることは前に述べた。すなわちこの連鎖反応を誘発する原動力は，人間が生来持っている好奇心もさることながら，やはりマスコミの強力な力ではないかということである。我々は，好奇心なるものを教育的立場において否定しさるものではなく，むしろ好奇心とか興味とかは，これをよい方向へ育てるのが教育の役目と思うが，この統計にあらわれたところによれば，その生徒の好奇心や興味は洗れんされない素朴な姿のままマスコミの旋風に吹きさらされていることがわかったし，これに対する防禦育成の措置は，教育の場においても家庭の場においてもとられてはいないという現状があからさまになった。そうしてその一方，問題視されるような作品は書かれ放題，そしてその紹介に当るマスコミの嵐は吹き放題，という実状と見てよかろうと思われた。

A表にならって，いわゆる流行書と目されるものについての数値を比率化したものを次にかかげてみよう。

	家にあったから	友人先輩家族にすすめられた	友人と話を合せるために	広告によって	新聞雑誌によって
挽歌	9.4	7.1	21.1	24.7	15.3
美徳のよろめき	15.8		26.3	26.3	15.8
永すぎた春	50.0		20.0	10.0	10.0
鍵	60.0			10.0	20.0

総計からの統計とはいく分のずれはあっても，右に述べた傾向とは決して変っていないことがわかった。ただ「挽歌」と「美徳のよろめき」はマスコミの影響力によるむきが強く，「永すぎた春」と「鍵」は，家庭環境による方が強いという結果があらわれているが，これは回答者数が少なかったことが原因となっているのではないかと思われるので，その点の修正がもしなされるとすれば，前二者と変らない結果があらわれてくるものと予想される。

B. エールリッチ

〝子供の本における物語と絵について〟 抄訳*

この抄訳は，ホーン・ブック・マガジンという1冊平均60頁位で年6冊発行の児童文学評論雑誌に発表した，ベッティナ・エールソッヒという人の論文である。

子供の本というとまず，それは物語と絵から成っていると考えられる。しかしこの二つが一緒になって子供の本は出来ている。実際，挿絵入りの物語というものは子供向きの本を作る場合になくてはならないのである。

大人や青年向きの挿絵入りの本は挿絵が取り入れられてなくても物語は理解されるにちがいない。しかし，子供の本では，この文章と絵は別々に分けられない相即不離なものである。だが，そういっても常に物語が本の基本的な要素であることには変りないだろう。

即ち，物語は本の主節であって，挿絵は伴奏のようなものである。物語の長所はそれ自身の中にある。挿絵の長所は一部分はそれ自身の中にあるが，大部分はそれが読者に物語の理解を助ける程度によってきまる。

* Bettina Ehrlich;
Story and Picture in Children's books.
The Hon Book Magazine
Oct, 1952. Vol. xxviii No. 5 p. 301—308

だから，よい絵が必ずしもよい挿絵となるとは限らない。物語のもつこのような役割に注意すると，両親や教育者や出版者が絵の選択より，物語がどんな文章で書かれているかといって文章の選択に多くの注意を払っていることが分る。その場合，確かに彼等は言葉は絵よりももっと子供に直接的な影響を与えると感じているのである。そして，絵についてよい悪いの判断を下すのにためらうよりも，書かれた言葉についての判断を下すのにためらう人の方が多分多くいることだろう。こういったことから，色彩の再生に負わされた色々の制限を伴いながら，挿絵入りのよい本よりもよく書かれた子供向きの本が存在する結果となるのである。

子供向きの作品を書く時に大切と思われる二点がある。その一つは難しい言葉に関することである。すべての子供向きの本は子供にとって始めての或る言葉を含んでいるべきである，と私は信じている。部分的には，子供が知らない言葉を見たり学習する場合，理解出来ない表現に直面することで，或る恐怖が生じるといわれる。しかし，私はこの見解に賛成することは出来ない。なぜならば，私は言葉が完全に理解出来なくても，特に想像的な子供ならば，そのようなわからない言葉に関心をもつだろうと思うからである。そして，もしも，子供が読む本の中のあちらこちらに新らしい言葉を見出さないとしたら，どのようにして，子供は自分の語い数をふやすことが出来るか？　子供が語い数をふやしたり，表現法を発展させることは，只単に表現法をより豊かにするためというだけでなく，思考のより広い分野を開拓したり，正確な思考が出来るようになるといったことからも重要な問題である。

時々，子供に言葉の意味を説明してやることは大人にとっては迷惑なことである。しかし，そういった迷惑な事は非常に価値のあることである，と私は考えている。多くの子供達は説明を求めることも，説明を得ようと注意を払うこともしない。だが，あいまいで完全に説明出来ないような言葉は子供心には非常に魅力のあるものである。ある場合には余りにも易しい本は不満足なものであり，恐らく余りにも難しい本よりももっと子供に避けられることが多いにちがいない。勿論，子供向きの本は，関心を持たせるために，複雑な言葉を多く使ってはならないけれども，あちらこちらにあるそのような言葉は子供の心を鍛練するように働き，結果として，子供心を豊かにする。

通常，我々は子供達をのんきで幸福な存在と見ようとする。そしてフロイド以前の時代には学習することは恐威を伴っていたが，そういった学習する場合の恐威を子供の心から取り除いてやることが近代では教育目的の一つになっている。今日，そのことは我々がなし得る最も偉大なことの一つでもあり，その方向へ向ってなされるすべての試みを達成された結果の功罪についてどうこうとはいえない。しかしながら，学習に際して子供に恐威を与えないようにといった配慮をあまり押し進めて，子供に本を与える場合に，易しい簡単なものにする結果，子供をあまやかすという極端なことになることは避けなければならない。凡べての人々は筋肉を発達させるためには子供は訓練しなければならないという点では一致する。ひるがえって，このことは精神の面でも適用されるべきものである。次に，子供向きの作品を書く場合，考えなければならない第二の点であるが，精神的甘やかしの傾向は，子供向きの本に悲しい章節を入れたり，人生の災難についての記述となって出ていると，こういったことに対して，大人が憤慨することに見られる。子供はこれらのことに立ち向うことも出来るし，また，それを楽しむことも出来ると私は思う。悲しみに直面したり，悲しみを恐れたりするのは大人であって子供ではない。

子供の本に楽しみを求めようと飽くなき欲望をもつのは子供でなく大人である。

子供は人生の凡べての面を知ろうという内的希望をもっている。そして，我々はこの希望を低く評価したり，我々自身が理解出来る希望の中でその充足を考えることをしないで，不合理なことだが，子供は陽気でいつも希望を持っているものだと望むべきである。こう考えると子供向きの本としては，物すごいもの，気味の悪いもの，ぞっとするものなどは精神的かてとしては不適切なものであると思うが，しかし，ほんの少々の悲劇は物語に必要とされる緊張を加えることになるだろう。そして，最後の判断に於て子供の持つ信念を失望させないようにして，提供されるべきであると思う。丁度「黒ん坊サンボ」を取り巻く処が太陽の中に溶けてしまったり，或いは，「赤ずきんちゃん」を食べたおおかみが射たれてしまって，彼女がおおかみのお腹にいることに対して，矛盾を感じないというような具合である。

私はケイトという七才になる少女に，〝ココロ，アメリカに来る〟という題名の私の本を与えた。そして，二，三週間後に私は再び彼女に会った。そこで，彼女がいうには，〝あの本で私が一番気に入った所はどこか知っている〟。といった。〝何だね，ケイト〟というと，〝それは

ね，ココロが自動車にひかれた時よ"，と落着いていった，〝本当にそうなの"といって私は一寸まごついた。というのは，続けて，彼女は〝ええ，そこんとこと，ココロが結婚した時よ"といったからである。このことは，私に何かを考えさせた。即ち，危険と愛情という二つの人間劇 (Human drama) の永遠的な主題が他の面白い内容を含んで私の物語の中の他の出来事よりももっとこの少女に印象的であったという点である。しかしながら，私は幼年向きの本では物語りは幸福な結末で終るのがよいと確く信じている。一方，十代の者達にとっては，たとえ目に涙を浮かべて彼等が本を閉じたとしても，それは悲しむべきことではない。泣くことは若者にとっては喜びの一つである。そして，涙をもたらさないようなものを含んだ本棚は笑いをもたらすものを含まないような本棚と同様に不完全なものである。

子供向きの本では挿絵の問題は注意深い調査を必要とする。

私が最初に子供向きの本を出版して間もなく，或る日，友達の芸術家がやって来たので私はごく自然に出版した本を彼に示した。すると，彼はばらばらと，しかし，注意深く本を見て，〝よく出来ている，子供はこの本をよく読むだろう。なぜなら，君も知っているように子供はこんな風に絵を読むからだ"といった。

そして，なおも，ぶつぶついいながら，丁度小さい子がするように人差し指で絵の色々と細かな部分を軽く押し始めた。私は前の年に子供の絵を書く活動についての調査を行った。

その時，彼等の創造性を注意し，子供達とそれについて論議をしたりした。そして，私は子供の絵というものは絵話しであるということと，それらの絵は成人の場合とちがってそれぞれ違った動機から画かれるものだということを学んだ。正しい視知覚は，後年になってから始めて発展をするもので，そして，子供は除々に，或いは突然，絵をかくことを止めて両親は失望することが多い。これは大体十才以後はなっておこる。とにかく，その時は，子供が人間の眼に事実現われるものとして事物を見始める時であり，困難を感ずることなく読んだり書いたり出来るようになる時でもある。視知覚が発達することによって子供に芸術的再生が余りにも困難なもので，失望させる。読んだり書いたり出来る能力が発達することによって，表現の手段として絵を余分なものとするようになり，挿絵をもはや本質的なものでなく，語をわかり易くするための補助的なものとして，見るようになる。それ故に挿絵が主要な部分となった本は，十才以上の子供には，勿論，彼等はそれを楽しむには楽しむけれども，赤ん坊じみたものとして考えるのである。小さい子供は考えてることや思ってることを描いたり，身の回りの目に見える世界を再生しょうとする。そして，普通には，自分が受情を感じたり，持ちたいと望んでる対象を描くものである。

例えば，母とか父，または，家の前にいる自分自身とか飛行機，馬などである。また，子供は，大人の芸術家は敢えて書かないようなもので，自分も見たこともないような対象をためらうことなく描くだろう。

子供は絵を自分が見て記憶出来るような型に結びつけて描き，そして子供が描いた絵を保存しょうという気持になる時は，子供自身のうちに芸術的性向が現われたきざしと取ってもよいだろう。

さらに，子供は読みもしないし，他の子がした〝絵話し"を見てもその何かを読もうともしないという点は重要な事項である。凡べての子供にとって，絵話しといったことは個人的な作品であり，書いた本人以外には理解出来ないものであり，他人には説明を要するものである。そして，大なり小なりそれは個人的なものの象徴である。さて，我々は，子供は文字を読めるようになると，明瞭な，非個人的な文字，即ち，挿絵に対して活字印刷面を欲し，子供は読んでる挿絵の明瞭さを要求するようになることに我々は気が付く。このことは文や絵は普遍的に有効な象徴から成っていて，自方ひとりが用いる個人的な象徴からは成っていないということに子供が気付いたことを意味する。このことは，幼児にとって挿絵の最も重要な性質はどれであったかを全く自然に分らせる。絵で告げられてる物語りは文によって告げられる物語りと完全に対応していなければならない。即ち物語は絵や文で成っているか，絵も文も同一の物語についてなされているようになっていなければならない。もしも，物語の中で家が森の近くに立っていたといわれるならば，森は家を示す絵の中に目立って書かれていなければならない。もしも，物語中の一人の人物が緑の帽子をかぶっていると記述されているならば，挿絵中の帽子は緑色でなければならない。もしも，こういった場合，絵本の中に緑色を使うことが，経済的又は他の制約によって出来ないなら，その時のひとつの方法は著者が文章を変えるか，挿絵を書く人がこの特別な章節の挿絵を見捨てることである。文章と絵の不一致は子供にとって許し得ないことである。そして，大人は，緑色の帽子は，こ

こでは赤色なんだなと思うことが出来る。一方，子供は色が注目される章節を白黒の挿絵で表わしてもそれを普通は心に止めてはおかないだろう。想像がそのギヤップをうめるだろう。しかし，白黒で挿絵が書かれるような本で余りにも多くの色については述べないように配慮することは非常によいことである。子供の本に於ける挿絵が明るい色であることの重要性は一般的に購買者である大人や販売者によって過度に評価されている。より小さい子供達は明るく彩色された対象を把む傾向があることは確かであり特に目に刺激的である所から，その色は赤であることも確かである。しかしながら，こういったことは，彼等の視覚の識別能力が未発達である結果おこるのである。ただ，ほんの少しの子供達だけが，一色の微妙な影を区別したり或いは，微妙な色を思い出すことが出来るのである。しかしながら，挿絵ともなると，絵の内容とか読者の読書能力とか，絵そのものが親密さとか愛すべき所をもっているかといったことも，もっと重要な要素となって来る。絵は多くの読む部分を提供する。つまり，本の内容を詳しくするのに役立つ。たとえ，デザインや文章や色彩といった面が芸術的に優れたものであっても，殆んど事実を提供しない絵や，人々が二回目の読書を終った絵は小さな子供にとっては不満足なものである。大人が書物を読む場合に文字は全体として理解されるが，絵はそれに比べて全体として理解されないものだとはいえない。だから，絵が詳細にわたって分析され，そして，意味が多ければ多いほど，絵はよりよいものを伝達する。

大人の鑑識眼からすれば，美的でも芸術的な結果でもない絵を子供達はしばしば非常に好くという事実に対し説明しなければならないと思う。子供が醜い絵本を非常に好むのを見ることで挿絵画家はしばしば最も落胆させられる。

そして，芸術家は彼の最善を尽すことが馬鹿らしくなる。或いは，出版者によい仕事をしょうとする勇気をそぐことになる。しかしこういったことは，確かに間違っている。もし，子供に美しい絵本が与えられるならば，後年になって，自分の生涯を非常に豊かにする美的感覚を発達させることによって，子供は大きな利益を得るだろう。勿論，子供はこの美的感覚を全く無意識的に発達させるだろう。そして，我々は子供の生活に美を取り入れるには或る種の内密な方法で始めなければならないと思う。丁度，子供がオレンジジュースの中にビタミンが含まれているのを知らないで飲んでいるごとく，子供は多くの事物から美を吸収し，絵本からも美を吸収する。両親は子供の身体のためによくバランスの取れた食事を与えようと非常な注意を払うのにどうして美に対する感覚をにぶらせないものを子供の目の前に与えようとしないのだろうか。しかしながら，オレンジジュースなるものはその栄養的価値は別として，味のよいものであることを我々は忘れてはならない。かくして，もしも，絵の美しさが快いものであるならば，子供にとっても目の前に横たわる絵本について見たり考えたりさせるにちがいない。こうして絵は知識や意味や物語や詳しいことを子供に提供するだろう。子供達に美しい挿絵と同様に良い挿絵を製作するためには芸術家は子供達を愛し，彼等の要求を理解しなければならない。また，或る程度芸術家に自分の子供時代の生き生きとした記憶を持たなければならないし，子供時代にまい戻ることが出来る能力や，その頃に何を好ましいと感じたかを再生出来る能力を持たなければならない。しかしながら，芸術家は決して子供のように絵を書こうとしてはならない。子供の絵に似せた様倣はより悪ずれした性質をもつ現代の挿絵が当面する大きな危険である。このような模倣は決して良い結果を導びかない。大人の芸術家や作者は子供の画く絵を製作したり，子供がするように自分を赤ちゃん語で表現したりする素直さも空想力も持たない。そして子供達に話したりすることは幸運にも非難されないし，子供達に絵を画いてやることは忍耐することでなく，反対にしばしば勇気づけられることである。だからこそ，この種の問題は近頃の子供向きの本が直面する最も重大な危険であると思う。凡べての未だ損われていない人 (unspoilt human being) がそうであるように，子供は完全なることを欲し，人工的な赤ちゃんぽさに退行しない。

子供向きの本に出て来る風船を頭につけた子供や愛玩物について一つのことがいえよう。愛らしい，抱いて可愛がるような物を造り出そうという欲望は，特にその可愛いい動物についての欲望は，子供の関心にふさわしいものと思う。しかしながら自由で個人的で素直な意志についての深い研究に基づいた描画はより多くの愛らしい，人の心を動かすものを持つと思う。

子犬のひたいのしわや，口をあけてるひな鳥の巨大なくちばしなんかは可愛らしいものである。

さて，子供というものは自分を取りまいている両親や，大きい子供達と比べて自分自身が小さいものであり，日常生活において大きさの問題に断えず直面してい

るから，もっと劇的な意味に於いても，大きさの割合という問題は子供には多くの意味をもつものとなる。それ故，大小の対応は子供にとっては物語と同様に挿絵に於て重要な要素である。

大きさは子供の所有感の中で大きな役割を演ずるから，子供の本の挿絵中の魅力的な大きさの割合についての精巧さは明るい色の使用よりもより大きい価値をもつだろう。

最後に，子供向きの本で，その文章や挿絵について最も重要であると私が信じているのは何かということをまとめていうならば次のようになるだろう。すなわち，明らかに要求される事実や知識は別として，世の中のことや美や情緒的面についての広いそして複合した考えを子供に与えることだといえよう。

最後に，この抄訳に目を通して下さって，種々，有益な御示唆を下さった，講談社のたのしい一年生編輯部の斉藤氏に深く感謝いたします。

(野間教育研究所　田中博正)

読書時潮

—4月—

愛知県文化会館愛知図書館が，1日竣工，開館式をあげた。同館は地下1階．地上4階に分れ，延5,940平方メートル，書庫は430,000冊収容でき，総工費250,000,000円のデラックス図書館で，さきに完成した美術館，文化講堂と3館1体となって運営される筈である。(図書館雑誌　5月号)

第14回オール新人杯賞は1日，高橋達三氏の「匙—ローシカ」に決定した。審査員は松本清張，円地文子，有馬頼義，戸川幸夫，山本健吉の諸氏で，候補作として滝口康彦「水ケ江落穂拾」が最后まで残った。(日本読書新聞　4月13日)

第5回文芸春秋漫画賞は3日，長新太氏「おしゃべりなたまごやき」(福音館書店)に決定した。候補作にやなせ・たかし「メイ犬BON」，但公彦「ほのぼの君」岡部冬彦「アッちゃん」，佐藤六朗「動物記」，小島功「仙人部落」等があがっていた。(同上)

第8回児童文学者協会文学賞は該当者なく，新人賞に4氏が決定，4日の同協会総会で授賞式がおこなわれた。受賞者および受賞作品次の通り。

岩崎京子　「さぎ」(日本児童文学　33年5月号)
森　宜子　「サラサラ姫の物語」(日本童話文学会発行)
立原えりか　「人魚のくつ」(著者発行)
小笹正子　「ネーとなかま」(いたどり1号(同上)

現代詩人会の第9回H賞は5日，吉岡実氏の「僧侶」(書肆ユリイカ発行)に決定した。(同上)

宮崎県立図書館は5日，火災をうけ全焼した。損害は図書40,000冊にのぼるが，テープ・レコーダー，映写機等視聴覚器材等は無事で，5月から館内奉仕をおこなっている。(図書館雑誌　5月号)

週刊誌ブームはいよいよはげしく，現在30余誌，総発行部数10,000,000部を越え，4月に創刊されたものだけでも，次の7誌を数えている。「週刊実話特報」(双葉社)「週刊野球」(博友社)「週刊文春」(文芸春秋新社)「週刊サンデー日本」(東日本新聞社)「週刊映画タイムス」(森脇文庫)「週刊スリラー」(週刊スリラー社)「週刊映画」(週刊映画社)(図書新聞　5月2日)

東ドイツから8月1日～9月30日間，ライプチッヒ市で開催される**国際書籍展**へ参加の呼びかけが日本の出版文化界にも寄せられた。この展示会は東欧諸国，社会主義諸国をはじめ，世界各国の製本，印刷技術を交流し，歴史的な技術を保存する目的で開催されるものである。(日本読書新聞　4月13日)

文部省社会教育審議会読書指導分科会では，**青少年向「選定図書」**の選定基準と要綱をきめた。5月中に選定図書第1号が街に出ることになった。(朝日新聞　4月11日)

社会教育法は4月30日成立，同日付で公布施行され，文部省は5月2日全国の都道府県教育委員会に対して次官と社会教育局長名で運用についての通達を出した。(図書館雑誌　5月号)

日本書籍出版協会では，5日のこどもの日を中心に**「こども読書週間」**の運動をおこなうことになった。こどもたちへの良書の普及と児童書の販売拡張が目的である。(図書新聞　5月9日)

The Map of the Reading World.

—5月—

13日，日本書籍出版協会では，**図書選定制度に反対**し，申請はおこなわないという声明を発表した。一方日本出版協会は敢て反対しないとの意見を発表し，出版界は分断した恰好になった。（朝日新聞　5月14日，15日）

今年度**レーニン賞**文学部門受賞作はムフタル・アウエゾフの長篇「アバイの道」とニコライ・ポゴージンの戯曲「レーニン3部作」の2作にきまった。アウェゾフは1昨年来日したこともあるカザフの長老作家で，受賞作「アバイの道」は前世紀後半のカザフ遊牧民の頭領の子として生れた民衆詩人アバイの生涯をえがいた歴史小説である。またゴージンの戯曲「レーニン3部作」は，戦前に書かれた「銃を持った男」(第1回スターリン賞受賞）戦時中の「クレムリンの大時計」および近作「第3・パセチック」から成っている。（日本読書新聞5月11日）

本年度**ピューリッツァ賞**小説部門受賞作はロバート・テーラーの「ジェイミー・マクフイーターズの旅行」に，また演劇部門はアーチボルド・マクリッシュ，国際報道部門はキューバのバチスタ政府崩壊を報じたニューヨーク・ディリーニュース」紙のジョセフ・マーチン，フィリップ・サトラ両記者にそれぞれ決定した。（同上）

「出版白書」ともいうべき**出版指標**が，東販の出版科学研究所でまとめられた。（図書新聞　5月9日）

ゲーテの生地フランクフルト市が贈る「**ゲーテ杯**」の受賞者に日本ペンクラブ会長川端康成氏が選ばれた。今年の受賞者は川端氏のほか，米劇作家ソーント・ワイルダーら4氏である。（日本読書新聞5月25日）

日本雑誌協会は，かねてから要望のあった「**日本雑誌協会記者クラブ**」を，いよいよ結成，21日創立総会を開き，正式に発足の運びとなった。このクラブは講談社はじめ新聞社等から選ばれた10氏の取材委員会が運営し，カメラ取材，その他の編集取材上の便宜と円滑化をはかることになっている。（日本読書新聞　6日15日）

今年度の**サントニブーブ賞**の受賞作品がきまった。小説部門はジルベール・エカールの「ルトとサペリス」が獲得，評論部門では当初の予想を裏切ってジャン・カトランが受賞者となった。カトランの評論はマルセル・エーメを扱ったものである。その他審査員の間に好評だったものに，小説ではジャツク・マツサの「愛は冒険なり」評論ではアンリ・ギュマンの「バンジャマン・コンスタン論」などがある。（同　6月15日）

日本図書館協会主催昭和34年度**全国図書館大会**および同協会総会は27～29日間，名古屋市で開催された。ここでも文部省「図書選定制度」が問題になり，いろいろ論議されたが，結局昭和29年度大会で採択された，「図書館の自由を守る宣言」を再確認することに落着いた。（図書館雑誌　8月号）

—6月—

週刊ブームは頂点に達し，40余誌，毎週10,000,000部が市場にはんらんし，中には早くも脱落組が出ている。これと共に警視庁が4日，**不良出版物の取締り**に乗り出し，東鉄が8日，管内鉄道弘済会に対し，**不良週刊誌の駅売り自粛**を要望したのをはじめ，日本文芸家協会，日本書籍出版協会，日本雑誌協会，中央児童福祉審議会等の団体，業界が**不良出版物の追放**に乗り出した。（朝日新聞6月5～6，9～10，21，23，26日）

第2回**東京国際書籍展示会**が22ケ国から50,000点の図書を集めて，産業会館で開かれた。（朝日新聞　6月25日）

後楽園野球場にある野球博物館内に，日本ではじめての**野球図書室**が設けられた。広さ6坪，定員16名で野球関係の図書，雑誌2,500冊を有し，非公開ではあるが，篤志家，研究者には大いに利用してもらうとのことである。（図書新聞　6月27日）

—7月—

3月15日創刊された朝日新聞社の「朝日ジャーナル」は，一般の悲観的な予想を裏切って，300,000部台を確保，週刊誌に新分野を開拓した。（日本読書新聞　7月6日）

「**図書選定制度**」をめぐる文部省読書指導分科会委員と日本書籍出版協会との話合いは折合いがつかず，分科会委員の一部に改訂論がおきている。（図書新聞　7月11日，週刊読書人　7月13日）

第41回（34年度上半期）**芥川賞，直木賞**の選考委員会は21日開かれ，受賞作品をつぎのとおり決定した。

芥川賞　斯波四郎「山塔」（早稲田文学5月号）
直木賞　渡辺喜恵子「馬渕川」（光風社発行）
　　平岩弓枝「鑿師」（大衆文芸　2月号）

芥川賞選考委員は滝井孝作，佐藤春夫等11氏で，第1次選考で上記「山塔」のほか，北杜夫「谿間にて」，佃実夫「ある異邦人の死」，古田芳生「三十六号室」の4篇が残っていた。また直木賞選考委員は海音寺潮五郎，村上元三氏等8氏で，第1次選考で上記2作のほか，池波正太郎「秘図」が残っていた。（日本読書新聞　7月27日）

—8月—

教育課程の改訂にともない，小学校の教科書が36年度から変るので，文部省の教科用図書検定調査審議会は，**新教科書の検定**をおこなってきたが，4日第1次審査の結果を発表した。今回は小学校1年から4年までの分で，23社から286点を申請したのに対し，無条件合格は1点もなく，条件付合格が210点（73%），不合格が76点（27%）もあった。教科別では，算数，理科に比べて社会，国語の合格率が低く，とくに社会科の不合格（37%が目立っている（朝日新聞　8月5日）

全国学校図書館協議会他主催の第10回**全国学校図書館大会**は，6～8日間早稲田大学講堂その他でおこなわれた。今年の主なテーマは10年の反省と今後の進路，人格形成のための読書指導の方策，資料を活用した学習指導法の研究等で，約50の分科会に分れて討議をおこなった。（週刊読書人　8月17日）

第5回**江戸川乱歩賞**は，新章文子氏の長篇「危険な関係」が受賞した。（週刊読書人　8月17日）

27日，文部省は現行の「図書選定制度」をとりやめて，「**図書目録制度**」に切りかえることにきめ，日本書籍出版協会にその案を提示した。（週刊読書人　8月31日）

—9月—

3日，日本出版クラブで**読書普及推進協議会**準備会が業界団体代表委員30名出席のもとに開催され，規約その他が審議されて，正式に発足した。参加団体は日本書籍出版協会その他業界7団体である。（週刊読書人　9月7日）

文部省は7日，**図書目録制度**に関する省令を公布，施行すると共に，「図書目録登載申し出で要領」を告示，「図書目録制度」のスタートをきった。この制度は日本書籍版協会の主張を大巾に織りこんで居り，9月末目録第1号が出る予定であるが，岩波書店などの一部有力出版社は申請をおこなわないもようである。（朝日新聞，毎日新聞　9月8日）

長野県のP．T．A．母親文庫10周年を記念した**本を読む母親の全国大会**が20日，長野市で開催された。この大会には全国から約6,000人の母親が参加，市内の小学校，市民会館等で11の部会に分れ，臼井吉見，円地文子氏等11名の作家を講師として活発な討論がおこなわれた。この大会は長野県教育委員会，長野県図館協会，長野県P．T．A．母親文庫運営協議会等の主催で，読んだことを皆で話合い，また文庫を通じて母親たちと深いつながりをもった作家11名を招いて母親たちの読書熱を深めようという趣旨の会であり，マンガや週刊誌の児童たちへの影響，家庭育児の問題，女性の在りかたについて，農村と都市の母親たちのちがい等，幾つかのテーマを出し合って話合がおこなわれた。（朝日新聞　9月20日）

（北島武彦　編）

会　　報

常任理事会　（8月4日）

報　告

1．第4特別委員会は研究に着手。

2．第2回研究大会紀要「読書とマスコミュニケーション」は6月18日牧書店から出版。

3．読売新聞社が賛助会員として入会。

審　議

1．本年度研究大会は11月14日（土）15日（日）教育大学で開催。主題は「マスコミ時代における読書教育」。

2．会員の研究費補助は，10月末の申込〆切を待って決定する。

第6回公開研究会　（9月4日）

別項参照

常任理事会　（10月1日）

審　議

第3回研究大会要綱を既報のように決定。

常任理事会　（10月19日）

審　議

1．大会予算の承認

2．大会事務分担の決定

3．大会日程第1日午後4時から理事会，5時から懇親会を追加。

道徳教育実践講座

編集委員
稲富榮次郎
遠藤五郎
勝部真長
阪本一郎
滑川道夫

道徳教育の新しい発足をめぐって是非の論が世をにぎわしているが、今日の社会情勢に即応した真の新しい道徳を通して追求された道徳観を経とし、現代社会の道徳的要請を分析して得られた道徳教育を緯として、総合的でしかも実証的な研究にまたねばならない。本書は実証的研究の成果を各巻の骨子として関係学界により総合的検討が加えられたものである

全8巻

1 道徳教育とは何か
2 道徳教育の内容と方法
3 道徳教育の指導計画
4 家庭における道徳指導
5 十二年生の道徳指導
6 三四年生の道徳指導
7 五六年生の道徳指導
8 中学生の道徳指導

A58ポ二段組　各330円

日本読書学会
読書による人格形成　¥580

石山脩平　波多野完治　阪本一郎
読書とマスコミュニケーション　¥290

阪本一郎
読書指導ハンドブック　¥850

滑川道夫
読書指導　¥780

阪本一郎
読書指導の手引　¥200

阪本一郎
教育基本語彙　¥780

滑川道夫
新しい国語教育　¥350

講座　文学教育I
文学教育の目的と方法　¥300

講座　文学教育II
文学教育の歴史と現状　¥300

講座　文学教育III
文学教育の実践的構想　¥300

倉沢榮吉
改訂作文の教師　¥390

柳内達雄
作文指導の技術　¥280

片岡並男
文法指導の実際　¥480

片岡並男
文法と表記法の要領　¥580

須藤克三　島田武雄　松丸志摩三
村の社会教育　¥250

牧書店
東京　新宿　揚場町　振替東京　196483

Vol. IV, No. 2 November, 1959

THE SCIENCE OF READING

Edited by **The Japanese Society for the Science of Reading**
c/o The Faculty of Education,
Tokyo University of Education, Japan
President : Shuhei Ishiyama

CONTENTS

A Reader Who is a Non-reader *Zenmaro Toki* 1

Original Articles

Measurement of Emotional Process in Reading
Fujio Uruno & Takahiko Sakamoto 4

On Reading Guidance by Related Materials
Fumio Hida 11

A Study on Readability (An Adaptation of Cloze P rocedure)
Kanji Hatano & Ikuko Ogasawara 16

A Study on Reading in Children stopped on Half Way
Keiroku Okamoto 24

Comic Interest in Pupils *Ichiro Sakamoto* 32

Voices from Members 46

Materials

Reading Activities among Mass Communication and their Survey
Kaoru Hirasawa & Takeo Urata 48

How Are High School Students Reading Popular Books ? (2) 53

Bettina Ehlrich : Story and Picture i nChildren Books 58

The Map of the Reading World 62

Official Notes 64

第 4 巻　第 2 号
<通巻第12号>

昭和34年11月10日 印刷
昭和34年11月15日 発行

定価 120円

東京都文京区大塚窪町24
東京教育大学教育学研究室内
振替東京3213番
日本読書学会
代表　石山脩平

編者

発行者
東京都新宿区揚場町1
牧　義雄

発行所
株式会社 牧書店
東京都新宿区(牛込局区内)揚場町1

IBM 6655

印刷・文教印刷株式会社

昭和三十四年十一月十五日発行（年四回発行）
昭和三十一年十二月二十七日国鉄特別扱雑誌　第三七三号